
逢魔が時！

高城来夏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

逢魔が時！

【Nコード】

N1341Y

【作者名】

高城来夏

【あらすじ】

およそ千年ごとに交互に訪れる「生の刻」と「魔の刻」。

生の刻から魔の刻へと移り変わる現代を生きる少年、成瀬巡が出会ったひとりの少女（幼女）。

彼女は人ならざるもの、物の怪だった。

巡と物の怪たちとの交流を描く、ライトシリアスほんのりコメディな、半オムニバスファンタジー。

以前に自ブログと自サイトで公開したストーリーを、加筆修正の

うえ順次公開。

完結済みのものですが、修正が多いのでのんびりまったりと更新予定です。

第五話で一区切りです。

以降の続編などは書いていないので、それが事実上最終話となります。

掃除も済ませて終礼も終わった放課後。

放課後はクラブ活動のある児童以外は速やかな帰宅を推奨する『私立藤乃木小学校^{ふじのぎ}』の校庭は、今はサッカークラブの活動で賑わっている。その面々を時々横目で見ながら、彼は教室で本を広げている。

物静かな文学少年。

に見えなくもないが、実際に机の上に広げていたのは「山菜・野草」のミニ図鑑だ。

「なんだー、お前らまだ残ってたのか？ 用事がないならさっさと帰れ」

教室で無駄話に盛り上がりを見せていたクラスメイト数人は、のんびり教室に入ってきた担任教師を見とめて「はい」とお行儀良く返事をしてみせ、仕方ないとばかりに教室を後にする。さよーならー、と間延びした挨拶がお決まりだ。

「で、成瀬。お前はなにやってんの」

歳若い担任教師に広げていた本を覗き込まれて、^{なるせめぐる}成瀬巡はパタンとそれを閉じた。

「山菜」？」

首をひねるような仕草を見せた担任、^{あさひなたかゆき}朝比奈高之は、ああ、と思出したように屈めていた背筋を伸ばす。

「もしかして、来週の実習のか」

言われて巡は素直に頷く。

「予習を」

しゃあしゃあと言い放つ少年に、朝比奈は微妙な苦笑いを返す。

「予習結構だが、それはむしろあんちょこってヤツだろが」

来週の実習、と朝比奈が言ったのは、週明けにある家庭の授業での実習だ。

誰にも聞かず頼らずそこいらにある草や木の実を自分の判断で持ち寄り、極力食べられるものは食べる。食せるものが何割あるかというちよつとした実験でもある。

このおかしな実習案を出したのは、朝比奈本人だ。

巡の通う藤乃木小学校では、授業案は担任に一任されている。一任と言っても、もちろん主任、教頭の検閲は入る訳だが、よほどやる気のない案以外は、するりと通ってしまつゆるい校風だ。良い案に関しては、学年を通して採用されたりもする。

それなりに自由だが、教師の技量が試される環境でもある。

もつとも検閲を通ったこの実習、せつかくの家庭の授業でもつと華やかなそれらしい料理を作りたい女子には大変不評だが。菓子達の洋風料理だのを実習で作りたいお年頃、六年生だ。食えるんだかそうでもないんだかわからない葉っぱや木の実を煮たり焼いたりしたい生徒はそれほど多くない。

将来的に役に立ちそうなことほど、子供たちにはつまらないものなのは、世の定説。

まあともかく、今回の実習に関して言えば、予習をするというのはつまりカンニング行為にあたるといふ訳で。

「別に、実習で見たりしないよ」

「そーゆう問題か」

実習では、二時限連続である時間割の、最初の一時限を校外での収穫に当て、あとの一時限で調理をする計画になっている。せつかくだから、食べられるものを収穫したいと考える者がいるのももつともで、巡のように放課後の教室で堂々とはなくとも、隠れて下調べをする熱心な生徒は他にもいるだろう。だから朝比奈も、深く

は突っ込まない。

「まあいいや、お前もさっさと帰れよ」

授業が終わったなら、用事のない者は居残り寄り道せずにまっすぐに帰る。これはこの学校でなくとも、普通にありがちなルールだ。仕方がないから、巡も読んでいた本を鞆にしまつて席を立った。

「先生、さようなら」

「はいさよーなら。下見とか言つて寄り道するんじゃないぞ」
ぎくり。巡、図星をつかれた。

「夕方つてのは、魑魅魍魎や妖怪どもと出遭いやすい時間帯だつて言われるからなー」

にこやかに言う担任教師に、巡はなんとも微妙な視線を送る。魑魅魍魎という言葉はよくわからないが、妖怪はわかる。それがいわゆる、フィクションの物語の中でしかお目にかかったことがない存在であることも。

「怪しいヤツを見る目つきをするな」

怪しいヤツを見てるんだから仕方がない。

「昔から言われてることだぜ。まあ、夕暮れ時つてのは、人の心が狂う、犯罪の起きやすい時間でもあるつてこつた。変な事件に巻き込まれないように、とつとと帰りなつて話。オレはまだマスコミに退路をふさがれたくはねーぞ」

人の心が狂うとかはいまいちわかりにくいが、言いたいことは何となくわかつた。

しかし「まだ」つて、いつか未来ならいいんだろうか。ていうか、建前でももう少し自分の生徒を心配する発言は出来ないだろうか。巡はぼんやりと思う。

「気をつけます」

それだけ言い置いて、巡は鞆を肩からぶら下げて教室を出た。

「メーグー、帰る」

誰もいなくなった六年一組の教室に、ひょっこりと顔を出した少女がひとり。

くるりと見回す教室には、もちろん、だーれも残っていなかった。「あれえ？ 部活ないから一緒に帰ろうって言っておいたのに……」巡のふたつ上の姉、芽衣^{めい}だ。

暇な日を見つけては、わざわざ隣の敷地の中学校から顔を出す、弟大好きブラコン姉。

完全エスカレーターではないが、小中高と隣接した場所に立つ藤乃木学園グループにおいて、その中学に通う多くの生徒はこの小学校の卒業生だが、卒業して二年も経つのに、未だに我が校のような顔でほつき歩くのは、この芽衣^{めい}くらいのものだ。

まとめても、すぐに解けてしまいそうなサラサラのストレートヘアを指にクルクル巻きつけながら、芽衣は唇を尖らせる。

「最近メグって冷たいよねえ。寂しいなあ」

いじける素振りで不満を漏らしてみたところで、他に誰もいないから意味がない。

独り言の多発には気をつける。

そしてそんな姉との約束などキレイさっぱり忘れている弟、巡の方はというと。

担任の注意など聞くはずもなく、学校の裏山の雑木林へと足を運んでいた。

別に、実習にそんなに真面目に取り組みたいという情熱があるわけではないのだが、やはりせっかくむしり取って行くのなら、食べられるものの方がいい。自分の選んだものが食えない部類に分類さ

れるのは、ちよつとシャクに障る。一応彼にも、なけなしのプライドのようなものはあるのだ。ウケ狙いに走れる性格だったなら、世渡りの面で将来有望なのだが。

夕方とは言っても、夏も間近な6月の放課後は、まだ太陽が眩しい。今日は天気がいいから、ちよつと暑さも感じるが。

朝比奈の言った、人の心も狂わせがちだという夕暮れ時。
それを俗に、逢魔が時、と言うのだが。

今のこの明るさが、そんな怪しげな雰囲気など、まったく言っていないくらい感じさせない。もう少し日が落ちなければ。雑木林中はそれなりに薄暗いが、それは夕闇のせいではなくて、単に木々の作る日陰のせいだ。

一度は鞆にしまった図鑑を取り出しながら歩く。
腰のあたりの高さにある鞆をあさっていたせいで、目の高さくらいの空間をふさぐ細い木の枝に気付くのが遅れた。

危ない、とギリギリでかがみこんで、その枝をくぐり抜けた後に背筋を伸ばして。

次の瞬間、バサリと目の前に降ってきた何かに驚く余裕も無く、巡はその物体にボスンと顔を埋めてしまった。

「ぶっ……」

柔らかい、枕のような布の感触。

二秒ほど固まってしまった後で、慌てて半歩退いた。が、目の前にある物体が何なのか、目視できない。

さらにもう半歩下がってから『それ』をマジマジと眺めた。上から下まで。

なんだ、これは。

見たままを言うなら、それは、少女。というか幼女。

そこいらの幼稚園にでも通つていそうな若い少女が、絡み合った枝に器用に下半身を支えられて、逆さまにぶら下がっていた。

芽衣のようなまつさらストレートではなく、ふわふわで茶がかった長い髪。

その髪をゆらゆらと揺らしながら、少女は幸せそうな顔で眠っている。ように見えた。逆さ吊り状態で、その顔は微妙に笑っている。「パンツ丸見え……」

真っ白な肌着らしきものは重力にしたがって盛大にめくれ、巡がこれまで実際に目にしたことのない形状の、ふつくとギャザーの入った下着——いわゆるかぼちゃパンツ——が丸出しになっていた。

なんでこんなところに女の子が。

なんで幸せそうにぶら下がってるんだ。

大体、いくらちょっと余所見をしていたからって、コレに気付かない訳あるか。ずり下がって来たにしたって、こんなのが進行方向のそう高くもない木の枝に絡まってたら、もっと早くに気付くはずだ。さっきまで確かにいなかったと思うのに。雑木林のマジックだろうか。

というか自分は今、このパンツに顔面から突っ込んだのか。いやパンツはともかく、何が何だかわからない。

巡の思考の回転は続く。

そう、往々にして変化とは、唐突にやってくるものだ。

——これが、巡と『少女』との出逢いだった。

とりあえず、だ。

未知との遭遇を果たした巡、思いつく選択肢はふたつあった。

とにかく少女を枝から下ろしてやるか。もしくは、見なかったことにするか。

迷わず後者を選びかけた。別に枝に絡まって難儀している訳でもなさそうだし、むしろ幸せそうな顔で眠っているのを、起こすのも申し訳ない。

そうだ。知ったことではない。

しかし、微笑む寝顔で逆さ吊りになっていた少女が、うつすらと瞼を開き始めた。

手遅れだ。逃亡失敗。

いや、その場で踵を返せばまだ間に合ったのかもしれないが、開きかけた少女の瞼をうっかり注視しているうちに、数秒にも満たない機会を逃してしまった。

間をおかずにパカンと開ききった大きな瞳は、逃げ腰だった巡の姿をしっかりと捉えていた。

「おお」

逆さ吊りの少女。ニヤリと満面の笑みを作った。

「ひさしぶりだのお」

ひさしぶり？

お前なんか見たことも会ったこともない。

声にできずに心の中だけで反論する巡にはまるで構わずに、少女は下半身に絡まっていた枝から、実に簡単にスルリと抜け出した。

今までずり落ちなかったのが不思議なくらいの滑らかさだ。

そのままクルンと半回転して、ストンと地上に着地する。

幼児のクセに器用な。いや、何でも体得するのが早い幼児なら、これ位のことは朝飯前なのか。そうなのか？

着地した時に巡に背を向ける形になった少女は、元気にクルリと振り返った。

「元気にしていたかの」

ニコニコと巡を見上げる満面の笑顔。

「……」

返事をしていいものかどうか判断できない。

「元気じゃなかったのかのー？」

笑顔のままでこくりと首をかしげる仕草はまったくもって普通の少女のそれだが。普通の少女が林の中で逆さ吊りになっているのを見たことはない。つまりは普通でないということでもいいのか。色々なことがおかしいと認識しつつも、どういう反応が正しいのか、巡にはわからない。

「誰だ、お前」

結局、ひねりも何もないそんな一言が口をついて出た。

見た通り自分は元気だが、見たこともない幼児に、そんなお伺いを立てられるいわれはない。木の枝に絡まって逆さで熟睡する知り合いなどいないはずだ。心当たりがない。

「なんだ、冷たいな。……まあそうか、人間はいちいち面倒くさいからの」

齢十年に満たなそうな少女、まるでこの世を悟ったような口調だ。「人間と話をしたのは、実に久しぶりだ。ぬしという個人に会ったのは、初めてかもしれんがの。どうだ。人間は元気かえ？」

「……」

言動が、ヤバいような気がする。というか、何かを言われてもそれが意味のある言葉として頭の中にまで届かない。

朝比奈先生、怪しいヤツ扱いしてしまつてごめんなさい。

言いつけを守らなかつたせいで、本当に怪しいヤツに出遭つてしまいました。

巡は、ジリ、と足を後退させた。

こんなおかしなヤツと、係わり合いになるのはマズい気がする。

巡は、クルリと踵を返すと、物も言わずにその場から駆け出した。見なかったことにするのは手遅れになったが、とりあえず気持ちが悪げを打った。走りにくい雑木林だが、全力で逃げれば幼児ごときに追いつかれるはずはない。ここで逃げてアレの視界から外れることさえできれば、きつともう会うこともないだろう。そう思いたい。家や学校の近所というのが少々不安要素だが。

「急に走り出すとは何事だ」

耳元で、声が聞こえた。

「うわああああ!!」

少女が、いつの間にか自分の背中におぶさるように張り付いている。巡は自然の成り行きで急停止した。

「せつかく会えたのに、話もしてくれんのか。大体、今逃げても困るのはぬしなんだがの」

どうやって追いついたのか。どうやって走る巡の背中に飛びついたのか。まるで気付きもしなかった。

さっぱりわからない。気味が悪い。普通じゃない。

「お前、誰だ! お前なんか知らない!」

「だーから、ぬし個人と会うのは初めてだとちゃんと言っておるだろ。永い時間を眠って過ごすしかなかったわちを、少しくらい歓迎してくれても良さそうなものだ」

何を言われても、頭の中に浸透してこない。ちゃんと日本語でひとつひとつの言葉は聞き取れるが、少女の言い回しが、ひとつの流れて理解できない。こういうのを電波というのだろうか。

「何を言ってるのかわからない！ はなれる！」

自分を背負ったまま怒鳴る巡に、少女はうーんと困った顔を見せる。

「そりゃあ、きちんと話も出来なければ理解のしようもあるまいよ。まだ先駆けのこの時代、ぬしがわちと出会ったのも、その力ゆえの縁なのだからして、話くらいしても損はないと思うぞ」

言いながらも、少女はフウとやけに大人びたため息をもらす。

「もつとも、いつの世も人間というのは、他のものを受け入れがたい性質をしておるがの。そうでなければ、いくら魔の刻が過ぎたとはいえ、こんなにわちらが隅に追いやられることもなかったろうに」

さつきから、巡には言っていることがまるでわからない。

どこぞのオカルトマニアが喜びそうな単語が聞こえなくもないが、それを普通の小学生である巡が理解するのは難しい。

ストーンと、少女は巡の背から飛び降りて、素早く彼の正面に回った。

「ぬしにもわかりやすいように、結論から言ってやろう」

相変わらずの、満面の笑顔。しかしこの状況では、つられて笑い返すこともできない。

「わちは、人間ではないよ」

きた。

きたきたきた、来ました。

私は宇宙人ですとか異世界から迷い込んだついでに世界を救うとか、そういう発言が得意な人種か。もちろん巡はそういった世界に明るいわけではないが、自分の交友範囲に存在しない怪しいタイプであること位はわかる。余計な心配だが、この子の親は自分の娘がそういう発言を知っているのか。それとも親兄弟が伝説の戦士か。

「世も末だ……」

つい、つられるように難しい言葉で呟いてしまった。

「そうなの。生きる者の全盛の世は終わり、これからは魔の刻となる。その移り変わりの時代。今はまさに、逢魔が時、なのだよ」

巡の言葉を受けて正体不明の少女がにこやかに答えたらしいが、彼はそれをやけに遠くで聞いている感覚があった。

結局やっぱり巡には、言葉の意味はさっぱりわからなかった。

言っている意味がわからない。

そう呟いた巡に、少女はやれやれと苦笑しつつ左右に首を振った。
「物わかりが悪いの〜」

その言葉に、いささかムツとする巡。

「人間じゃないって言うなら何なんだ」

どこからどう見ても人間にしか見えないじゃないか。まあちよつと運動能力が高かったり、木にぶら下がったりはしていたけど。

少女は、一瞬フツと遠くを見るような目を見せる。こういう見た目に似合わない大人びた仕草も、巡のカンに障るというか、馴染めないというか。おおよそこの年頃の少女がやりそうにない振舞いを自然とやられてしまうと、彼の感性が追いつけない。大人びた仕草を好む、ちよつとおませな女の子とかいうのとは、まるで違うのだ。余裕のありそうな笑みとあいまって、その様子を例えるなら「老獺」という言葉が似合うだろうか。もちろんそんな単語は巡は知らないが。

「さあ、何なんだろうな。人間にはよく、魔物だの鬼だのと言われておったかの」

これのどこが魔物だ。それに、鬼なら角でも生えていそうなものだ。

巡は、ごくごく一般的に魔物だの鬼だのと呼ばれる架空の姿を思い描いた。もつとも、魔物とひと括りにしてしまうと、それは曖昧すぎて良くわからない。けど少なくとも、魔物というのは恐ろしく人とは違う姿をしているものというのが巡の認識だ。

「ああ、妖怪とも言われたな。わちは、遺伝子を継承してこの世に『生きる』存在ではないからの。生きてもないし死ぬことも出来

ん。そんな存在だ」

つきあってられない。

魔物だの生きてないだの、意味不明な言動を臆面も無く言い募る幼児の相手など、これ以上していただけない。

「妄想なら自分の頭の中だけにしてくれ。僕は帰る」

クルリと振り返って、歩き出す。

「そうだの。立ち話もナンだし、ぬしの住処へ連れて行け」

「冗談じゃない!!」

巡は年相応に大人気なく、マジで少女を睨みつけた。絶対にそれは許さないと、その表情で語っている。しかしあれだけ全力で走る巡に取り付いてきた少女だ。本気で家まで来る気なのだとしたら、それを止める対策は無いように思える。

「いやいやそれはぬしが困る。わちの話は聞いておいた方がいいと思うがの」

「聞きたくない!」

何が一番苦手って、話の通じない相手が一番苦手だ。

巡はここに来て痛感する。今までそういう相手に出会ったことが無かった。否と申し立ててもスルリとかわされてしまうような経験など無いのだ。いやもちろん、違う嫌だと思いうことを聞き入れてもらえなかったことは何度だってあるが、それにはちゃんと、それなりの理由というものがある。今回相手にしている少女は、そういうケースからはかけ離れているのだ。

何を言っても、のれんに手押し。

理解しようがしなかるうが、おとなしく従おうが反抗して怒鳴ろうが、目の前の少女は好きなことを言い、好きなようにする。きつとそのニヤニヤした笑みを顔に張り付かせたままで。巡には、彼女の電波話を聞く以外の選択肢が与えられていないらしい。

もしもちゃんとした理由があるのだとしても。

それは今、巡の理解の範疇外だ。

結局巡は、その場から脱兎のごとく逃げ出した。

再び追いつかれてしまうのかもしれないが、今の巡には、他の方法を思いつくことが出来ない。こういうのとちよつとでも係わつたら、絶対にろくな結果が待っていない。

誰かに教わつたわけじゃない。そう”思った”のだ。本能と呼べるかもしれない部分で。

「仕方のない奴だの……」

その場に立ち尽くしたままの少女は、その場から巡を追いかけるでもなく、ただ走り去る彼の姿を見送っていた。

何なんだ、あの幼児は。

巡がそう思ったのは、今日何度目だろう。

家に駆け戻る間にも、時折ちよつと道を変えてみたりして、何度も振り返ったり、あたりを見回したりした。背後にも気を遣う。また気付かないうちに背中にはぶら下がっているかもしれない。

そんなこんなしながら、いつもの倍以上疲労して、巡は家の前までたどり着いた。

あがつた息を整えながら、何かの気配がないか、キヨロキヨロと家の周りを見回す。そして大きく振り返って、背後も確認した。よし。誰もいないことを確認して、家の門へと向き直った。

「ここがぬしの家かの」

「――、……………ッ！」

目の前の開いたままの門の内側、ちよつとした庭ともいえる芝生にはめ込まれている、玄関へと続く石畳の上に、少女が立っていた。

「どッ……」

どうして、とか、どうやって、と言いたかったのかもしれない。けれど動転した巡の口からそれらの言葉は出てこなかった。

「一度話をした人間の気配を追うのは簡単だ。それにわちはこう見えて、ぬしらのように確たる器は持たん存在だからの。重力の束縛から逃れることも可能だし、形を変えることだってできなくはないのだぞ。まあわちはちと、変化の類いは苦手だが」

ぬしは今いち信じられんようだからの、と、少女は勢いをつけることも無く、その場からヒョイと小さな門の上に飛び乗った。直立の姿勢を崩しもせず、スツと飛び上がって音も無く一メートル以上の高さがある狭い門構えの上に、ストツと揃えた両足で立ったのだから、それは尋常な能力ではない。

驚愕で目を見開く巡を尻目に、さらに少女はトンとその足場を蹴った。

一瞬後には、五メートルほど続く石畳の奥にある玄関の遙か上、二階建ての屋根の上に、その姿があった。

「な……ッ！」

「どうだ？ 人間にはなかなかできることじゃなかる？」

ストーンと放物線を描いて、少女は再びこともなげに巡の目の前に飛び降りた。

驚いて一歩後退した拍子に、巡は体勢を崩して尻餅をついてしまう。少女は続けざま、そんな彼の傍にスツと近寄り、その身体をこともなげにひょいと抱き上げてみせた。

「ちょ、あ、……う、……ッ」

支えられるような安心感がない。

まるで宙を浮くような感覚に、巡は身体を硬くしてただ呻いた。

物理的に、彼女の小さな身体で倍ほどの身長がある巡の身体を支えるのは難しい。土台も小さければ、リーチも短かすぎる。けれど彼女は、純粹にふたつの掌だけで、巡の身体を”持つて”いた。

「ぬしの身体がバランスも崩さずにわちのちいゝちゃん手の上に収

まっておるのは、わちの『魔』の部分の力ゆえよ」

ニヤーっと笑ったあとで、少女は巡の身体をほいっと地面へと戻した。いささか気遣いのない降ろし方だったが、それに対する感想を持つ余裕すらも、今の巡にはない。

本格的に、それは幼児に出来ることではない。いや、大人だって、多分。

人間じゃない、なんてそんなありえない話を、本気で信じろというのか。いや、人間だって、何か特別な訓練でも受ければ、そのくらいのこととはできないわけじゃない。いや絶対できるはずだ。できなくちゃいけない。そうでなければ、目の前にいるこれはなんなんだ？

巡はぼんやりと座り込んだまま、目の前で胸を張る少女を眺めることしか出来なかった。

だけど人間じゃないって。

人間にしか見えないのに、人間じゃないってどういうことだ？
かといって、犬や猫みたいな動物だの、昆虫だのという訳でもない。
少なくとも今はつきりわかるのは、巡にとって今まで見たことも
会ったこともない種類の『人間じゃないもの』ということだ。

「人間じゃないって、魔物とかって、じゃあなんでそんなのが急に
僕の目の前に出てくるんだ！」

混乱する巡に、少女はニヤニヤと笑いながら答える。

「だからそれを説明してやろうというのに、ぬしが逃げるから余計
な手間になるんだろうが」

「……ッ」

当然の反応だ。

そう言い返そうとした瞬間、玄関のドアがガチャリと開いた。

「巡なの？ なあに？ 家の前でそんな大きな声で」

ひょっこりと顔を出したのは、巡の母、由美香^{ゆみか}だ。

「母さん」

「やっぱりメグね？ んん？ お友達？」

巡が食って掛かっている相手の少女を見とめて、由美香はキョト
ンと彼女を眺める。

「違……」

「そうだ、お友達だ。なんだ、ぬしの母親かの。これはまたぷりて
いーなおなごだの」

専業主婦である母が家にいるのは当然で、玄関前で騒いでいれば
発見されてしまうのも至極当然だ。それを失念していた巡は母と少

女を交互に見てひとり焦るが、「ぷりていー」とか言われた由美香の方は、あからさまに喜色満面になった。

「正直ない子ね」。メグったら、こんなところで立ち話してないで、さっさと家に入りなさいよ」

巡は頭を抱える。

少しは疑ってくれないか、母親。こんな歳の離れた友人を見たことなんてないはずだ。その辺で出会った子と、速攻打ち解ける性格でもないのだって知ってるだろうに。けれど、だからこそやって玄関前に顔を揃えてしまっている限り、母親から見てお友達にしか見えないのも道理だ。

得意気に『お友達』だと、巡の足に腕を回す少女を振り払いにかかっていると、玄関で別の気配が動いた。

「メグ、帰ってきたの？」

うわ。巡はげんなりとした顔になる。

母の背後から顔を出したのは、姉の芽衣だ。別に姉を嫌っている訳ではないが、さらにこの場の混乱を増幅させそうな存在ではある。「メグってば、私よりも先に帰っちゃって、どうしてこんなに遅くなるのお？……あら」

ブンブンと足を振る巡に引っ付いている少女を、ぼんやりと眺める。

「もしかして、デートだった？」

バカをいうな！

心なしか寂しそうな表情を浮かべる姉。

誤解だ寂しがるな！ いや、そうじゃなく！

「部屋に行く！」

これ以上ここでやいやいと言いつても仕方がない。そうでなくとも騒がしい家族がここに二人もいるのでは、とてもお話し合えないて出来る訳がない。そもそもなんでお話し合いたいしなければならぬのか、その点が巡には本当に謎だったが、直面してしまつた出来事は、解決しなければどうしようもない。

「おやつないから、買って来たらお茶持つて行くからね」

少女を引きずって玄関を通過し、二階にある自室に向かう巡に、由美香が声をかける。が、巡はそれに返事もせずに、ズンズンと階上を目指した。

自室に滑り込み、ボタンと勢い良くドアを閉める。

「最近の家は縦にでつかいの。それに木の匂いはするのに、姿が見えないではないか。どうなってるのだ」

巡の家は、木造モルタル二階建てだ。けれど確かに、目に見える場所にあからさまに発見できる木材は少ない。この家から木の匂いとやらを感じるこの少女は、一体何なのか。

「お前、何なんだ。なんで僕をつけ狙う？」

「人聞きの悪い……」

詰め寄る巡に、少女は呆れた顔を見せながらも、トコトコと部屋の奥にあるベッドに向かう。そこにボスンと跳ね上がって腰掛けた。どうやらそこが一番居心地が良さそうだと狙いを付けたらしい。

「わちがぬしと会ったのは、別にわちが狙ったからではないよ。むしろ、原因はぬしの方にあるんだがの」

「何だよ、それ」

「ぬしがわちを発見したのは、ぬしが持つ『逢魔^{おうま}』の力ゆえだ」
「逢魔？」

巡は、オウム返しに聞き返すことしか出来ない。

「わちが人間ではないということは理解できただろう。そこから話を進めるがな。この世界は、千年ごとに時代を変えて、ふたつの存在の安定を保ってきたのだよ」

生の刻と、魔の刻。

少女はふたつの時代をそう称した。

「生の刻とは、ぬし等のような命ある者たちの繁栄の時代を差す。そして魔の刻とは、わたらのような器や命を持たず、魂だけを持つ存在の繁栄期のことだ」

命が無く魂だけ、というのが、巡には言葉だけでは理解できない。だって普通に動いてしゃべってるじゃないか。

「まあ疑問もあるうが、大筋だけは最初に理解してくれ。つまり、これまで千年の間続いた生の刻が終わりを告げ、これからは魔の刻に移行する、その移り変わりの時代なのだよ、今は」

生の刻においては、少女のような『魔物』と称される存在は、力が弱まり、ひっそりと姿を隠す。対してこれから来る魔の刻においては、その立場は逆転する。

少女は、そう解説した。

「なんだそれ。じゃあ、これからの千年は、人間は消え去るとも言うつもりか？」

バカバカしいにも程がある。

が、少女はそんな巡の言葉には、首を横に振った。

「生きている者というのは、魂だけのわたらとは存在する力自体が違うからの。わたら魔の刻の住人には存在しない『生命力』を持っているから、消えてしまうことはないよ。ただこれからは、魔物と呼ばれる存在の力が強まる。それらを実際に目にする人間も多くなるだろうよ。少なくとも、人間と同じくらいの数はいるであろう魔物が、徐々に目を覚ましだす。そしてそれらが世界を闊歩し出す。まあ、時代の影響で生きている者の数は少しは減るかもしれんの。これからの千年は、そんな時代だ」

まあ良いではないか、と、少女は高笑いする。

「どうせぬしが生きているのは、せいぜい移行の期間だけではないか。その後の世界など、どうでも良からうよ」

「……移行？」

うむ、と少女は頷く。

「生の刻から魔の刻までの移行。これにはきつと百年くらいはかか

る。本格的な魔の刻を迎える頃には、今この世に生きている人間の殆どは、残っておらんだろうよ」

そう説明をされれば、そうなのかと思うしかないが。

実際に、百年後の世界のことなんて考えたってピンとこないが、だからといって「そんな未来の話なら、まあいいや」と笑い飛ばせる訳はない。だって今自分は、人間の危機を宣告されているのではないか？

「なんでそんなことが起こらなきゃいけないんだ」

食って掛かりそんな勢いの巡に、少女はプウ、と膨れてみせる。

「わちに怒るな。そういう仕組みなのは、どうしようもなかる」

「そんな無責任な」

これは世界の流れであって、少女のせいではない。そのような説明をされ理屈ではわかって、誰かのせいにしてしまいたい巡だ。聞かされた話の内容は、巡にとっては事件のようなもので、そして犯人のいない事件など自分には理解できない。天災のようなものと説明しても納得できるかどうか。

「……結局人間は自分本位だの。わちらは千年間もずっとこの時代を待っておったのだぞ。わちらの存在を隅に追いやって、記憶からも外してしまったのは人間の勝手ではないか。わちらはこの世に存在するしてはならんということか？」

そういうわけでは、ないけれど。

「昔から人間というのは、他の存在を許さなかったな。人間以外の生物の方が、人間より知能は少ないが、あるがままを受け入れてくれるだけ楽だの。人間は己が世界の王者とでもいうような顔をして、少し異なるものは徹底的に排除しようとする。そんな強い精神を持つ者が力を満ち溢れさせる生の刻では、魔物など殆どこの世に姿を残すことなどできん。ずっとわちらは、目に見えぬ存在となって眠って待つことくらいしか出来なかったわな」

少女はちろりと巡を睨みつける。口角をつり上げたままのそれはどこかあきれたような表情で、怒っているような素振りではなかつ

たが。

しかし、そうは言われても。

魔物なんてそんな存在、自分はこれまでこれっぽっちも知らなくて。いや、知ってはいたが、現実にあるものだなんて思いもしなくて。記憶していないことを人間自身のせいだと言われても、巡にはやはり素直に納得することが出来ない。

「これから増えるだろうが、まだ逢魔の力を持った人間は少ない。だが、いち早く時代の移り変わりを自覚できるぬしは幸運ではないか。しかも優しくいわちが、いちいち言葉で説明してやっているのだぞ」

ありがたがれとでも言うつもりか。

大体、巡には逢魔の力というのが何なのか分からない。

「わたちらの様な存在は、生ある者には視覚で捉えにくい。そんなわたちらを認識する力を『逢魔の力』というのだ。今は数が少ないが、これから世界が魔物を受け入れる体勢になれば、その力を持つ者も増えてくるだろうよ。それは生ある者が力を増すからではなく、わたちらの存在が強くなって、認識しやすくなるからだ。ぬしはつまり、生ある者の中でも敏感な方だったと、そういう訳だな」

「……」

一度に沢山の説明をされて、巡は混乱の渦の中にいた。即座に理解しろと言われても難しい。

「まあいい。本題はこれからだ。わたちがどうしてもすぐにぬしに説明をしたかった訳はな、今後ぬしが困る事態に陥るだろうなと思っただけでな」

そう言う割に、少女は悪びれもない様子でニヤニヤと笑っている。この少女、この表情がニョートルなのだろうか。

「いちどわちという存在と接触したからにはな、ぬしはこれから次から次へと生無き者と出会うことになるだろうな」

「!？」

「一度開いた力のフタは、二度と閉まらんのだよ。覚悟しておくと良いぞ」

覚悟と言われても！

巡は啞然とする。

「そんなバカな話があるか！」

「認めよ。そう深く考えることもない。わちのような、ちと人間とは違った存在との出会いがあるだけだ。賑やかになるなぐくらいに思えば良いじゃないか。なんなら知り合いを紹介してやっても良いぞ」

巡はめまいを覚えた。

考えれば考えるほど、混乱の渦に嵌まっていく。本当にこの幼女が人間ではないのかとか、そういうことさえ、どんどんわからなくなつて。

誰かが出てきて「冗談だよ」と言ってくれるのを、切に願った。もちろんそれは、叶うことはなかったけれど。

冗談だよ、と言ってくれる人間の代わりに、おやつを持った由美香が入ってきた。

「おまたせ」。天笠さんのとこの羊羹で良かった？」

近所の天笠あまがさ和菓子店は成瀬家の馴染みだ。にしても母、チョイスが渋すぎる。対して飲み物がアイスレモンティーというあたりが、何が何だか。

由美香は持ってきたトレイを一度巡の勉強机に置くと、壁際に立てかけてあったローテーブルをいそいそと部屋の中央に設える。

「かわいいのね。お嬢ちゃん、お名前は？」

ニコニコと笑う由美香に、少女もニコニコと笑い返す。

そしてクルリと、巡に向き直って囁いた。

「わちの名前、何がいいのかの」

「!？」

「わち、特に名前など持つておらんでの。ぬし、適当に決めてくれ」
「なんだって!？」

「そんなこと急に言われたって、無理に決まってるだろ!」

あくまでボソボソと。何かを囁きあう二人を、由美香はニコニコと見守る。

「ほれほれ、早く決めんと、母に疑われてしまうぞ。人間には普通名前があるモノだからの。わちが人間でないなどと、どう説明する気かの」

「~~~~ツ!」

友達として家に上がりこんだからには、名前くらい聞かれるのは当然かもしれないが、巡はそこまで考えていなかった。というか、相手に名前がないなどと、思いつきもしなかった。

でも名前って。

名前……。

……名前……。

「……………かぼ」

ようやく出た一言に、少女はくるりと由美香に向き直って笑った。

「”かぼ”だ」

「かぼちゃん？ 可愛い名前ね」

そうか？

「どこの子なの？ この辺じゃ見ないわよね。最近引越してきたとか。こんな夕方までお出かけしてて大丈夫なの？ おうちの方、心配してない？」

由美香、母パワー炸裂。

悪びれずに質問攻めにする由美香に、たった今かぼという名のついた少女はひたすら笑顔で対応した。

「家も家人もないから大丈夫だ。わちはずっと雑木林で木にぶら下がっていたからの。おかげで衣食住にも困る勢いでな。良ければここに住まわせてもらっても全然かまわんのだが」

おいおいおい！

母親にバラしたくないんだろなんて脅しておいて、台無しじゃないか！

相変わらず、巡の叫びは声にならない。

「あらまあ……大変なのねえ」

「母さん！」

「まあ別に、わちは人間と違って飲み食いせんでもちーとも困らんのだがの、やはり潤いは欲しいではないか」

そうねそうねと、由美香は頷く。わかっているのか、この母親は。「永い間寂しい思いをしてきたというのにの、この男は、すこぶ

るわちを邪険に扱うのだよ、母上」

「まあ……ごめんなさいね、私の教育、何か間違ってたかしら」

間違っているのはこれまでの教育ではなく、母自身の感覚ではないか。

「わちが人間ではないからと言っての。人間でなくたって、犬でも猫でもクンクンにやーにやーと鳴いていたら、つい連れ帰ってしまうのが、健全な子供の精神というものではないかのお？」

「ああ、そうね、そうよね。でもゴメンなさいね、私、子供たちが一度カモを拾ってきた時に、元の場所に戻して来なさいって怒っちゃったことがあったのよ」

数年前、それで巡は大泣きした。美しいというか、今となっては少々恥ずかしい思い出だ。

それはともかく。

人間ではないと自称する少女と、それを華麗にスルーする母。このやりとりが理解できない巡を、頭の固い人間と分類してしまっているいいものか。もっとも、巡は彼女が人間ではないという証拠のようなものを見せられている当事者だから焦っているが、案外母親という人種は幼い子供の虚言にはおおらかだ。自分の子供ならともかく「カモは野生だでな。その判断は正しいよ、母上。だがわちは渡り鳥ではないのにの」

「そうよね。いいわよかぼちゃん。いくらでも我が家にいてちょうだい！」

「母さん！ 何言ってるんだよ！」

「だってかわいそうじゃない。人間じゃないんなら別に大丈夫ですよ。養子縁組とかの必要もないんだし」

母、あなたの脳はブラマンジェなのか。

全部冗談だとも思っているのだろうか。いやそうなんだろう。だが、ここで母が冗談のつもりで了解してしまえば、本当にこの魔物はここに住み着いてしまう。ような気がする。

「じゃあ今日からご飯はひとり分余計に作らないとね。腕が鳴るわ

」。楽しみにしててね！」

由美香は上機嫌で、部屋を出て行った。

……そんな馬鹿な……。

一体どういいうつもりか。母もこの少女も。

本当にこいつがここに住みついたら母はどんな反応をするのかと、巡はただただ頭を抱える。その時になってやいやいと説明を求められても、巡にはどうすることもできない。もちろん、今ここで責めたてられたところで同じことだが。

「ものわかりの良い母上だの。とてもぬしの母とは思えん」

「冗談だと思ってるだけだ！」

多分、きつと。

「そつかの？」

そんな巡に、少女はただ笑う。相変わらずの余裕の笑みだ。

バレたら困るのは巡だなどと脅すようなことを言っていた割に、彼女はまったく正体を隠すつもりがない。むしろ積極的に告白しているあたり、わざとやっているとしたか思えない巡だ。

「ところで、『かぼ』か、なかなか良い名前ではないか。良く思いついたの」

よく言う。思いつかなかつたらどうするつもりだったのか。

彼女のことから、その時はその時でのりくらりとかわすつもりでいたのかもしれないが。結局自分だけがムダに慌てる羽目になるのは変わらないのだろうと、巡はため息を漏らす。

「考えに考え抜いた、お前にぴったりの名前だ。可愛いだろう」

半ばやけくそになって、巡は返す。台詞に反して、その表情と声音は大変に陰悪だ。

「可愛いか、そうだの。かぼか、かぼ……。うん、可愛い名前だの否。

巡はこの少女を初めて目にした時に最初に視覚で認識したものを、思いつきでその口上に乗せてしまったただけだ。

すなわち、巡の眼前に広がった「かぼちゃパンツ」を。

名前の由来がかぼパンであることなど知る由もない少女は、自分についた名前にご満悦なようだ。

聞きたいことなんてまだ山ほどある。

前途の多難を感じて、巡はふたたび深い深いため息をついた。

食ってる。本当に食ってるよ。

結局夕食の時間になってもかばを追い出すことが出来ず、巡は複雑な面持ちで一家の団らんの中にいた。

初対面で居候を申し出る方もアレだが、本当に夕飯まで用意する由美香もナニだ。それとも、今日一日のお泊りごつことでも思っているのか。これまで紹介されたこともない初対面の幼女なのに？

巡の父親は、単身赴任で家を空けている。だから現在家を守っているのは母の由美香で、あとは二人姉弟の芽衣と巡しかいないのだから、こんなに無用心でいいものか。

「最近の食べ物はよくわからんの。このやたら乳臭いトロトロしたのはなんだ？」

かばは、まるで生まれたときからの家族のように、躊躇も遠慮もなく夕食を楽しんでいる。

「それはシチューよ。食べたことない？ おいしい？」

「初めてだが、これは美味いぞ、母上。もっともわちは、基本的に人間の食べ物であれば好き嫌いはないがの」

何気に普通に会話が成り立っている。居候騒動を冗談だと思っているにしても、かなりノリが良い方と言えるだろう。

「かばちゃんって、人間じゃないって、じゃあやあ犬とか？ それとも猫なのかな」

芽衣ですら、こんな調子だ。

大体、人間じゃないとなれば犬か猫しか思いつかないのか、この姉は。

「犬も猫もマネ事くらいはできるが、あやつらと同じ飯を食わされ

るのはかなわんぞお」

かばは、何気にオヤジっぽい。

「で、かばちゃんって、メグの、か、彼女とかじゃないよね？」

芽衣、見た目幼児に真顔で質問。冗談ではなく、本気で確かめたいらしい。

「芽ー衣！」

「なっははは、カノジョとはあれだな、コイビトというヤツだな！それは無理だ。そういうのはきちんと人間の中から選んだほうがよからうよ」

それにしても、巡のように決定的場面を見たわけでもないのに、母も姉もかばが連発する「人間じゃない」発言を、怪しがりもせずを受け止めているあたりが、巡には理解できない。信用していないはともかくとして、しつこくそんなおかしいな発言をする少女を苦もなく受け入れているなんて。

夕食後、巡はかばを自分の部屋に押し込んで、夕食後の洗い物に精を出す由美香に詰め寄った。

「知らないヤツに夕飯まで作ってやるなんて、どうしちゃったんだよ。人間じゃないなんて言われて、変だと思わない？」

こんなおかしいのと一緒にいて平気な顔をしているなんて、巡には母や姉の感覚が、まったく理解できない。もしこの場に、留守にしている父がいたら、どう思うだろう。

由美香はそんな巡にニツコリと微笑んでみせた。

「じゃあ〜」

あまりにも、のんびりとした口調。

「メグがちゃんと、おうちに送り届けてあげればいいじゃない」

もっともな意見だが、それを出来れば苦労はない。が、由美香は無言のままの巡に、お構い無しに続けた。

「それが、できないんでしょ？」

ギクリ。

「ご家族のもとに帰してあげられない事情があるんでしょう？ それが出来ようならつくにしているんじゃない？ だとすれば、あの子には家に帰れない事情があるってことよね。例えば、本当に帰る家がないとか」

もしもまったく知らない子にいきなりまわり付かれているのなら、それを勢いであれ家に上げるような息子でないことを、由美香はよく理解している。何しろ母親なのだから。そしてもしも彼女がいわゆる普通の理由でただ家に帰りがつていないような状況なら、巡は由美香にそれをきちんと話すだろう。

「人間じゃないとか、そういうこと、あの子が言った時だって、あなたはあんな風にうるたえないわよね。それが、冗談なのなら」
ぼんやりしているように見える母親、これできっちり、巡のことを観察している。

「あなた、否定しなかったじゃない。お母さんは、それがどれだけありえないことでも、バカバカしく思えることでも、息子のことには信じるわよ。世界中が信じてくれなくてもね」

寛大すぎる母親、だろうか。

これほどに無心に、自分の息子のことを信じることができなんて。

それともまさか、巡のわからないところで別の計算でもあるとかでもそんな計算があったとして、それが何であるのか、それによって母にとって何か有益なことがあるのか、さっぱりわからない。

多分本当に、息子を信じているのだろう。

もしも本当に、ここに魔物がいると息子が言ったとしても、それさえも。

「じゃあメグ、一応確認するけど、かぼちゃんをうちに置いておくとして、それで困る人が、どこかにいるかしら？ 何か社会的に問題が生じる？」

巡は、首を横に振るしかない。

正直、かぼのことは何も知らない。知らないけれど、かぼの言うことを鵜呑みにするとすれば、彼女は現在天涯孤独で身寄りのない魔物だ。少なくとも、かぼのやってみせたあれやこれやは、とても人間のできることとは思えないし。もしも彼女の言うとおり、うちに居候させたとすれば、彼女が喜ぶ。それだけだ。魔物をうちに住まわせて、何か別の問題が起きるとしても、それは今の巡には想像だにできないことで。

「ならいいじゃない？」

「母さん！」

「かぼちゃんの話は、後でゆっくりと知っていくからいいわよ。それでももしも何か問題が起きたとして、お母さんはメグのせいになんかないから大丈夫」

それは充分すぎるほどわかっている。わかつてはいるが、そういう問題だろうか。

「女の子の家族が増えるなんて、素敵じゃない」

結局そこか！

すでに女二人男ひとりの三人家族の中にあって、さらに女が増えるのか。

第一、ご近所にはどう説明するつもりなのだろう。

「とにかく、あの子に帰る場所がないのなら、うちに置いてあげなさいな」

巡には、返す言葉がない。

母の発言は、この家において最大権力なのだ。

そしてだからこそ、家族のためにならないようなことは、決してしない母でもある。

でもあの子をなあ……。

ここでも巡は、ただため息をつくしかなかった。

ブラブラと道を歩く巡の後を、かぼはトコトコとついてくる。
悶々とした体の巡とは正反対に、かぼの表情は呑気なものだ。何
気を楽しそうでもある。

昨日の夕方からの騒動のせいで、巡は夜もまともに寝付けなかつ
たというのに、かぼの方は人間ではないと自称している割に、まさ
に爆睡状態だった。もっとも、最初に出会った時も幸せそうに眠り
込んでいたのだけど。

「大体、なんでお前はあんな木の上に絡み付いてたんだ」

後ろにいるかぼを振り返ると、彼女はキョトンと巡を見返した。

「別に、騒ぎが少なくて寝心地の良さそうなところを選んだだけだ
？ 何しろなあ、わちが眠りに就いたのは、これから生の刻が来る
という時期だったからの」

「何の関係がある」

なんだ、そんなこともわからんのか、とかぼはまた何かを悟った
ような表情になる。わからないもなにも、巡にとっては魔物などと
いう存在に出会ったのさえ初めてなのだから、その何たるかだって
わかりようがない。

「生の刻が来て魔物の力が弱まるとはいえ、全ての人間に魔物が発
見されないというわけではないからな。うっかり寝こけているうち
に、もしも生の刻にわちらが発見されて、それで騒動が起こったと
したら、人間の持つわちらに対する負の感情に勝てないからの」

うっかりすれば、そのマイナスのパワーにかき消される魔物も出
てくる。だから魔の刻に属する者たちは、生の刻には皆一様にその
姿を隠そうとするのだ、とかぼは語った。

「それにわちらは、生の刻の住人を脅かさないように、気を遣った
りもしていたのだぞ、これでも。急に見知らぬ物体が出てきたり

したら、人間は驚くだろ」

それをやってくれたではないか、昨日。それとも魔の刻になるのだから、もう解禁という訳か。

「かぼは、千年間眠りっぱなしだったって訳か？」

「いやあ、たまには目を覚めますがの。メグと会う前に目覚めたのは、うん、百年ほど前に一度……かの？　そうやって永いこと眠って待つしかなかった身なのだからな、少しは労われ」

と言われても、どのように労われればいいのか巡にはさっぱりわからない。

「む」

急にかぼが、表情を険しくした。

「なんだよ」

「これは……この匂いは」

これまでにない俊敏さで、かぼはグルリとかぶりを振った。

「あそこに見えるアレは」

かぼの視線の先にあるのは、成瀬家御用達の天笠和菓子店だ。

「あれに見えるはもしか、しゅーくりーむというヤツではないか！？」

かぼが、店頭に山積み陳列されているビシツと商品を指差した。本当だ。巡はいぶかしげな顔をする。なんだって天笠、和菓子店のくせに洋菓子にまで手を出しているのか。

「しゅーくりーむとなー！っ！！」

かぼは、加速装置起動と言わんばかりの瞬発力で駆け出した。

ドタ————ン。

景気良く、前のめりに転ぶ。

由美香にはかせてもらったフリルのワンピースのスカートがめくれ上がって、またもかぼちゃパンツが丸出しになった。

しかし屋根まで跳躍可能なこの少女、なぜ普通に路上でコケるのか。狙っているのか。

「メグ……わちの……わちのことはいいから……早くぬしはしゅーくりーむを……」

「シュークリームは逃げないけどな。なんで僕がお前にシュークリームを買ってやらなきゃならないんだ」

路上に倒れたままのかぼを、巡は冷たい視線で見下ろす。

「なんてケチンぼなんだ……」

「ていうかお前、最後に目覚めたのが百年前って嘘だろ」
ギクリと、かぼが硬直した。

シュークリームという存在を知っているあたり、結構最近外をウロついていたんじゃないのかと巡は想像する。

かぼは、ははは、と乾いた笑いを洩らした。

「いや、そうなの、オホン。訂正するなら、メグの前に最後に人間と会話したのが百年前かの……多分、おそらくは……」

まったく。

巡はため息を洩らす。

別に隠すようなことでもないのに、と思わなくもない。そうまでして人の同情を引きたい訳か？ それにしても、殆ど眠って過ごしたと言う割に、あまりジェネレーションギャップを感じないということに、巡は今気付いた。

「なんでお前、それなりにこの世界に馴染んでるんだ？ 全然生きてた時代が違うんじゃないか？」

生きてた、という言葉が合っているかどうかはともかくとして。

「そりゃあ、わちらはいわゆる物の怪というか物の化だから。世界の変動は、眠っていても勝手に吸収してしまうのだよ。だから世界への適応は早い」

偉そうに語るが、とりあえずは起き上がってくれないものか。
「物の化？」

かぼは、ようやく起き上がった。

本人はまったく無頓着そうなので、巡は仕方なく身体についた砂を払ってやる。放っておいたら、通りすがりの人にどう思われるかわからない。

「魔物にも色々あるがの。最も多いわちらのような魔物は、いわゆるこの世界の物質が転じて魂を持った存在だ」

木とか、火とか水とか石とか。人間が作った物から生まれる者もいる。

「人の言う座敷童子とか。あれは家に憑く霊のように言われることもあるが、要は家から生まれた物の化だ。そういう、物質が転じて意志を持つようになった物の化は、世の情報を感知するの得意なのだよ。自然と取り入れてしまふ、と言うべきかの。もともと、感知したくない変化さえも、取り入れなければならぬ例もあるが」

「なんだよ、それ」

「そのうちわかるだろう」

ニヤリと笑ったかばは、あらためて和菓子店を見やる。

「ぬしが植物採集に行きたいというから、こうして付き合ってたのだぞ。褒美のひとつも寄越してくれても良さそうなものだが」

こんな時ばかり子供らしい仕草で、かばは指をくわえる。

ひとりで出かけようとしていたのに勝手について来られた巡にしてみれば、不意極まりない言い分だ。というか思い出した。週明けにある実習のために、巡は近所の雑草を観察に来たのだった。

「そうだ。こんなことをしてる場合じゃない」

巡はさっさと歩き出した。

「メーグー」

「うるさいな。そんなに欲しければ、お前に甘い母さんにでも買ってもらえばいいだろ」

歩みを止めない巡に、かばは仕方なく再びトコトコと追いついて歩き出す。

「親睦を深めるために、二人でしゅーくりーむを食べたかったのに

の」

そういうことは、自分で金を払って買ってから言ってくれ。

「メグはかぼに冷たいの。なんでだ？」

「常識で考えてくれ」

普通、急に現れた得体の知れない者にたやすく心を許す人間は少ない。巡の家族が変わっているだけだ。だが、この魔物に常識などという言葉が通じるはずもないということを、巡はそれを口に出してから思い出した。

「今度の逢魔が時は……人間も魔物も苦勞しそつだの」
かぼはボソリと呟く。

それはおそらく、頑なな人間のせいだ。
でもだからって。

こんな時代が来ることへの覚悟なんて——少しも出来て、いないのに。

結局、週末はかぼの騒動のせいで予習どころの騒ぎではなかった。実習のために、図鑑でも眺めて食える草の目星をつけておこうか思っていたのだが、そのために外に出ても出かける先にかぼがついて来て、あれこれとのべつまくなし話を始めるから、調査にならない。

せっかくだからとかぼに野草について訊ねてみても、結果は芳しくなかった。かばいわく、いくら彼女でも超自然的に様々なことを知っている訳ではなく、あくまで世の中の知識は人生の先輩程度だ、ということだ。

つまりが、野草については割と一般的なレベルでしか知らないらしい。

世の中の大局的な情報は勝手に取り入れるが、たとえば野草の名前まですべてが頭に記録されるわけではない、ということか。

まったく、おかしなうえに役にも立たないものに取り憑かれてしまった。

月曜日、実習となるのは三、四時限目。

「名簿順で班分けするぞー」

授業の合間の休み時間の後、再び教室に入ってきた担任、朝比奈がやたらはりきって声を上げた瞬間。

「なんだ。行き当たりばったり食用植物を探す授業なのか。こんな時ばかり予習をするなんて、メグはズルっこだの」

「――!!」

自分の席に座っていた巡の真横に、かぼがいた。

ガタン!!

思いっきり立ち上がってしまう巡。

「静かにしとけ、メグ。心配せんでも、他の者にわちの姿は見えておらんよ。だがぬしがわちを、ここにいる者として扱えば、他の者にも見えてしまうぞ」

「~~~~~!!」

「おいおい成瀬。どうしたあ？」

急に立ち上がった巡に、朝比奈が呆れたように声をかける。クラスメイトも何事かと巡を見るが、確かに誰もかぼの存在に気付いていない。ように見える。

「……あ」

引っ込みがつかなくて、巡は逡巡する。

「あの……トイレ」

ドツと教室が沸いた。

「そりゃあ外に出る前にはトイレタイム取るつもりだけだな。今すぐか？」

むしろ休み時間に行っておけと言わんばかりだ。実際その通りだが。

「が、ガマンできません!!」

教室中から笑いが起こる。なんで自分がこんな目に。行って来いよと笑う担任を尻目に、巡は脱兎のごとく教室から逃げ出した。もちろん、その後にはかぼもついてくる。

「学校にはついてくるなって言っただろ!」

授業中、誰もいない男子トイレの中で、巡はかぼに怒鳴りつける。

いくら人がいないとはいえ、あまり大声を出すのはどうかと思うが、巡にそんなことを考える余裕はない。

「学校とやらを見てみたかっただけだ。ケチケチするな。さっきも言ったが、他の人間にかぼは見ておらんよ。ただ、メグがかぼに話しかけたりすれば、その場にいる皆に発見されてしまうだろうがの」

「どういう意味だ？」

かぼは、どこで憶えたのかビシッと人差し指を立てる。

「わちらはぬしのように逢魔の力のない者にはまず姿から見えない。だが、見えにくい、というだけで、そこに存在するのは確かだ。ぬしにはわちが見えているだろ？ だからな、ぬしが皆の前でかぼと話をしたとすると、皆そこに何かがいるものだと思ってしまう。そうやって意識をされれば、ほとんどの人間にわちの姿は見てしまうのだよ」

もともと魔物を認識する力のある者には、その姿は視覚として捉えられる。だが、その力のない者でも、そこに誰かがいるのだと脳に情報を送って意識すると、見えてしまうものらしい。特に、これからの時期は。

早い話が、逢魔の力を持つ人間とそうでない人間の差は、その程度ということだ。

力のない者は、そこに何かがいるという情報を受けることで、後天的に魔物を目で見ることができると。対して逢魔は、それがなくとも自発的に魔物を発見してしまう。

「メグを介してわちの存在を知った者は、もうメグなしのわち単体も認識できるようになるがの。もうその人間にとって、わちは”そこにいる”存在になるからの」

なんという不安定な存在。

しかしそれでは、かぼのように一見魔物に見えないようなものを発見してしまった場合、見分けがつかなくて困りそうな気がする巡だ。たとえばもしもかぼが普通に街中を歩いていたとしたら、巡は

誰かに「あんなところに小さい子がひとりでいる」などと言ってしまいかもしれない。その場合、言われた人間はどうなるのだろう。「あれ、さっきまで誰もいなかったような気がするんだけど勘違いか」みたいなことになるんだろうか。
なんだかとても面倒くさい。

まあそれはともかくとして。
今の問題は目の前のかぼだ。

「だったらボロが出ないうちに帰れ！」

巡は怒鳴るが、かぼはどこ吹く風。

「いいじゃないか」。ボロを出すも出さないもメグ次第だぞ？
わ
ちのことは知らん振りを決め込めば良いだけの話だ」

帰る気はさらさらないらしい。

ここで長く話をしていても、何事かと疑いをかけられるだけだ。

「~~~~~」

問答していても仕方がない。というか、多分お話にならない。

「絶対、変なちょっかいかけなよ……」

それだけ言っと、かぼは任せるとばかりに胸を張った。

何というか……先が思いやられる。

実習の最初に、巡たち六年一組の面々が向かったのは、巡がかぼと出会ったあの雑木林だった。

確かに学校のすぐ裏手だし、野生の植物も多い。ちなみにこの辺りの土地の所有者は、藤乃木学園の理事長である。実習の事前承諾も完璧だ。

「先生の目の届かないところに行くんじゃないぞー。三十分で集合な」

朝比奈の合図と共に、持たされたストップウォッチを確認しつつ、それぞれの班があちこちに散る。が、この年頃の子供たちだけに、そこいらの雑草を引っ掻けばいいと決め込んで遊びに走る者から、何とか食べられる物を探そうと必死になる者までと、反応はまちまちだ。

「きのこは採取禁止な。触るのもダメなのがあるから気をつける。それと、採ったものは、一度は自分で口に入れてもらうからな」

朝比奈の言葉に、生徒たちは「うげ」と表情を変えて、そこそこ真面目に探し出す。もちろん毒性のある物は外すつもりだが、朝比奈はやると言ったことはやる教師だ。食わせると言ったからには、それが雑草でも本当に食わせる。

まったく予習できなかった巡は、班で固まってあれこれと探しながらも、かばの方をチラチラと気にする。この前まで眠りこけていたこの場で、かばは楽しそうにひとりで遊んでいる。確かに皆にかばの姿は見えていないようだが、逆に蹴り飛ばされたりしないのだろうかと思うが、これが器用にお互い避けているというか、自然と接触しない。

いや、アレを心配している場合じゃない。

巡は植物の採集に集中力を戻した。

「成瀬く。この赤い実って、良く見ない？」

同じ班の女子に声をかけられて、巡はしげしげとそれを眺める。背の低い木に小さく実る柔らかい実は、確かにどこかの家の庭で見たことがあるような気がする。けれど、それが食べられるかどうかはわからない。一見食べられそうに見えなくもないが、今ここで試してみるのは厳禁されている。毒のある物だと困るからだ。

「取っていつてみる？」

いくつかの実を、潰さないように採ってビニールの袋に入れた。

あちこちを目で追っていた朝比奈は、そんな巡たちの様子も視界に入れている。

——いいもの見つけたなあ。

朝比奈は声に出さずにほくそ笑む。その木は一箇所にしかないようだから他の班は気付いていないようだ、あれはそのままでも食べても甘いし、薬にもなる実だ。巡は全然予習など出来なかった様子だが、ひとつはクリアしたらしい。

「メグく、メグく」

かばに呼ばれて、巡は無言のまま彼女に近付いた。

遠目では気付かなかったが、そこには小さな川が流れている。街に流れる河川と合流しているのかもしれない。

「この草、見たことあると思うんだがのく」

気付けば植物採集に参加しているかばだ。誰にも聞いてはいけなという決まりだが、結局かばも植物には明るくないらしいから、まあいいだろう。

「たしか食べられると思ったんだがの。しかしこんな形だったかのく？」

怪しいことこの上ない。が、突っ込みたくてもこの場では叶わない。

まあいいやと、それを根ごと引っこ抜いて、数本を仲間のもとに持って帰る。

そうこうしているうちに、三十分が経過した。

全員を集合させて、学校に帰るまでで一時限終了。それから、後半の植物選別が始まる。大したことをする訳でもないのだが、全員スモッグと三角巾着用だ。

「この班は……変わったもの持ってきたなあ」

各班をまわる朝比奈は、巡の班に来て面白そうに顎に手を当てた。「ユスラウメにマコモに、こりゃパセリか。あんなところに生えるんだな。ほぼ当たりだが……惜しいな。マコモは、秋になれば何にでも使える食材なんだけどな」

かばが言っていた草を手にしつつ講釈する朝比奈。しかしこの担任、何気に野草に詳しい。

「ユスラウメはそのまま口に入れてみる。甘いぞ。同量位の塩で漬けておいても薬になる。パセリは……言わずと知れた、だな。ルールだから一度は食ってみな」

うえ、と嫌な顔をする面々。パセリが単独で好きだという人間は少ない。いわゆる付け合わせのパセリとは姿が違ったから気付かなかった。わかつていたら採って来なかったのに。でも試食からマコモは外してくれたのだから良しとしなければ。マコモは薬草にもなるが、若干刺激が強いから扱いに注意が必要なのだ。

「一応かばのも正解だったろ？ 間違いないじゃなかったろ？ 季節が違ったただけなものな。偉いだろ？ な、メゲ？ かばだってやればできるのだからな！」

ちよろちよると巡にまわりつきながら、身振り手振りをくわえてまくし立て、えへんと胸を張るかば。

本当にコイツは、他人にバレたら困る自分の立場をわかっている

のか。

「うるさいな、わかってるよ！ 少し黙ってる！！」

つい、振り向きもせずに怒鳴ってしまった。

ピタリと止む、教室内の喧騒。

しまった。

「……それはオレに言ってるのかな？」

笑顔が引きつる朝比奈教諭様。

「いや、違……その」

かぼの存在には気付かれなかったが、代わりに妙な誤解を生んでしまった。

「先生に意見してくれる勇者な成瀬君は、後片付け当番決定な。皆の取ってきた収穫物の残り回収して、放課後教員室に持って来いよ」
バシバシと巡の肩を叩く朝比奈。そういう行動を取る時の担任が本気で怒っていないことを皆知っているから安堵するが、何故巡が急にあんなことを怒鳴ったのか、クラスメイトにはわからない。

「なんだよ、どうしたの成瀬。パセリ、そんなに嫌いだったっけ？」
肝を冷やしたらしい同じ班の男子が、大げさな仕草でこそこそと耳打ちをしてくる。

「ちが、いやえーと、うん、昨日ちょうど家でパセリも食べなさいって口うるさく言われて、それ思い出しちゃって」

「成瀬の家って、パセリも食べなきゃいけないんだ……」
言い訳が苦しい。

なんとかごまかせたようなそうでもないような、けれど他に適当な言い訳も思いつかない。本当に失敗した。

「うつかりだの、巡は」

ニヤニヤと巡をつつくかぼ。

——誰のせいだと思ってる！！！！

今度こそ声を上げずに、かばと視線も合わせないように注意を払
いながら、それでも巡は肩を震わせた。

もう絶対に学校になんて連れて来ない。

巡はかたく心に誓った。

誓ったところで勝手についてきてしまうのだから、どうしようも
ないのだが。

放課後になつて、巡は職員室に顔を出した。

朝比奈に言われた通り、両手に持つ箱の中にはクラスメイトたちが採集してきた植物の残りが入っている。のほいいのだが、こんなものを集めて担任が何をしようとしているのか、巡には今イチわからない。捨てるのならそのまま焼却炉行きでも構わないと思う。

それとも、巡に説教するための大義名分だろうか。それならただ職員室に呼び出せば良いだけの話だ。

「先生、持つて来ました」

巡が朝比奈の机に向かうと、担任は事務椅子をグルリと回転させてにこやかに巡を迎えた。何気に巡の足許にくつついて来ているかぼの方には、視線さえも投げかけない。気付かれることはない、とかぼは言っていたが、なんだか不思議な感じがする巡。すでにかぼの存在から不思議なのだから仕方がないのだが。

「おお、ごくろーさん」

巡から受け取った箱の中を、早速ガサガサとあさり出す朝比奈。

「それ、どうするの？」

「んー、採るだけ採って無駄にするのも、こいつらに申し訳ないかな。使えるものは使おうと……ああ、これとかな」

朝比奈が取り出したのは、どうやらよもぎの一種。使い切れなかったが、結構な人数がこれを持ち帰っていた。

「よもぎは色々と使い道あるからな。っと、この辺は押し葉にでもしといて、栞でも作らせるか……」

朝比奈、新たな案が浮かんだらしい。

「ところでな、成瀬。お前今日はどうした？ 何か悩み事か？」

押し葉にするらしい雑草を選別しながら、朝比奈は巡へと視線を投げかけた。

急にトイレには立つし、実習中もやたら挙動不審だったし、教室では突然怒鳴り出す。詰問されても仕方のない今日一日の巡だ。

「勉強の態度がなつとらんの」

お前にだけは、言われたくない！！

腕を組んでうんうんと頷くかぼを怒鳴りつけそうになるが、ちらりと横目で睨みつけるだけに留め、巡は何とか言葉を飲み込んだ。今このタイミングでそんなことを叫んだら、本当にシャレにならない。

「すみませんでした。悩み事とかじゃないです」

少々しおらしい口調で否定してみると、朝比奈はハハハと軽快に笑った。

「まあなあ、成瀬だつて男だもん。他人に言えない悩みのひとつやふたつ、あったっておかしくないけどな！」

そんなんじゃない、と言いかけたが、巡は一瞬躊躇した。男だからかどうかはわからないが、確かにこれも人に言えない悩みと言えなくもない……かもしれない。このままでは血管のひとつも切れてしまいかねない勢いだし。

「話せることなら聞け？　けど言えないモンを無理に聞き出す趣味はないからな。ひとりで悩むつてのもアリだ。が、人と共有できれば色々がうもんだ」

かぼや魔の刻のことを誰かと共有。

確かにそうできれば、自分の精神状態も大分違うだろうと巡は思う。ひとりで抱えていたら、途方にくれてしまうだろう。そういう意味では、母や姉は共有者といえるかもしれない。かぼの存在を知っているというだけのもので、それ以外のことを話し合えるかどうかはわからないが、話してみても、まるで相手にされない相手ではないだろう。

魔の刻とかそういう話はよくよく考えてみれば深刻なことなのかもしれないが、けれど実際のところ目下の巡の悩みといえれば、かぼがひよいひよいと巡の行き先についてきてしまうことくらいだ。い

ちいち拳動不審なのだって、ひとりで何かに対し悩みに悩みぬいた末の奇行というわけではなくて、うっかりかばに反応してしまったゆえだ。

自分にだけ見える存在というのは、本当に面倒くさい。

「ひとりでいると、後ろ向きになりやすい。一緒にいる人間が多くなればなるほど、気持ちは前に向きやすい。そんでまあ、前向きに生きてさえいれば、取り返しのつかない事態までにはそうそう進まんもんだ。あまり深く考え込んでもな。でもって、誰かのフォロ―があるのとないのとは、いろいろな面で格段に差が出る。見たところ、お前さんはそういうのに不自由してなさそうだけだな」

巡にも、友人はそこそこにいる。クラスで嫌い合っている人間もない。家族とも仲がいい。けれど今の状況は、おいそれと周りに広めていい問題でもないような気がする。しかしそれはそれとして「本当に、悩みとかじゃないです。その、さっきのは、パセリのことで家族にうるさく言われたばかりで、先生に文句を言いたかったわけじゃなくて、うっかり……」

一応矛盾がないように、さっき友人にした言い訳と同じように言っておいてみる。朝比奈は「そっか」と言って笑った。彼が自分で言うように、深入りするつもりはないらしい。少し安心した。

「ま、悟られたいくれば冷静に対処できるようにするんだな。そうでないと周りに心配かけちまうぞ」

軽い口調だが、朝比奈、何気に子供に難しい注文を出す。それともひとりの人間としての意志を尊重しているということだろうか。

「手え出しな」

「？」

言われて素直に手を出すと、朝比奈は巡の掌の上に、小さな茶色の塊をふたつ転がした。

「何これ……」

「キャラメル。オレが作ったの。それでも食って機嫌直せ。……あ、学校では食うなよ。それと、みんなには内緒な」

巡はしげしげと、オブライトにくるまれたそれを眺める。
いちいち小器用な担任だ。

「メグの先生は優しいの。かぼに飴をくれたぞ」

帰り道、巡に渡されたキャラメルを口の中で転がしながら、かぼは上機嫌で両頬を押さえる。

「お前にくれた訳じゃないよ……」

むしろ自分が今あげたんじゃないかと、懨然とした面持ちで、巡はもうひとつのキャラメルを口に入れる。帰り道だが、学校では食べるなど言われたのだから、まあいいとする。へ理屈だと文句をつける人間は、ここにはいない。

キャラメルは、当然だが甘い。

口に広がる甘さで、ここ数日の疲れが何となく取れていくように感じるのは、あまりにジジくさすぎるだろうか。けれど、心身共に疲れていたのは事実で。

キャラメル効果だろうか、何だか色々考えすぎるのが面倒に思えてきた。

ありのままを受け止めてみた方が、建設的なんじゃないか、と。

あまり深く考え込まなくても、朝比奈は言った。どうせ考えようがそうでなかるうが、巡ひとりで変動する世界をどうこうできるわけではないのだから、その波に上手く乗ったほうが楽なのは確かだ。

けれどもやはり、かぼに学校に来られるのは困る。じつとしてないし、いつ誰に見られるかもわからないし。巡が持つという逢魔の力とかいうのを、持っている人間だっているかもしれない。

「もう、メグの学校には用がなければ行かんよ」

思っていたことに、そのまま返答されて巡は驚いた。

「わちが行くと、メグは困るようだからの。わちはメグと仲良くしたいだけだ。嫌われてしまったら、意味がないからのー」

散々やってくれた後で、よく言う。

「逢魔が時など、そう深く考えることもあるまいよ。どうあがいたところで、なるようにしかならんし、なるようになる。でも、案外世界は優しいぞ」

「優しい？」

眉を寄せて聞き返す巡に、かばはいつものごとく笑いかけた。

「世界は命ある者にもなき者にも、平等に存在する力を与えてくれるだろ。ほれ、こんなに小さい者にもな」

かばの視線の先に、いつの間にか真っ黒な猫が座っていた。いつからいたのか。

道の端にいた猫は、ふたりの視線を受けてゆるりと立ち上がると、音もなく歩み寄ってきて、巡の脚に頭を擦りつけフニャンと澄んだ声で鳴いた。子猫と言うには大きいのが、近所で見かける飼い猫よりは小ぶりだ。きれいな毛並みなのに、首輪のような「飼い猫」の証は見当たらない。

「そやつも、わたらの仲間よ」

「え？」

ニャーとなく声も、翡翠みたいな目の色も普通の猫とまったく変わらないが——長い尻尾が、半分ほど二股に分かれている。

「！？」

かばがそれを抱き上げた。

「こやつも魔の刻の住人だ。見たことのないヤツだが……こんな風に、至極本物に近く、力のない者もいる」

ペロペロとかばの顔を舐める黒猫は、尻尾が二股に分かれている以外はどこからどう見ても普通の猫で、突然人間の言葉をしゃべりだしたり、飛んだり消えたりする様子は見せない。

これも、他の人間には見えないのだろうか。

「ぬし、この辺の者か？ 帰る場所はあるのかの。ないならウチに

来るか」

「お前のウチじゃないだろ」

巡は、かばからその猫を受け取って抱き上げた。

人懐こく、巡の顔も舐め出す黒猫。ゴロゴロという喉の音が、巡の胸の辺りに振動となつて伝わる。こうやって抱き上げているのを他の人間に見られたら、この猫の姿も見えてしまうのだろうけど、この猫くらいなら、きっと問題はないだろう。

「な、優しいだろう？ 生きる気さえあれば、何とかなるんだものな。そんでもって、そうやって猫を抱き上げるメグも優しい子なんだって、わちは勝手に信じておるのだがの」

「……」

一瞬目を見開いて、すぐに巡はかばから視線を外した。

急に持ち上げられて多分少し赤くなってしまった頬を、あまり見られたくはない。

「優しくなんかないよ。この猫、かばが面倒見るんだからな」

ぷいと顔を背けて歩き出した巡に、かばはグルグルとまわりついた。

「なんだ、ケチンぼだの、メグは！ 共同作業でいいじゃないか！」

「かばがやるんだよ」

誰の声に反応しているのか、黒猫はニヤーンと鳴く。

「かばがやれって言ってる」

「違う！ メグも世話しろと言っておるのだ！」

やいやいと騒ぐ、かばの声ばかりがうるさい帰り道を。少しだけ。

ほんの少しだけ楽しいと感じたのは——ひとりはいしゃぐかばには。まだ、秘密にしておくことにする。

外は、生憎の雨。

雨の多い六月なのだから仕方がないが、それにしてもこの時期の湿った空気は、身体中にまとわりつくような感がある。

実習をやった月曜日までは晴れた日が多かったのに、次の日からもう三日、ずっとこんな天気だ。学校から帰っても外に出かけるのもおっくうで、巡はこの三日間、学校から帰ると家に閉じこもりつきりだ。

「雨だのー。退屈だのー。こう湿気っていると、気分まで湿ってくるのー」

かばはずっとそんなことを呟きながら、巡のベッドの上でゴロゴロしている。月曜日に拾ってきた黒猫も一緒だ。

「退屈ならどこかに遊びに行つて来ればいいだろ」

魔物にも湿気なんて関係あるのだろうか、巡は思う。

「む。メグはこんな雨の中、かばを追い出しにかかるつもりか」

「そんなことは言つてない」

言つてはいないが、こう何日も同じ部屋の中で、暇だ退屈だと呟かれ続けるのには、さすがに辟易している。そうでなくとも、これまでずっとひとりで過ごしてきた部屋の中に、毎日かばや猫がいるのだ。慣れない環境に苛つくのも道理で。

「雨はきらいだ」

かばがぼそりと呟いた。

「メグは知らんだろうが、わちら物の怪にとっては、天候も重要な場合があるのだぞー」

かばは、ベッドの上で猫と共にゴロゴロと転がる。

「物の怪は、何かの属性から生まれて来る者が多いからな。生きている者のように、寿命や病気で死ぬことがないかわりに、そういった外部からの影響で簡単に消えてしまう者だって多いのだぞ。例えば炎から生まれた物の怪がいるとすれば、そいつは水に当たっただけで消えてしまう。逆に水辺で生まれた者は、長い間水と離れていれば、やはり消えてしまうしの」

それは初耳だ。初耳だが、それは言い訳だろう、かぼとは関係ない、と巡は思う。思ってから、ふと気付いた。

かぼは、一体何の物の化だろう。

「お前は、何から生まれたんだ？」

ふとした拍子の質問だった。けれど、意外やかぼは、巡のその質問に対して珍しく静かになった。

「……」

「なんだよ」

別に悪いことを訊いたつもりはないのに、だんまりを決め込まれて、巡は眉をひそめた。しかしかぼは、その一瞬後にはヘラツといったように笑う。

「別に何でも良いではないか。わざわざ弱点になるようなことを、そう簡単に教えるヤツなどおらんぞ」

かぼの率直な言葉に、巡は憮然とした。

何だよ、弱点って。

魔物のいわゆる出所は、確かに弱点にはなるだろう。先刻かぼが言ったとおり、火には水をぶっ掛ければいいし、水は枯らせばいい。無論世界中のあらゆる水を枯らすのは不可能だが、つまりその魔物を水から遠ざければいい。

属性が知れば、弱点も知れる。確かにそうだが。

「調子がいいな、お前は」

眉間にしわを作って呟く巡に、かぼの瞳がキョトンと見開かれる。「仲良くしたいだとか言ってるけど、結局そんな気さらさら無いだろ。弱点を教える気がないかって、まるで敵でも相手にしてるみ

「ただよな」

そりゃあ、自分と異なるものを排除しようとする人間の本能のせいで、物の怪は迫害され続けたんだろうけど。そのせいで人間を信用できないというのなら、わざわざ人間の前に出てきて、馴れ合うことなんて考えなければいい。

「別に、わちはそんなつもりで」

「そんなつもり無かったって、そう聞こえるよ」

本当は、少し考えれば巡にも理解できるはずだった。いや、実際はわかっているのかもしれない。

かばはもちろん巡を敵とみなしてそんな風に言っているのではない。巡に対して秘密にしたいわけではなくて、自分の弱点をわざわざひけらかすような真似をする必要はないということなのだろうと。けれどそれを巡に知らせ、それがもとで、弱点を不用意に露呈することになるかもしれないことを恐れているのだとするなら。

自分は、まるでかばに信賴されていないということなのだろうと。かばは、大事なことを何も言わない。自分の都合ばかりを押し付ける。そんな態度で仲良くしたいなんて言われたって、少しも説得力がないと巡は思う。

かばに対して怒ってばかりだけど。怒らせているのは彼女の方だと。

「別にそれで構わないよ。好きにすればいい。結局理解し合うことなんてできっこないんだから。どうせ人間は心が狭いんだからな」

無性にイライラしてくる。

かばが出て行かないなら、自分が出て行けばいい。巡は、座っていた椅子から腰を上げた。

「出かけてくる。絶対ついて来るなよ」

言い残して部屋を出ると、ボタンと力強くドアを閉めた。

「……」

ポカンとしていたかばは、ゴロゴロと転がっていたベッドの上で仰向けになると、黒猫を腹の上に乗せた。

「メグは幸せな中にいるからの……」

生の刻と魔の刻の移り変わりという現実を、人間が本当の意味で知ることは、多分これまでもこれからもない。

それだけで幸せなことだと、かばは思う。

生の刻の住人たちは、ひとつの時代をまたぐことなく寿命を迎えるではないか。その永さを自分の身体と心で痛感することは、決してない。けれど魔の刻の住人たちは、それこそ千年二千年という永き年月の中を、半分は強制的に眠りながら過ごさねばならないのだ。この年月の、重圧。

その中で起こる、様々な出来事。

これまで、かばが経験してきた数え切れない、出来事。

弱点という言い方が悪かったかもしれない。けれど、他にどう言えばいいかわからなかった。本当は、別のことを恐れていた。

かばが何から生まれたのかを知っても、巡はかばを迫害したりしないだろうか。

そう信じたくたって、そうでないかもしれないという不安は拭いようがない。信用するとかしないとか、そういう話以前に、もう少し一緒にいて、長く時を過ごして、それから自然な話の流れで明かして行きたいことだってあるのだけれど。

ああそうか。

自分と人間では、生きている時間が違いすぎる。

人間は、きつとのんびりと待ってなどいられないのだろう。

短い時を生きる人間は、環境の急激な変化にも弱いのだろうし。

「メグ、怒ったかの……」

ポツリと、かぼは呟いた。

かぼのたった一言だったけれど、きつとずっと溜めていたものだってあったのだろうし。

けど、だけど。

仲良くしたいという言葉に、嘘なんてない。

むしろ、巡の方が仲よくしたがっていないように見えなくもなかったのだけど。

「雨の中、メグはどこに行って時間を潰す気なのかの」
探そうかとも思ったけども、そうすればきつとまた巡は怒ってしまっ

かぼは、ベッドの上で寝転んだまま、寝返りを打ってうつぶせになった。

やっぱり、雨は嫌いだ。

なんで、あんな風に怒ったかな。

家を出てそう経たないうちに、巡はすでに後悔の中にいた。雨の中、傘も持たずに出てきてしまったせいもある。深く考えずに家を飛び出したせいで、不必要に濡れるハメになってしまっなんて。

「……かぼのせいだ」

呟いてみても。

本当は、こんな風に怒る必要なんて無かったと、今では思う。反射で行動してしまっってからしまったと思うことは誰にだってある。

かぼにとつては、巡は弱点を見せられる相手ではなかった。

それが、悔しいのか？

なんで？

まるで、自分が仲良くしてもらいたがってるみたいじゃないか。

巡的には、ただかぼに巻き込まれるだけ巻き込まれて、いちいち反応するのも面倒くさくなっってしまったから馴れ合うようになってしまったんだって、そんなつもりでいたのだけど。だって魔物だとか妖怪だとか逢魔が時だとかって、そんな非常識なことをまくしたてられたあげくに、それが冗談でもなんでもなくて、逃げることも叶わずに、状況はこれからどんどん変わっていく。

だったら、反抗し続けるよりは、受け入れた方が遥かに楽だ。

でも、それこそ、そういうつもりでいたのだとしたら、心を許していないという点ではお互い様ということになる。思えば、自分だってそういう態度でいたのだから、かぼのことばかり悪くは言えな

い。

まだ、出会ったばかりだ。

自分にとつても、かぼにとつても。

お互いがまだ出会ったばかりで、そしてそれは、魔物同士でも、人間同士でもなくて。理解するのに時間がかかるのは当然だ。

そしてどうやら、これからこの世界では、それが不可欠になるのであるうし。

特に、自分にとつては。

「はあ……」

考えれば考えるほど、巡の頭の中は混濁してくる。

「坊主、どうした」

声をかけられて、巡はその方向へ顔を向ける。

そこは天笠和菓子店の店先で、店の主人が店先に出したシュークリームを片付けているところだった。雨にあたってしまわないようにだろう。

「こんな雨の中傘も差さんで。散歩か？」

今時珍しい、和装に身を包んだ初老の主人がシュークリームの入った籠をしまう姿というのは、和風建築の店先にあって一種異様だ。「親戚の子だとかいう小さな子供は、今日は一緒じゃないのか」

母親、かぼのことを親戚の子だとふれ回っているらしい。妥当なラインだ。

「喧嘩でもしたか」

巡の顔色で、天笠の主人はそう判断したらしい。

「なんで、シュークリームなんて始めたの？」

主人の質問に答えず、巡は疑問に思っていたことを口にした。話

をそらすつもりがあったわけではないけれど、そう取られたかもしれない。

「シュークリームが食べたいという子がいたのな。頑固に主義を通すのも悪くはないが、需要に応えるのも時には必要だろう」

これまでは古式ゆかしく和菓子専門で商っていたということが伺える台詞だ。

しかし、まさかその子供というのはかぼのことではないだろうな。巡は考えた。

タイミング的には微妙だが、彼女は巡の知らない外で何をやっているかわかったものではないし。だが、店の主人は言った。

「あの子もシュークリームは好きなんじゃないか？ 持って行って早く仲直りするがよろう」

あの子も、ということとは、主人の言うシュークリーム好きの子供というのはかぼのことではないらしい。なんてことを考えているうちに、主人はシュークリームをいくつか、店の商品袋に詰め込みはじめた。

「特別だ。そら」

「え、でも……」

タダでくれるらしいそれを断わりかけたが、子供が遠慮などするなと強引に渡された。

「早く仲直りするに越したことはない。せつかくあんなに楽しそうにしていたのに、そんなつまらん状態をいつまでも続けても損なだけだぞ」

巡は何も言わなかったが、主人は巡とかぼが喧嘩をしていると断定したらしい。

「楽しそう？」

確かに、かぼはいつでもおおはしゃぎだったような気がしなくもないが。

「あの子も、お前さんもな。笑って話せる相手というのは、かけがえのないものだぞ。若いうちにはわからんかもしれんがな。そして

失うのもあつという間だ。そうなつてからでは遅い」

経験豊富である主人の言葉には、それなりの重みがあるが、それ以上に。

かぼだけでなく、自分も楽しそうにしていたらしい事実の方に、巡は驚いていた。少なくとも、傍からはそう見えていたようだ。

「……けど」

かぼと自分は、心を許しあつてゐるわけじゃない。主人はもちろん知らないだろうが、彼女は人間ではないのだ。

そんな巡の顔色だけで事情を察したわけではないだろうが、主人は軽いため息をついたようだった。

「子供のくせに、深く考える素振りなど見せんでよろしい。嫌いでないのなら、一緒に楽しいことをせんか。それだけで充分だ」

「……」

一緒に楽しく、ただ、それだけを？

本当は、かぼの見た目に反する実年齢の高さが、巡との感性の違いを作っている原因にもなっているのだが、巡自身はそのことに気付いていない。

もともと少し大人びた子供だったから、負けん気が先に立つことが多い。

損とか得とか、楽とかじゃなくて。

せつかくの新しい出会い、友達がひとり増えた分だけ楽しさも増やせばいい。多分、そういうことなのだろう。事実、巡はかぼと楽しそうにしていたらしいし。

うるさくて、人の話を聞かなくて、自分勝手。

けれど巡が怒ったのは、そこではなくて。

認められていないらしいということに腹が立った。けれど、巡だってそれは同じ。魔物であるとかそういうことを抜きにするなら、歩み寄れる姿勢じゃなかったのは、自分の方だ。

少し力を抜いたなら、かぼとちゃんと心から馴染むことができる

だろうか。たとえば自然とできる、友人のように。そうきつと、あまり深く考えないほうがスムーズに進むことだってあるに違いない。

「ありがと……」

巡は受け取ったシュークリームの袋の取っ手を、ギュウ、と握りしめた。

巡が出て行つてすぐ、かぼは部屋の窓を開けて、外に身を乗り出していた。

「雨、止まんの……」

かぼは昔から、雨に当たるのを極端なくらいに避ける。

振り落ちてくる雨粒がその身体に当たるたびに、その内側にある温かさが失われていくような、そんな感覚があつた。

そんな雨の中、巡は出て行ってしまった。

怒られるからついて行くことはできなかったけれど、でも一番に見えるところで待っているのなら構わないかなと。そんな風に思つて、窓から外に出る。

雨は嫌いだけど。

少し当たるくらいなら、大丈夫だろう。

雨に当たることよりも、巡がそこにいてくれないことの方が。

だって巡は、かぼが目覚めたときに最初に見つけた、真っ直ぐな瞳だから。かぼに名前をつけてくれたり、何も言わなくても黒猫を家に連れ帰ってくれたり。かぼに世話を押し付けるのは、これから、かぼが巡の家で暮らしていって、そう言ってくれているのだ。とても、優しい子なのだ。

だから早く巡を見つけれられるように、雨の当たる玄関先に、かぼは座り込んだ。

それでもやっぱり雨は冷たくて。

流れ落ちる水と一緒に、自分の中の何かもこぼれ落ちていくように。

早く巡を見つかけようとする意志と裏腹に、かぼの瞼はゆっくりと、

閉じていった。

天笠和菓子店は、巡の家の近所ではあるけれど、それでも数百メートルは離れている。家を出てからむつとりと歩いて雨に濡れてしまった道を、巡は今度は走って帰った。

あの時、結局買ってやらなかったシュークリーム。これを見たら、かぼは喜ぶだろうか。知ってはいても、食べたことのないような素振りではあつたし。そしてかぼが喜んだとしたら、やっぱり自分も嬉しかったりするんだろうか。それはどうだかわからないけれど、今、巡はかぼの喜ぶことをしようとしている。

喜ばせたいと思った訳ではないけれど、喜ぶだろうな、とは考えた。

そしたらまた上機嫌で、魔物のウンチク語りなんて始めるだろうか。そうすれば、巡はもつとかぼやあの黒猫のことを知ることが出来る。それは案外、悪くないことなのかもしれない。

巡は、その勢いのまま、家の小さな門に駆け込んだ。
その足が、止まる。

かぼが、いた。

門から少しだけ離れた玄関先で、うつ伏せになって倒れていた。

「……かぼ？」
返事はない。

雨の中、雨の中なのに、かぼはその場にうつ伏せになったまま、ピクリとも動かなかった。

身体に当たる雨のしずくが、何の抵抗もなしに流れ落ちる。まるで石の上でも滑り落ちるように。

こんな光景を、巡は以前にも目にしたことがある。

あれは確か、車にひかれて道路で死んでいた、小さな猫だ。
硬くなった身体の上を、冷たい水がただただ流れていたあの光景。

かぼは、何と言っていた？

雨は嫌いだと、言っていなかったか。

——そいつは水に当たっただけで消えてしまう。

かぼのあの時の声が、今聞こえた。

そんな物の怪がかぼのことではないと、誰も、言っていない。

動かないかぼを見つめたまま、巡は手に持っていたシュークリー
ムの袋を、バサリと取り落とした。

なんだよ。

「なんだよ……」

なんで、雨の中待ってたりするんだよ。

こんな短時間の間に、そんな姿になってしまふくらいなら、なん
で。

命を懸けてまでやらなきゃいけないようなことじゃないだろう！？

雨に当たるだけで死んでしまうような身体だったら、それを本人
が知らないはずがない。でももし、もし、知らなかったら？ ただ
本能で嫌っていたのが、実は命に関わることだからだって、本人が
知らないことだって、あるかもしれない。

だけど、嫌いだって言ってたのに。

嫌いだけど、それでも巡を待ったために、こんなところで、ずっと。
だけど死んでしまったら、何の意味もないのに！

「ばっかじゃないのか、お前！！」

雨の中、立ち尽くしたまま。

巡は動かないかばに向かって叫んだ。

悪態をついても文句のひとつも返ってこないことが、こんなにも胸に衝撃を与えるなんて。喧嘩なんかしたって。文句を言い合ってたって良かったのだ。こんな風に、動かなくなるより、ずっと、ずっと良かった。

どうして、もっと前に気付けなかったのか。

失くすのはあつという間だって、さっき聞いたばかりだ。もっと前に聞いていたら。でももっと前に聞いていたとしたって、きっとその時の自分には、やっぱりわからなかっただろう。

絶対に戻ってこないものなんて、この世にはいくらだってあるのだ。

バカじゃないのか。バカじゃないのか。

こんなにあつさりといっちまうくらいなら、最初から付きまったりするな。

自分から付きまとしてきたのだから、勝手に死ぬな！

文句を言っただって、何を願っただって、失ってからでは、何もかも遅い。

一番バカなのは、自分だ……。

この時。

この、一見普通の少女と変わらない、陽気な物の怪との騒がしい出会いと、突然の別れが。

巡のこれからの人生を、大きく変えることになる――。

——なんて訳はなくて。

「……しゅーくりーむ!!」

ガバリと、少女が頭を持ち上げた。

「……………ッ!!」

巡、啞然。

「しゅ、しゅーくりーむがあ、水溜りにいい!!」

うつ伏せになったまま顔だけ上げたかぼは、まるで脂ぎった羽と長い触角を持つ黒い悪魔のごとくに、カサカサとほく前進でシュークリームシュークリームの袋に這い寄った。

「もったいないじゃないか! このかぐわしき匂い、これはしゅーくりーむだろう!？」

……何が起こった。

「お、お……」

「お？」

「お前、死んでたんじゃないのかよ!？」

巡の叫びにポカンとしたかぼは、さすがに仰天の表情を作った。
この少女には珍しい現象。

「何を言うか、失礼な!!」

「だって!!」

ついさっき頭の中を駆け巡った様々なことを、取りとめもなくわめき散らす巡に、かぼはますます目を見開いた。

「メグ……ぬし、案外慌て者だの」

「なんだよ……」

バツの悪そうな巡に、かぼは這いずった格好のまま、呆れたようなため息をつく。

「生きるか死ぬかの問題だったら『好き嫌い』で済むわけがなからうよ」

それはそうだが、巡は、かぼが無自覚なんじゃないかとまで考えたのだ。難しく考えすぎだと言われたとしても、家の中にいたはずの者が雨の中で倒れていたら、誰だってまずは驚く。

「それになあ、わちら物の怪は、魂が消えれば身体も残らんよ」

「そんなことを知ってるわけがないだろ!!」

そりゃそうかと、かぼはナハナハと笑う。楽しそうな瞳が、巡に向けてさらに細められた。

「そういうことも含めて、思いついたときに話してやるぞ。わちらの色々なことはな」

一度に全てを話すには、情報量が大きすぎるのだ。

しかしそうか、とかぼはニヤつく。かぼが死んだら、巡は慌てるか、と。そう考えたら、自然と笑みがこぼれてしまつかぼだ。まだ、嫌われているわけじゃなかったと。

「ていうか」

巡は一度、大きく息を吸った。

「大体なんでこんなところで倒れてるんだ、お前は!!」
もつともな意見だ。

「あ……わち、雨は嫌いだからの。当たっているうちに、ついつい眠気がきてしまったのだ」

巡には意味がわからない。

「それも追々な」

かぼが雨の中で眠気を来たしてしまったのは、完全な逃避の表れだ。彼女が何かから逃避するには眠るのが一番良いのを、かぼの本

能が一番良く知っている。自分を追いやる生の刻を、ただただ眠ってやりすごしたように。

そして、彼女が雨を嫌うのも、ちゃんと理由があつてのことなのだ。

それでもいつか、話す時もあるだろう。

「そのうち話してやるから、まずはこれを食べていいかの」
ずっと抱えているシュークリームの袋を、かぼはきらめく眼差しで見つめる。

「その前に風呂に入れ」

かぼの首根っこを捕まえて起き上がらせると、巡はその手からシュークリームを奪い取った。しかしはたしてこのシュークリームは、まだ食べられるのだろうか。

「メグのケチんぼ!!」

その言葉も何度聞いたことが。

なんと言われても、こんな濡れ鼠のまま菓子を食うことを優先させるのは許さない。

ケチと罵られても——生きてて、良かった。

正確には、彼ら魔物は生きてはならないけれど。

動いてしゃべっているのだから、それはそれで良しとしよう。

手遅れにならなかったことを、自分は心から安堵しているのだから。

手足をバタつかせて抗議するかぼを引きずって、巡は雨の当たらない家の中へ入って行った。

二人が住む、雨の届かない場所へ。

< 第一話・了 >

実習で採ったユスラウメは、けっこう美味かった。

苺だのバナナだの、店で売っている果物に比べて大味で青臭かったけど、野生であんな風に食べられる木の実があるというのは、巡にとっては初めての経験だった。母や姉にも見せてやったら喜ぶかもしれない。

そんな訳で、巡は学校裏の雑木林まで足を運んできた。

「メグは雑木林が好きだのー」

何気についてくるかぼ。

これは本当にどうかと思う巡なのだが。

こう外についてこられては、街中に存在を認知されてしまうのも時間の問題なのだ。実際、天笠の主人もかぼのことは知っていた。成瀬家にも来客が無い訳ではないし、隠し通すのは至難の業だ。母や姉にいたっては、隠す気もさらさらないようだし、見た目普通の人間と変わらないから、かまわないのかもしれないが。クラスメイトとかに見られてしまうと、もう学校にかぼがやってきてしまっても、存在を隠せなくなる。

それならそれで、学校に来なければ良いだけの話だし、一応かぼは、もう学校に不用意には行かないと言ってはいる。しかし実際どうなるかはわかったものではない。

だがそういう話しても、かぼは「メグよりはずっととうまいことやるから大丈夫だ」と、呑気なものだ。

まあ、それはともかく。

この雑木林には、確か小さな川も流れていた。あれは新発見だ。

辿ってみれば街中の河川に繋がっているのかもしれないが、今まで存在も知らなかったのだから、もっとじっくり見てみたい。

歳相応に冒険心旺盛な巡だ。

一応は私有地である場所で好き勝手な巡だが、この辺は立ち入り禁止と区切られている場所ではないので、暗黙の了解で時々近所の人間がヨモギや栗を採りに来たりしている。持ち主である藤乃木学園グループの理事長は、それと知っていて開放したままにしている、案外おらかな人間だ。そして不必要に森の恵みを乱獲したり、問題を起こす人間は、これまでに現れていない。学校での企画の場合には一応許可を取ったりもするが、実際はそれが通らなかったことはなかった。

記憶の場所に、巡は小さな川を発見した。

「魚とかいるのかな……」

背の低い草の中に忽然と姿を見せる水の流れを、巡はしげしげと眺める。

「魚もいるぞ。ここは中央付近はそこそこ深くなっているから気をつけたほうがいいのー。流れがきつい訳ではないが、ぬしの身長なら腰までは浸かってしまうぞ」

かばは言いながら、早速川の端に足をつけてバシャバシャと遊びだす。

とりあえずそんなかばを引きずって上流を目指しだして、巡は一瞬足を止めた。

「!？」

上流の方向に、何かいる。

「かば、ちょっと待て。あそこ」

目で良く確認できない。というか、見たこともない造形をしているせいで、その形が上手く頭に入っていない。

巡はそれを、凝視した。

「ん？ おお、なんだ、ミーシャではないか」

「は、なんだって……？」

駆け出すかばを追いかけてながら、その何かを見極める。足許が
おろそかになっているが、そんな場合じゃない。アレは一体、なんだ。

「ミーシャ！　ぬしも目覚めておったのかの？」

大声で呼びかけるかばに、何だか良くわからないものは、ゆつくりとこつちを見た。つまり、動いた黒っぽい部分が頭部だと目で確認する巡。

「ミーシャ……？」

あれは、ミーシャと呼ばれる類の見た目だろうか。

「なんだ、オメエも目覚めりゃ相変わらず元気だな。オメエよりはオレは頻繁に動いてたぞ」

その何かが、しゃべる。今更だが、生き物だったのか。
というか。

近付いてよく見てみれば、それは形だけは、人とよく似ていた。
真っ黒に見えた頭部は、伸びっぱなしの髪がドレッドのように、
しかし中途半端に絡みついたものだ。不思議とボサボサな感じがし
ない。

そして決してつぶらとはいえない細い瞳。眼光が鋭い。

なにやら柄物のＴシャツとハーフパンツをズタツと着こなしたそ
の身体は妙に浅黒く、裸足のままの足と骨ばった手の指の先にある
爪はカギ爪だ。引つ掻かれたら、多分致命傷になる。そして指の間
にあるそれは、もしかして、水かきか。

何よりも、その顔は。

口があるべき場所に見えるそれは、唇ではなく、くちばしだ。空
を飛ぶ鳥ではなく、水辺にいるタイプの平べったいアレ。

そんな物体が、ゆつたりと川辺の岩に、腰掛けている。

「こやつは水というか『川』から生まれた物の怪でな。人間で言う
ところの河童みたいなものかの」

「河童あ！？」

言われてみれば、そう見えなくもないが、何しろ巡は河童の実物を見たことがない。しかし本に出てくる河童は、もうちょっとこゝろ子供っぽいというか可愛いタイプが多かったような気もする。

「もちろん人間の知っている河童は、人間が想像で作り出した河童だ。だがおそらく、こやつのような物の怪がもとになっているのだろ？ うな。だからまあ、河童という種類で呼んで構わんと、そういうことだ」

そういえば、河童には付き物のいくつかが足りない。

「皿と甲羅……」

その河童の姿に見入ってしまった巡が、それだけを呟いた。それを聞いた河童が、ゲタゲタと笑い出す。

「おとぎ話でよく見るアレだな。皿も甲羅も持ってねえ訳じゃねえぞ。別に普段は出さなくてもいいだけだ。ある意味人間の観察力も鋭いからなあ。オレにそういうアイテムがあるってのを、昔の人間どもは見逃さなかったんだな。一応人間の描くあの姿も、間違いじゃねえな」

鋭い眼光のミーシャ、何気に豪快だがとっつきやすい好印象だ。

「しかしアレだな。もうオメエが人間とツルんでるってことは、いよいよ魔の刻も本領発揮ってことか」

かばに対して気さくに笑いかけるミーシャに、かばは「まだまだだな」と返事をしてから、何気に胸を張った。

「今は『かば』だ。そう呼ぶがいいぞ」

「なんだ、また名前変わってんのか」
また？

巡はかばを見る。確か、名前はないとかそんなことを言っただけだったか。

「昔人間につけられた名前なぞ、もう憶えておらんわ。わちらは本当はこれといった名前は持っておらんものよ」

「でも……」

昔つけられた名前があるなら、それでも良かったんだろうに。
憶えてないというのは、本当だろうか。

「名なぞ、何でも良いわ。ミーシャは、その昔わちがつけてやった名前だからの。こやつもずっとそれを使っではいるが」

何をどう感じて、この河童にミーシャなどと名付けたのだ、この少女は。

しかしつまりまた、巡は物の怪を発見してしまったということか。

かばは、自分との出会いがきっかけで、これから次々と物の怪に出会うことになる、とは言っていたが。ここ数日で、黒猫と河童。確かにこれまで、こんな連中を見たことなんてなかったのに。

ただ少なくとも言えるのは。

初めて出会ったのが、この河童ではなくかばだったのは、巡にとっては幸運だったということだ。

コレと最初に出会っていたら、巡は未だに夜眠れぬ生活だったかもしれない……。

それにしても。

どうしても、気になる。

「なんでミーシャなんだ？」

この河童のどこがミーシャなのかと、巡は考えに考えた。眼光鋭くいかつい見た目のこの河童に、何ゆえミーシャ。それに昔名付けたという昔は、一体いつの昔なのか。おそらく外国との国交の少ない時代に、なぜ日本らしからぬ名前。

「物の怪に国境はないぞ。だが、別に外国人を意識した名前ではないんだがな。最初は『みーちゃん』と呼んでおったのだが、それが幼子に呼びかけるように『みーしゃん』になり、そしてみーしゃ、と……」

「幼子……」

巡の当然の疑問に、かぼは大げさにため息をついてみせた。

「ミーシャはこれでも生まれた時は本当にかわかったのだぞ。まるで人間の幼子のようにな。それが今ではこの有様だ」

かわいかった？

幼子のように？

それが真実なら、今では見る影もない。

というか、物の怪でも成長したりするのだろうか。なら何故、かぼは長い時代、子供の姿のままなのか。大体、物の怪の身体は人間と違って形だけの器でしかないみたいな話をしていなかったか。

ミーシャに対し、疑問大爆発。

「物の怪は、様々なものから変化した者だという話はしただろう。このミーシャは『川』という存在から生まれたわけだがな、常に川というものの変化を受け止めながら、暮らしていかなばならん。…

：昔はこの川も本当にきれいだったんだがの。今では水質も落ちて、その鏡であるミーシャも、こんな姿になってしまった」

そういえば、感知したくない変化さえも、取り入れなければならぬ例もある、なんてことを以前にかぼが言っただけだ。母体である川がどんどん美しくなくなってしまうたせいで、ミーシャはこんな風に衰え乱れ、何気に現代ナイズされてしまったのか。

これはこれで味があるような気もするが。

「ミーシャ。ぬしはあくまで『川』が転じた物の怪であって、どこか特定の川の傍でしか暮らしていけないわけじゃなからう。世界には、いや、日本の中にだって未だ美しい川はいくらでもあるぞ。そこに引越せば、そんな姿には……」

そついうものなのか。

川とひとくくりにしてはいるが、自分が今暮らすその川の影響がその心身に投影されるということらしい。

「別にオレはこれでかまわねえよ。なかなか気に入ってるぜ？ 別にこの程度で済むんなら、わざわざ遠くに引越する方が面倒くせエ」

この辺りのどの川で生まれたのかはわからないが。

巡はミーシャを見ていて、何となく感じた。面倒くさいなんて言い方をしているけれど、きっとミーシャはこの土地や川が好きなんだらうな。だから、そんな姿になっても離れないんだな。

そんな姿でも、なんとなくミーシャが幸せに満足しているように見えたのだ。

もちろん、本当は何もかも満足、なんてことはないはずだ。ミーシャが生まれた頃の川というのがそれほど美しいものであったか、巡には到底想像もつかないが。本当だったら、そんな環境で暮らせたらもつといいんだらう。

環境問題とかになると、巡が自分ひとりでどうにかできる次元ではないし。

いまここにあるこの小川は、魚もいるというし、巡からしてみれば

ば随分きれいな環境に見えるのだが、色々と複雑な問題もあるのだろつ。

「まあな。結局今そこにあるものを、あるがままに受け止める。それがわちらにとつては当たり前のことだからの」
うんうんとうなずくかぼ。

難しい問題だが、巡も自分なりに考えてみる。

人間でも物の怪でもきつと変わらない。

好きなものについては、案外何でもガマンできてしまうものだし、受け入れてしまうものだ。

好きなもの、という言い方でいいのかはわからないが。

「ミーシャはつまり、ここが好きなんだな」

そう言ってみたら、人相の悪いミーシャは巡に向かって破顔した。「その通りだな。ぶつちゃけ言つちまえば、ここが故郷というわけじゃねえが、流れて流れ着いたこの場所は、これでなかなか住み心地のいいものだぜ」

ボンボンと、ミーシャはその大きな手で巡の頭を優しく叩く。

爪が食い込んだら痛いでは済まなそうな力ギ爪だが、きちんと加減してくれている。

「美しけりや何でもいいってわけでもねーや。本来川つてのは、そうなるうとしてなったモンじゃなくて、自然が作り上げた水の形だ。それに沿って清らかに流れるのも悪くはねーが、そこに介入する『営み』があるほうが、オレあ好きなんだよ。そのせいでちつとばかり環境が変わつてもな」

水の流れである川を、多種多様な生物たちが利用し、介入する。そこには確かに営みがある。それを愛おしいと感じるなら、やはりミーシャが『水』ではなく『川』の物の怪であるがゆえなのだろうか。

かぼが、ああそうだな、と思い出したように手を打った。

「そつえば、わちがぬしに名前をつけてやったのは、この土地ではなかったな。あれはどこだったか……」

かば、物忘れが激しいにも程つてものがある。

彼らがいつどこで知り合ったのかは知らないが。

それぞれに違う土地から流れ着いたのだとしたら、今ここで二人が再会するというのは、とてつもない確率の偶然ではないのか。

「まあ、わちらには縁というものが生まれているからの。こうして再会するのもそうおかしいことでもない」

巡の疑問を、縁という一言で一蹴してしまうかば。

しかしかばの様子から察するに、かばよりもこの河童のほうで、後に生まれているということなのか。本当に物の怪というのは、見た目では語れない。

「ていうか、今引越すのが面倒つて話、してなかった？」

ここが故郷でないなら、どこから引越してきたということではないのかと、巡は自然にそう考える。

「徐々に、流れてきたんだよ。気の向くままにな。そして大分前にここにたどり着いて、そのまま居着いちゃったわけだが、ここもその頃から考えたら、随分変わっちゃったな」

まあその姿を見れば、そうなのだろうが。それでも環境のいい場所を見つけて、あらためて住み直すという考えはないということか。この街この場所に、どんな思い入れがあるのかはわからないけど。

「わちは今、こやつの家にいるからの。いつでも遊びに来るといいぞ」

サラリと言うかばに、巡は内心仰天した。

家主の許可もなしに、なんてことを。

確かにミーシャは悪いヤツではないというか、実際話してみれば、かばよりもずっと話のわかるタイプなのかもしれないが。何しろその外見を、巡の家族に見られるのは。

かばを認識した時のように、平然としていてくれるものだろうか。

「おい、かば！」

「なんだ、メグ？」

まるで罪のなさそうな顔。

外見云々の話は、かぼにはきつと通じないだろう。

「その、家に来るときには極力厚着で来るようにしてくれ……」
それだけを言うのが精一杯の、土壇場に弱い巡だった。

現代ナイズされた河童との邂逅から数日。

今日も普通に学校に行つて、約束通りかばもついて来なかったおかげで平凡に一日を過ごして、そして家に帰ってきた巡は、庭での賑わいに気付いてそこを覗き込み、一気に脱力した。

巡の家には家庭菜園くらいできる程度の小さな庭がある。そこには小さな池まであつて、昔は父親が趣味で錦鯉を飼っていた。その後はその池の中身が金魚になったりしたものだが、今では水が張つてあるだけで、何もいない。

そこに、ミーシャが浸かっていた。

「……ミーシャ……」

ガクリとひざをつく巡に、池の中で膝を抱えるミーシャがやれやれとため息をよこす。

「かばが、巡の家にいい水場があるっていうから来てみりゃあ、随分と小さいんで驚いた。膝丈くらいしかねえじゃねえか」

一般家庭にある人工の池なのだから仕方がない。

身長160cmもない巡ですら、プールの代わりにもならないさやかな池に、巡よりも頭ふたつ分はでかいミーシャが詰まっている光景は、滑稽ですらある。

「かばの言うこと鵜呑みにしちゃ……」

彼らは付き合いが長いのではないか。かばの言うことなんて案外適当で大雑把であるなんて、ミーシャにもわかりそうなものだが。

「なんだ失礼だな。別にかばは嘘は言っておらん。なかなかハマッているじゃないか」

池の傍で座り込んでいたかぼが、心外とばかりに頬を膨らませながら巡を見上げる。

確かに、嵌まっているが。物理的な意味で。

「あらメグ、帰ってたの？ それなら声かけてよ。メグの分もおやつ用意するから、手を洗ってらっしゃい」

家の中から顔を出す母、由美香。

一瞬ドキリとした巡だが、その手に持っているトレーには、すでに二人分の紅茶のグラスとプリンが乗っていた。

かぼと、ミーシャの分か。

「ミーシャさん、ストローで大丈夫かしら？ でもグラスで直によりは飲みやすいかなあ」

くちばしの形状を気にする母。

「おいこら、かぼ！！」

巡は、小さな声でかぼを招きよせた。

「なんだ」

「お前な、不可抗力で見えるものは仕方ないけど、わざわざうちの連中に物の怪を紹介することはないだろ」

そんな巡に、かぼはいいやと首を振る。

「これからは、このくらい慣れておいた方が生きやすい世になるぞ。それに別に、わちが母上にあらためて紹介した訳ではないんだが、うっかり庭で話しているのを見られてしまったわ」

「……」

うつかりというか、そりゃあ庭で話なんかしてれば気付かれるのは当然だろう。

しかし本当に母、この河童を見て何とも思わないのか。かぼのことは普通の子供ではないと認識していたとしても、実際かぼは普通の人間と同じようにしか見えないし、あの驚異的な身体能力を見た訳でもないのに。

どこでそんな免疫が出来ているのだ。

「母上も芽衣も確かにおおらかな性質だのー。猫と天井星取りゲー

ムをして遊んでたら、飛んだり跳ねたりしても全然物音がしないと感心しきりで喜んで観戦くれたしの」

「……て、天井星取りゲーム……？」

「天井に沢山星を張ってな、それをジャンプして取って、どっちが早く集められるかのゲームだ。しかし相手は猫だでの。意味がわかっておらんから、かぼの圧勝だったが」

かぼ巡の見ていないところで既に様々な猛威を振るってくれてい
るらしい。

巡の知らないうちに、母や姉は人外に飛んだり跳ねたりしている
かばや、その相手をしている猫を日常で眺めていたということが。

「……少しは加減してくれ……」

学校に來ないからと安心していたが、來ないなら來ないで別の場
所で心配の種を増やしていそうだ。

「メグ、わちを誰だと思ってるのだ。ぬしよりもずっと長く生き
ておるのだぞ。人生の先輩に心配は無用だ」

人じゃないだろう。

言えばこじれるから、巡は黙っていたが。

「ほらほらメグ、早く手を洗ってらっしゃい。でもプリン多めに買
っておいで良かったわ」

別段気にかかることのある様子でもない母。

そうだ。かぼよりも、こんな神経で今日に至るまで普通に生きて
きた母のほうに脅威だ。これまで気付きもしなかったが。

巡の家の飼い猫になってしまった二股尻尾の黒猫が、母の足に擦
り寄ってきた。

「あら……猫ちゃんプリン欲しいの？ でも猫にプリンは良くない
わよねえ。今度別のおやつ買ってきてあげるから、今日はガマンし
てもらえないかしら」

律儀に猫に話しかける由美香を見て、池の中で座り込んでいるミ

「シヤが細い目を見開いた。

「何だ、良く見たらオメエ、シンじゃねえか」

「え!？」

知り合いか!？

「こんなところにいたのか。久しぶりだな。つつつても、それじゃ話も出来ねえな。シン、変化しろよ」

親しそうに一方的にしゃべるミーシヤの言葉の直後に、シンと呼ばれた黒猫は突然グツと、その姿を歪ませた。

一瞬にして、その容積が数倍に膨れ上がる。

「!？」

膨れ上がって、変形しているような、輪郭がブレているような。猫だったシルエツトが高速で形を変え、形成されていくのは、人のような姿。

目の前の光景を把握できずに瞬きも忘れる巡の目の前に、真つ黒な上下、ＴシャツとＧパン？ らしき衣服に身を包んだ、十五、十六歳くらいに見える少年が現れた。

「はー、助かった……」

それは歳若い男の、巡よりほんの少し低めの声。

キョトンとする母の足許——庭に面した廊下に尻をつき脱力するその少年は、バサバサの黒い髪を掻きあげて、巡に向かって「よう」と片手を挙げてみせる。

……今度はまた、何が起こったのか。

巡の目の前であぐらをかく少年は、さっきまで確かに黒猫だったはず。

巡は、マジマジとその少年を眺めてしまった。

「……ホントに、あの黒猫？」

目の前で変身した姿を見ても、にわかには信じがたい。かぼやミーシャを散々見た後でも、こうもありえない光景を見せ付けられてしまうと、やはり頭は追いついてこないものだ。

「そだよ」

こともなげな黒猫。

「しっかしなー、いつまたこの姿になれるかわからなかったから、ミーシャがいてくれて助かったわ」

廊下にあぐらをかいたまま、両手を後ろについてリラックスする

元黒猫。

「あらあ……人なら、プリン食べても大丈夫かしら……」

そして、相変わらず天然な発言をかます母。

「あ、おかまいなくー。いちいちこの人数分おやつ用意してたらキリがないでしょ、ママさん」

「ま、いい子ね。心配しなくても大丈夫よ」

猫のくせに気遣いのできる彼にいたく感心した母は、いそいそとプリンを取りに台所に向かってしまった。

「どうなっただ……」

そんな母と確かに血は繋がっているはずなのだが、この事態にひとりついていけない巡。それが普通感覚というもののだが、往々にして状況というものは、多数決で動いて行くものだ。この光景に疑問を抱く巡に同調してくれる存在は、今ここには無い。

「なんだ、ぬしは人型になれたのか。なぜ今まで隠しておったのだ？」

かばが呆れたように腕を組んで見せたが、もちろんこの状況そのものはすっかり受け入れてしまっている。まあ、彼女はもちろん人間ではないのだから当然だ。

シンと呼ばれた元黒猫の少年は、疲れたように首を振った。

「いや、隠してた訳じゃないんだけどな……」

見ての通り、彼は猫が変化した物の怪だ。猫と人と、ふたつの姿を持ち合わせる。が、その仕組みに問題があった。

「一応オレ、基本形は猫なんだよ。人であるよりは猫でいるほうが楽は楽なんだけど、困ったことに、猫でいる時のオレは、マジで猫なんだよなあ」

言われている意味が、巡にだけはわからない。

つまり、彼は。

人である時は、人の言葉も解するし、人と同じ行動パターンを持つ。故に、人としての常識や理性も理解する。猫でいたときの自分の行動も憶えている。

が、ひとたび猫に戻ると。

彼は、本当に猫なのだ。

たとえば人間相手に機嫌を読んだり是可以するが、基本的には人の言葉を解さない。猫として生き、猫としての本能を持つ。まるつきり存在が猫。だから、自分の意志では人間型に変化することはできないし、また、しようとも思わない。彼は、猫だから。

日向ぼっこをしたり遊んだり、犬と張り合って走り回ったり。人型でいれば減らない腹も猫の時は減るし、もちろんご不浄だって人目をはばかりことなく砂場でカリカリやったりする。物の怪でありながら、しつこいようだが、まるつきり本物の、猫。ただしかばたちと同じように、通常、生の刻の生物には見えにくい。

「さっきミーシャが言ったキーワードで他人から命令されないと、

オレは人になれないんだよ」

「キーワード？」

巡とかぼは、同時に首をかしげる。

「変化しろ、ってな意味合いの言葉だな」

訳知り顔で、ミーシャが呟いた。

「こいつは先の魔の刻の終わり頃に生まれた若い物の怪でな。オレがシンと初対面のときはこいつ人型だったからこういう性質だったのも知れたが、生の刻ではまったく顔を合わせてなかったからな。久しぶりだろう、人型になったのは」

ミーシャの言葉に、シンはうんうんと頷く。

「ミーシャ以外に知り合いがないわけじゃないけどな。生の刻でみんな籠っちまってたし、実際人型になったのは数百年ぶりだ」

進んで人間の姿になりたい訳ではないが、猫の姿の時は、他の誰ともコミュニケーションが取れないから、そういう意味では苦労することになる。もちろん、猫でいるときの彼はそんな苦労を感じることもないわけだが。

「不便だの……」

げんなりするシンに向かって、かぼは同情の目を向けている。

実際、物の怪というのは基本的に、この世に存在するありとあらゆるものの思考を理解できるものだ。たとえば動物と人間では思考形態も違うわけだが、それすらもおおよそ理解することが出来る。人間のように言葉でコミュニケーションを取る訳にはいかない動物でも、相手が今どんな気持ちでいるのかとか、その相手の立場で理解することが可能なのだ。だから、それと同じように、人間とも人間特有の言葉でのコミュニケーションを取ることができる。時代が流れて言葉や社会が変わっても、その時代に瞬時に馴染むことができる、器を持たない魂の存在。それが物の怪なのだが。

時々、シンのような物の怪も存在する。

人型になってさえいれば、他の物の怪と変わらない能力を有する

のだが、猫の姿をしている時の彼は、本当に猫でしかない。ゆえに、物の怪の中では、かぼの言うようにかなり不便な部類に入る。

魔の刻の社会も色々複雑なようだ。

「道理でどんな名前でも呼んでも反応しないはずだ。ちゃんと名前を持っていたのだな」

かぼは妙な方向で納得している。

実際、拾ってから名前をつけようとしなかった訳ではないのだが、どんな名前をつけても、それに関してだけは、黒猫はまったく反応を示さなかったのだ。むしろ、ただ「猫」と呼んでやった方が、まだ反応があった。

なるほど名前があったのなら仕方がないと、かぼは合点がいったような顔をする。

そして説明を聞くうちに少々落ち着いてきた巡は、言っているのかと悩みつつ、シンを眺めた。

「でもそれって……人型になった時、かなり恥ずかしかったりしない？」

それでも言ってしまった巡の言葉に、シンはガツクリと首を垂れる。

「恥ずかしいなんてモンじゃないぜ……」

猫であるシンは、猫以外の何者でもないから、人間であった頃のことなど何一つ憶えてはいない。だが人型になったシンは、猫であったときの自分の状況をいちいち覚えている。

例えば人に腹を撫でられて伸びている姿や、用を足すためにバリバリと地面を引っかく姿、追いかけているうちに切れたトカゲの尻尾にはしゃぎまくる自分。その他もろもろの、猫として過ごした時間を、全て覚えているのだ。そんな姿を、惜しげもなく他にさらしていたという事実を。

恥ずかしい訳がない。

シンは猫の物の怪なのだから、猫でいる自分やその習慣を自ら否

定する気もないのだが、いかんせんこうして人の形をとり、人間のようには振舞える人型バージヨンのシンからしてみれば。猫でいるときの自分はこう、無邪気で何の罪もない幼い子供の姿を晒しているような、そんな気分になってしまふのだ。

「で、まあ、ずっと人の姿でいるのは正直疲れるんでさ。やっぱり猫でいることが多いんだけど、ぶっちゃけ猫でいる時は何もするところがないから、用事ができたときにはいつでも変化させて構わないぜ」人から猫への変化は自力でできるらしく、くったくなくそんなことを言うシンだが。

「そうか。では今度、母上か芽衣の膝の上でくつろいでいる時にでも、変化させてみようかの」

楽しそうにからかい混じりで提案するかぼの一言に、シンはブルブルと首を振りまくった。

「そ、それはちよつと!!」

由美香と芽衣の膝の上は居心地がいいだけに、一番発生しやすいシチュエーションだ。

本当にかわいそうだから、それだけはやめてやれ。

巡は早々に、シンに対して同情の眼差しを向けるようになっていた。

さて、六月といえば、梅雨だ。

夏休みまであとひと月というこの時期、雨はもちろん多いのだが、それよりも暑さが勝る日もある。しかも、初夏特有の湿気も加わっているから始末におえない。

今日の巡は、かなり寝苦しい夜を過ごしていた。

本格的な夏を迎える頃には、そこそ暑さにも慣れてくるものだが、夏の入り口というこの時期は、なんだかんだ言って身体にこたえるものかもしれない。

暑い。というか息苦しい。
なのに。

それなのに、ベッドに横たわる巡の腹の上には、黒い猫がどっかりと乗っている。

暑苦しくてかなわない。

何度か下ろしてみたのだが、巡の腹の何が気に入っているのか、すぐにまた乗りあがってくる。彼も物の怪とはいえ、猫でいる時は猫そのものだから、人間に良く懐いているのは納得できなくはないが、それにしただって、普通の猫だって、暑い日には人肌に寄り付かないものなのに。そうでなくとも猫は暑がりなのではないのか。いつそかぼの寝る部屋にでも行ってくれば楽なのだが、どうもこの猫は、寝る時は巡のことがお気に入りらしい。かぼは寝相が悪いのかもしれない。

寝る時まで一緒ではさすがに落ち着かないからと、せつかく余っていた部屋をかぼに使わせているというのに、これでは状況が変わらない。冬なら歓迎するが。

ガマンできなくなった巡は、再び猫を掴んでベッドの隅に放った

後、間髪入れずに呟いた。

「シン……変化……」

その瞬間、その小さな身体が大きく歪み、黒猫は巡よりも数センチ身長の高い少年に変化した。

ベッドの上に尻をついて座り込んだ姿勢で、シンはキョトンと巡を見る。

五秒ほどの無言の間の後。

「……う暑っちいいい!!」

バタバタと手を使って自分の顔を仰ぎだす。

だから暑いと言っているではないか（言っではないが）。

「何だよ何だよメゲ、なんでこんなムシムシした部屋の中で、狭い場所に固まって寝てなきゃならないんだ!？」

その言葉をそっくりお返ししたい巡だ。

「だから人間に変わってもらったんだよ……。できれば離れてそこいらで寝てよ」

巡はゴロリと寝返りを打ってシンに背中を向けた。

「え？ オレ床で寝なきゃいけないの？ ていうか目覚めちゃったんだけど。こんな寝苦しい日に呑気に寝てられないよ」

さっきまで爆睡していなかっただろうか。

「なあ、アンタ今小学生なんだっけ。六年生だよな。あれか？ 宿題とかやつぱりあるわけ？ そろそろ勉強難しくない？」

「……」

人間にしたらしたで寝苦しい。これならいつそ猫の方がマシだったかとげんなりしてしまう巡だが、生憎と人間から猫にする方法は聞いていない。というか他人には不可能かもしれない。

「あんな、僕は明日学校あるんだから……」

「学校かあ。人間てさー、あんなとこ毎日通ってて疲れないわけ？ でも時々顔出すと、子供が給食の残りくれたりするんだよな。今の子って結構いいもの食べてるよなー。本当は人間の食べ物猫にとっては良くないものが多いっての、ほとんどのヤツがまだ知らない

いんだよな。まあオレは物の怪だから関係ないんだけど」

…… 本当につるさい。

「ホントに頼むから、お前かばのところにでも行って……」

「呼んだかのー」

ガチャリ。

かば登場。巡はベッドの上に撃沈した。

「なんだシン、人間の姿になどなって、メグと楽しく世間話か。ならかばも仲間に入れてくれなければ寂しいじゃないか」

プウ、とふくれるかば。しかしその愛らしい？ 姿は、枕に突っ伏す巡には見えていない。

「いや、仲間はずれになんてしてないよ。メグの学校の話をしててさー」

かなり一方的にだが。

「そうかそうか、かばは一度だけ、メグの教室に行ったことがあるがな、最近の学校というのはなかなか変わった造りだの」

「え、マジ？ おれ建物の中には入ったことないんだよ。ここより涼しいのかな？」

問題がずれてきている。というか。

多分、ここで起き上がって怒鳴り散らすのは簡単だ。近所迷惑など知ったことか。しかし、それをやったところで、おそらく状況がこじれる一方であることを、巡もそろそろ学習してきている。

ここは、黙殺した方が得策ではないだろうか。

しかし、ここで上掛けをかぶる訳にもいかない（暑い）し、どうしたものか。巡はうつぶせたまま思考を走らせた。

そんなことを考えれば考えるだけ睡眠が遠のいて行くだけなのだが。

「なあメグ、今日の給食ってなんだ？ 美味しいものか？」

ゆさゆさ。

「……」

「猫もいいけど、あれ人間で食べたらどんな味なのかな。やっぱ違

うかな」

多分、人間の姿でうちのものを食べるのと大差ないと思うよ。
心の中だけで呟く巡。

「メグ、今度変わったもの出てきたら、持って帰ってくれよ」
巡は、むくりと起きだした。

「……給食は、食べられる限り残しちゃいけないんだ」
ベッドから降りて、巡は自分の机の引き出しをガタガタとあさり出す。母が買っておいた猫用のジャーキーが、この中に仕舞ってある。

引き出しをかき回しながら、巡は少々顔をしかめた。
しまった。引き出しの中がジャーキーくさい。場所を考え直さないと。

そこからジャーキーの袋を取り出すと、巡はクルリと振り返り、シンにその袋を手渡した。

「お腹すいてたんだな。給食はあんまり持ってこれないけど、とりあえずこれ食べてガマンしてくれないかな。うまいよ」

ニツコリ笑って渡すと、別に今腹減ってる訳じゃないけど、な
どと言いながらも、シンは素直にそれを受け取った。

かばだけが、微妙な顔つきでシンを見る。

「のお、シン。どうせ眠れんのなら、たまにはかばの部屋に来て話をせんか。話せることは山ほどあるぞ」

「え？　なんで？　ここでもいいじゃん」

「かばの部屋の方が面白いぞ」

シンにジャーキーを渡したあと、静かな仕草で再びベッドに横たわった巡に視線を流すかば。さっきから極端に口数の少ない巡だが、この状況で笑顔で話す彼の、目は笑っていないかった。

そろそろかばも、巡のことを学習しつつある。

マジで爆発、五秒前。

悪気があるわけではない。

しかし、巡に悪いと思っっている訳でもない。何しろ悪気はないから。

ただ、悪気は無くても怒られることはある。悪いと思っっている訳ではないのに、そのことで怒られるのは、逆にシヤクでもあったりするわけで。

かばはシンを連れて、いそいそと巡の部屋を出た。

静かになった部屋で、巡はゴロリと寝返りを打って仰向けになった。そうでなくとも寝苦しいのに、あの騒ぎのあとスラリと眠れる訳がない。

どうすればいいのか。

人間にしてうるさいくらいなら、猫のままで暑苦しいのがまだマシなのか。

巡は二者択一にせまられる。

遠慮しないで猫の姿のシンを締め出してしまえば良いということに気付かない巡、彼が安眠できる日は遠い。

土曜日の夕方、かぼは、珍しくひとりで近所の公園に遊びに来ていた。

公園と言ってもそこは結構大きな敷地で、遊歩道や池や売店などが完備されている、地域の憩いの場だ。スポーツに興味にと、この公園を活用する人も多い。

そこをトコトコと歩くかぼを、誰も目に留めない。彼女からアクションをかけなければ、その存在に気付かない人間がほとんどだろう。

菓子や飲み物を置いている売店を横目で見ながら、かぼはその誘惑を断ち切るように足早に歩く。

ふと、売店の近くのベンチに見知った顔を見つけた。

巡のクラスの担任、朝比奈だ。

無言のまま歩み寄り、ベンチで足を組んでぼんやりしている朝比奈の隣にちょこんと腰掛ける。

かぼの存在は、大抵に人間には気付かれないが、かぼの座る場所には誰も後から腰掛けようとはしない。そこに誰かがいることを認識している訳ではないのに、実に自然に、人々はその場を避ける。物の怪とは、そういうものだ。

「こんな時間までひとりで出歩いてて大丈夫なのか？ 嬢ちゃん」

頭上から降ってきた声に、かぼは隣に座る朝比奈を見る。

「心配は無用だ」

ニパツと笑って見せたら、朝比奈もそうかと頷き、ポケットをあさった。

「キャラメル、食うか？」

そう言って出された、前にも一度目にしたことのある小さな包みに向かつて、かぼは何の抵抗も無く手を差し出す。

「おくれ」

両の手を上に向かつて差し出したかぼに苦笑しながら、朝比奈は指でつまんだキャラメルを、彼女の手にポトリと落とした。

早速包みを開いて、キャラメルを口に放り込むかぼ。

「知らない人から物をもらったりして、怒られないか？」

片眉を吊り上げて笑う朝比奈に、かぼはむぐむぐと答える。

「わちには説教する親はいないから大丈夫だ」

それに一応、かぼにとっては知らない人間ではない。

「いや、親じゃなくてもいるじゃん。うるさそうなのがひとりさ」

かぼは、うんうんと頷く。

「確かにうるさいの。けど今メグは宿題をやっているでな。邪魔になるから追い出されてる最中なのだ。そうでなくとも一昨日の夜、わちらが騒いだせいで寝不足になって、えらく不機嫌だから。これ以上怒らせるのも面倒だから、こうしてブラブラしてる訳だが」

朝比奈は、合点がいったように頷いた。

「それで昨日、ダルそうだったのか……」

てつきりこのところの蒸し暑さで眠れていないのかと思っていたが、別の理由があるらしいことを悟って、朝比奈はまた苦笑する。

かぼは、そんな朝比奈を眺めた。その視線に気付いて、朝比奈はかぼの口許を指差す。

「前に作ったのよりも砂糖の量を減らしてみたんだよ。うまいか？」

かぼは、素直にこくりと頷く。

「前のもこれもうまいぞ。ぬし、器用だの」

「それはどうも。ちゃんとわけてもらえたなら良かったな」

ハハハと笑う朝比奈を、さらに眺める。

「ぬしは、最初からわちのこと見えておったよな」

真っ直ぐなかぼの視線を受けて、朝比奈はこともなげに頷いた。

「うん。成瀬は気付いてなかったろうけどな」

かばが何気なく教室後部の戸を開けて入ってきた時から、朝比奈はかばの存在に気付いていた。そのかばが隣まで来た時に、初めて仰天して叫んだ巡に、噴き出しそうになるのをこらえるのが大変だった。

朝比奈が巡にキャラメルをふたつ渡したのは、最初からかばにも分けることを想定していたからだ。だからかばは巡に「かばに飴をくれた」と言ったのだが、それでも巡は気付かなかった。もっとも、それだけで気付く訳もないが。

「ぬしは自覚のある逢魔だの」

朝比奈の様子から、物の怪に出会ったのはかばが最初ではないことを察して、かばは言う。朝比奈はまた頷いた。

「逢魔が時だからな。オレはその仕組みも知ってる。だから、近いうちにきみと話をしたいとは思ってたんだ」

「そうか？」

かばに向かつて小首をかしげる朝比奈に、かばも同じように首をかしげて問いかけた。

「時代が進めば人間も進むんでさ。昔と違う点も、いくつかある」

朝比奈は、フウ、と軽くため息をつく。

「今のこの時代はさ、逢魔が時に関する研究機関もあるんだ」

「そうなのか！ それは初耳だの」

この世界の何事も理解しているような素振りを見せるかばだが、実は知らないことも多々ある。

「完全水面下の話で、一般人はまったく知らないけどさ。これから来る魔の刻への対策として、対魔物用の公的機関を、これから何十年かけて作り上げようとしているんだよ、人間も」

それは本当に、誰も知らない。

知っているのは、機関に属しているかその直近の人間のみだ。それらは皆、魔の刻や魔物の存在を、先祖や先達から密かに伝え聞き、あるいはその目で確かめてきた者たち。

普通はそんな漫画のような団体の話など、口で言われても誰も信用すらないだろう。

「オレは機関の人間じゃないっていつか、その機関すらまだ正式には動いてないんだけど、その機関と色々に関わりもあったりしてさ。だから言っておくんだけど」

朝比奈は、一呼吸おいてから、再び口を開いた。

「一応、気をつけときなよ。変なのに目を付けられないようにさ。

彼らの中には、物の怪に悪印象を抱いている人間もいるから」

朝比奈の言葉に、かぼは軽くため息をつく。

「それは仕方がないの」

研究機関というからには。魔の刻についての情報も持っているということなのだろう。

すなわち。

今の逢魔が時はまだいいが、時が進んで本格的な魔の刻が訪れれば、生の刻の住人、つまり人間を中心とする生物に、危害を加える魔物が出現してくるという事実を。

「対抗策を打ち立てているのだな。人間も」

「何か困ったことがあれば、呼んでくれていいから。多分、キミの知らないことも結構知ってると思うぜ、オレは。人間の側のことならな」

意外なところに、意外な人間もいたものだ。

これも、この地ならではのということか。

かぼは思う。

この街に存在する、生の刻と魔の刻を繋ぐゲートの存在を。いつか、巡にも知らせなければならぬのだろう。

7月になつても、梅雨が尾を引いてじめじめした日が続いている。からりとした天気の日はなく、雨天も多い今日この頃だ。

幸いにして雨の降っていない曇天の今日、巡はまたも雑木林を歩く。

うつそうとした木々の間は湿気も強く感じるが、心なしか快適に感じるのは茂る緑のせいか、流れる小川のせいか。ともかく巡は、雑木林を流れる川の上流を目指す。そこいらにいるであろう、ミーシャに会うためだ。

歩くたびにガサガサと音を立てるのは、スーパーの袋。その中には、プリンがみつっ入っている。

「あまり乱暴に歩くな。プリンが崩れるではないか」

文句を言うのは、巡の後を軽やかな足取りでついてくるかぼ。

「ならお前が持てよ」

雑木林の中はそうでなくとも歩きにくいのだ。多少の揺れは仕方がない。どんな場所でもヒョヒョヒと越えられるかぼなのだから、文句を言うならかぼが持てばいいと巡は思ったのだが、彼女は口をへんの字につぐんでそっぽを向いた。持つ気なしだ。

川のほとりで寝そべっているミーシャはすぐに見つかった。

「よう。どうした今日は」

人の気配にムクリと起き上がったミーシャは、巡とかぼの姿を見とめて片手を挙げた。相変わらぬの彼はいつでもフレンドリーだ。

「プリン持ってきた」

用件だけを直球で口にする巡。

本当は、プリンがあるからミーシャも連れて来いと母がうるさかったのだが、ミーシャのような特殊な姿の物の怪を、そうそう家に呼ぶのはあまり都合がよろしくない。いつ誰にバレてしまうやもしれないのだ。巡という逢魔の力を持った人間が存在しているのだから、他に力を持つ人間がいなくても限らないし、そうでなくたってミーシャを相手にしている光景を見られただけでも、力のない人間にだってこの姿は見えてしまう可能性が高い。

いくら魔の刻になりつつある世の中といっても、何も知らない人間にいきなりこれは刺激が強いだろう。

なので、仕方なく巡はかぼも連れて雑木林まで足を運んできたのだ。

三人で、プリンを食べるためだけに。

とりあえず、シンは猫の姿で気持ちよく寝ていたから置いてきたが。プリンのために今起こさなくてもいいだろうし、人間にして一緒に連れてくると、多分相当やかましい。

「……プリン？」

心なしか顔をしかめたように見えたミーシャだが、袋をあさって元気良くプリンを取り出したかばから、彼は黙ってそれを受け取る。プラスチックで出来た容器からラップのフタを外して、スプーンですくい上げる。かばや巡はともかく、ミーシャのそんな姿はやはり異様というか笑いを誘うというか。そもそも雑木林の中でプリンを食す三人組というあたりから、ありえない光景ではあるが。

「ん？　なんだこりゃ。この前のと違うな」

ひとくち口に入れて、ミーシャは不思議そうな顔をする。

「おいしくない？」

かばは喜んで食べているが、ミーシャが同じ趣味とは限らない。

巡の質問に、ミーシャはいや、と首をかしげた。

「この前初めて食べたときは、正直甘つとろくてかなわんと思ってたんだが、今日のは全然違うな。やけに美味いぞ。これが同じものか？」

「それ母さんの手作りなんだよね。この前は買ってきたやつ」

へえ、と感心する仕草を見せるミーシャ。同じプリンという名を持つものが、こும்味も食感も違ふものなのかと、そこが不思議でたまらないらしい。美味いと言っているのだからそれは何よりだが、正直甘すぎた前回のプリンも黙って食べていたのだから、ミーシャ、物の怪のくせに人間が出来ている。

かばだけが、そんな他人のことなどまるで気にもせず、プリンに夢中だ。ひとくちふたくちと笑顔で口に運んで、みくち目をすくおうとした時。

何かが、かばのプリンの中に垂直落下してきた。

ベシヤッ。

音を立てて、飛び散るプリンと、それを顔面に食らって「ぶへッ」と奇妙なうめき声を上げるかば。

「……か……か、かばのぷりんが……!」

顔中プリンまみれになりながら、しかしかばはそれどころの話ではないらしい。

「かばのぷりんに何かが、かばのッ……!」

そんなに錯乱状態にならなくても。

「ちよと待て、かば。プリンなら僕のをやるから。ていうか、なんだそれ」

巡はプリンよりも、落下してきた物体の方が気になる。木の実でも落ちてきたのかと思ったが、それにしても白っぽいような、むしろピンク色に見えたような。巡はかばのプリンを凝視した。

足が、見える。

見間違いでなければ、掌の上に乗るくらいの、小さな人間の形をしているように見えなくても何かの、下半身が。容器からはみ出

た場所で、バタバタともがいていた。

ミーシャが、その足をヒョイとつまんでプリンの中から引きずり出す。

姿を現したそれは、息も絶え絶えに口をパクパクとさせていた。

「な、なんでこんなところに、かすたゝどのうみがあゝ？」

ボロボロと涙をこぼしながら訴えるその物体は、掌大ではあるが、人間の女の子のようにも見える。が、いかんせんプリンでぐちゃぐちゃになっているので、何が何だかわからない。

また、物の怪か……。

逆さ吊り状態でわめく少女を見て、巡はハア、と、深くため息をついた。

川の水に浸かって身体の汚れを落とした彼女は、フウ、と深いめ息をついた。

「まさかこんなところにプリンがあるなんて、思わなかったよぉ」川べりから水面すれすれまで伸びている草の先を両手で掴んで、タプタプと胸まで水に浸かりながら足をばたつかせる物の怪。こうして掴まっていけないと流されてしまうのかもしれない。

「こっちだって、こんなところでプリンを台無しにされるとは夢にも思わなかった」

巡の分のプリンを分けてもらってなお、かぼは不機嫌極まりないといった体で頬を膨らませる。食べ物への恨みは怖いのだ。本来、物の怪は何を食べる必要もないはずではあるのだが。

「ゴメンねえ。最近ミズ、元気がなくて、新鮮なお水を求めてたら、こんなところに辿り着いちゃったんだけどお」

掌大の少女、名前はミズというらしい。

「ぬし、水蓮の精が何かか？」

身にまとうフレアのワンピースのようなピンクの着衣と背中についている羽が、水蓮の花びらに酷似している。もともと、背中への羽は実際に身体から生えているわけではなさそうだから、ただの飾りなのだろうが。物の怪は物の怪なりの洒落っ気があるらしい。

「いんやあ、そういうわけじゃないんだけどねえ。水蓮には何かと縁があるんでえ。この花って可愛いでしょ？」

全身で水蓮をアピールしているのだが、彼女は水蓮の精というわけではないらしい。

「で、なんでこんなところに来たんだ。お前、どこの子だ？」

ミーシャがミズの身体をつまみあげる。ピタピタと水を跳ねてい

た足が、何度か空を切った。

「つままないでえ。だから、ミズ最近元気なくてね」

「それは聞いた」

回りくどい表現を一蹴するミーシャ。顔が顔だけに迫力があるが、同じ物の怪同士だからだろうか、ミズは悪びれない様子でミーシャを見返す。

「ん、ミズはねえ、こう見えても水盤の物の怪なのね」

「……すいばん？」

その単語を初めて聞く巡が、眉を寄せる。

「花器の一種だの。少し深い皿のような陶器での、そこに水を張って、花を活けたりするものだ。なるほど、それで水蓮か」

水盤のような花器には、水蓮を生けることも多い。ミズが水蓮に縁があるというのは、その花器に水蓮が生けられることが多いということなのだろう。

「また思いもよらない無機物の物の怪だな。で？」

川から生まれたというミーシャも大差ないような気もしないでもない巡である。川だとか水盤だとか、もともと動物のような命を持つていないものが、こんな風に人間とも話せる物の怪になるという事実が、今いちピンとこない。

どういった拍子で、彼らが意志を持つようになるのだろうか？

「ミズは、ここから少し離れたところにあるおうちの水盤の物の怪なんだけどね。最近そこのおじいさんがあ、ミズの水盤に、きれいなお水を入れてくれなくなっちゃったのね」

ちよつと前まで、ちゃんと塩素を抜いた美味しい水をいつも張ってくれて、そこに綺麗な花を活けてくれていたのに、最近の水は、美味しくないらしい。ここで言う「美味しい」という表現は、そのままの意味ではないかもしれないが。

「だからミズ、どんどん元気なくなっちゃって……」

「それはそうだろうの」

シユンとするミズに、かばはうんうんと頷いてみせる。

「それはそうだって、どうしてだよ」

どうも話の流れが掴めない巡。水盤は、綺麗な水を入れてもらえないだけでダメになってしまうものなのだろうかと思う。

「それはの、うーん、面倒くさいの。後で説明してやるから待ってる。で、ミズ。つまりぬしは、そのじいさんが最近手抜きしているおかげで元気がなくなってしまうって、それで綺麗な水を求めるうちにここに来てしまった、ということなのだな？」

巡からあっさりとミズに視線を移してしまうかぼ。巡は意味がわからないままだが、今ここでかぼを問い詰めたところで、まともな答えが返つてくとも思えなくて、だんまりを決め込んだ。

ミズはブンブンと小さな手と頭を振った。

「違うのよ。おじいさんは悪くないのね。だって今までずっとミズのこと、ホントに可愛がってくれたんだもん。だからね、もしかして、最近おじいさんの体調が良くないんじゃないかって思ってたねえ。だから、おじいさんも綺麗な水を飲めば、きっと身体も良くなるのよ。それで持つて帰れる綺麗な水を探してたんだあ」

「そのちっさい身体で、どうやって水を持つて帰るつもりなんだ……」

「気持ちの問題だよお」

他人の気持ちの問題では、大概身体は治せない。大体、新鮮な水をひとくちやふたくち飲んだところで、人間はそうそう元気になつたりしないものだが。

そのおじいさんというのが、本当に体調不良なのかどうかも怪しい。今ここで聞いている話は、すべてミズの主観でしかない。

「ぬしひとりの考えと行動では、解決にならないのではなかの。ぬし、どこから来たのだ。帰り道はわかるのか？」

微妙に嫌な予感のする巡。

かぼが、何やら首を突っ込もうとしている気配。ドライに思われるかもしれないが、他人の問題にいちいち介入していたらキリがないのだが。

——かぼは物の怪だから、時間だけはたつぷりあるのか。

巡は得心する。

「帰り道はわかるよあ。もと来た道を帰ればいいんだもんね」

ニコニコと返事するミズに、かぼは頷いた。

「この水は、人間にはあまり知られてないだろうが、街の河川に合流するまでは、確かに人間でも飲める位綺麗なのだよ。ぬしじゃ無理だろうから、そのじいさんにはかぼたちが水を運んでやろうぞ」
うええ、と顔色を変える巡。

その行動に、何か意味なんてあるのだろうか。良い水なら、今時コンビニでも買える。それに、本当にそのおじいさんが体調不良なのだとしたら、水を飲む前に病院に行った方が良さだろうし。綺麗な水で即座に元気が出るなんて、ミズが水盤だから思いつく考え方だ。

「なあメグ。わちらに任せておけば良いよな？」

ニツコリと巡に笑いかけるかぼ。

最近になってわかるようになった、かぼの微妙な表情。これは何かの企みがあるというか、何事か考えを巡らせている時の表情だ。

仕方なく、巡は頷いた。

かぼがここまで乗り気なのなら、意地を張って放っておくのも後味が悪い。というか、どうせ巻き込まれるのだろうし。

「そお？ 良かったあ。おじいさんが元気なくなっちゃったらあ、ミズ悲しくて泣いちゃうもん」

ミズは純粹にそのおじいさんとやらの好意を抱いているらしいが、一体どんな関係なのだろうかと巡は思う。本当に、可愛がられていたのだろうか？

そしてそれは、物言わぬ水盤として？ それとも、この姿が見えていて？

とにかくにも巡だけが、水を入れる容器を取りに家まで走るこ
とになってしまった。

かばの方が楽に移動できるのだが、彼女に任せておくと、どんな騒ぎを起こしてしまうかもわからなかったし。

どうも、面倒くさい事態になりそうな予感のする巡だった。

綺麗な水を入れてもらえないと、どうして元気がなくなるのか。

結局かぼは、全て忘れ去ってしまったかのようなノリで、まったく巡にその話を聞かせる気配が見えない。黙っていても教えてくれそうなミーシャはついて来なかったから、知りたければかぼかミズに聞くしかない。

かぼの肩に座って道案内をするミズを眺めながら、巡はそれをかぼに訊ねてみた。

「ん」

珍しくかぼが、言葉を選ぶような素振りを見せる。

もしかして、聞いてはいけないような類のことなのだろうか。それにしては、あまり深刻な様子でもない。

「メグがこれまで出会ってきた物の怪はな、全部、そのカテゴリ全体の物の怪なんだな」

急に難しい言い回しをするかぼ。

「ミーシャは、川から生まれた物の怪。シンは猫から。それは知っておろう?」

「うん」

「ぶっちゃけた話をすれば、彼らはその存在がなくならない限り、消える……いわゆる「死ぬ」ことはない。わかりやすく言えば、ミーシャは『川』から生じた物の怪だから、川そのものが無くならない限りは、この世界に存在し続ける物の怪なんだ」

もしもミーシャの傍から川という存在が消えてしまった場合、ミーシャがこの世界に存在し続けるためには、川のある場所に移動しなければならない。逆に、近くに川さえあれば、よほどの不具合が生じない限り、ミーシャはそこで生き続けることになる。

シンもしかりだ。

猫から生まれた存在であるシンは、この世界から猫そのものがいなくならない限り、生き続ける。

彼ら物の怪は、その元となるものの象徴か守り神であるかのように、そのものの傍で存在し続けるのだ。

「だが、ミズは違う」

「……？」

「さつきこやつは、ここから少し離れた場所にある、家の中にある水盤の物の怪だと言ったな。つまりミズは、水盤という存在そのものの物の怪という訳ではなくて、どこぞの家にある、ひとつの水盤から生まれた物の怪ということなのだ」

種類としての『水盤』の物の怪ではなくて。

どこかの家の、たったひとつの『水盤』の物の怪。

「それって、ぜんぜん違う存在なのよ」

かぼの肩から、ミズの声が跳ね上がった。

「私は」。人間に大事にされなかったら、生まれなかった存在なのね」

「大事にされなかったら？」

物の怪たちの言葉は、巡にはいちいち難しい。

「ミズはの、人間の言葉で言うなら、付喪神のようなものだ。付喪神ってのはつまり、道具や器物も永い時間が経つと魂が宿る、と言われている、その精霊のことなんだがの。ミズが生まれたのは、その家にある水盤が、永い時間をかけてとても大切にされたからだ。そうだろう？」

かぼの言葉に、ミズはうんうんと頷く。

「物の怪は、偶発的に生まれるのも多いんだけど。ミズはね、人に、うんと大事にされたから宿った、ひとつの水盤の魂なのね。だから」

だから、人間に大事にされなくなったら、ミズの魂は力を失くしてしまう。

きれいな水を注いでもらえないということを、イコールで「大切でなくなった」「どうでもよくなった」と解釈するなら。人間の注ぐ情の大きさに比例して、ミズの存在は弱くなってしまうから困るということらしい。

かばやミーシャやシンと、ミズとの決定的な違いはそこにある。多くの物の怪は、母体となる物体が魂を持ち、形を成した、独立した存在だ。だからその母体さえあれば、弱点を衝かれるような事故が起こらない限りは、ほとんど消えることはない。

けれどミズのように、人間から注がれた情によって魂を得た存在は、もちろん母体である物体そのものが壊れたりするのも困りものだが、それとは別に。

人から愛されなくなったら、その存在は消えてしまう。

「ミズの水盤はね、もう二百年位前からあのおうちにあるのよ。凄いでしょ。で、ミズは百年位前に生まれたのね。二百年ずっと大事にされてきたんだから。いまのおじいさんだって、生まれたときからあの水盤の近くで生きて、長い間大事にしてくれてたのよ。だもの、そのおじいさんがミズに美味しいお水をくれなくなったのには、絶対に何か理由があるはずなのね」

別にどうでもよくなったとか、面倒くさくなったという可能性は微塵も考えていないのだろうか、ミズはただ、おじいさんが体調不良を起こしているのではないかと心配をしている。

人に情を注がれることによって生まれた存在なのだから、当然かもしれないが。

彼女が、人間を疑うことなど無いのかもしれない。

だから、巡も憶測で余計なことと言わないことにした。

それに、本当にそのおじいさんの体調が良くないのかもしれないし。だとしたら、ミズではなく人間からの意見として、おじいさんは病院に行った方が良く。巡が肩からぶら下げている水筒の中の水

は、ただ綺麗な水というだけで、万病に効く魔法の薬ではない。そもそも飲んでも平気ではあるらしいが、この水をそのおじいさんに飲ませるつもりは、巡にはさらさらない。ミズが望むから言うとおりにしたがる、体調を崩している老人にその辺の川の水を飲ませるなど、現実的ではないと思う。

けれど事情を知ってしまえば、それなりに気にはなるものだ。

あまり面倒事には関わりたくない巡でも、そのおじいさんとやらに会って、事実関係を確認したくなってしまった。

結局は、お人よしなのかもしれない。

それとも単に、かぼの勢いにつられていただけなのか。それはわからないけれど。

「ほら、あそこの家がそうだよ」

「ぬ？」

「あれ？」

道案内をするミズの指し示す方角の通りに歩くしかなかった巡とかぼだが、やけに巡の家の近所に近付いていると思えば。

示されたのは、天笠和菓子店だった。
なんてこった。

それならそうと、もっと早く言ってくれば良かったのに。

ミズがフラフラと飛び回った軌跡をきつちり逆戻りしていた一行。目的地が天笠和菓子店だったのなら、雑木林からここまで、最短距離の三倍ほどの距離を歩き回っていたことになる。

巡はがつくりと肩を落とした。

この気持ちは、体力バカの物の怪たちには絶対にわかるまい。

「ただいまあゝ」

それまでかぼの肩にとまっていたミズは、元気に跳ね上がった天笠和菓子店の正面まで飛んでいつてしまった。重力に反した飛行能力だが、背中が羽がまったく動いていないところを見ると、やはりそれはただの飾りであるらしい。

かぼが、ぼそりと呟いた。

「ミズのいうおじいさんとやらが、天笠のじいさまだとするなら、やはりもうひとつの可能性の方が高くなってきたの……」

「もうひとつの可能性？」

かぼの小さな声は、巡にだけ聞こえる。オウム返しで聞き返した巡に、かぼは苦笑とも取れる微妙な表情をして見せた。

「場合によっては、メグがちょっと嫌な思いをするかもしれん」

「僕が？」

「わちは慣れておるからの。構わないが……」

いちいち歯切れ悪く、しかしあまり歓迎したくないようなことを言うかぼ。しかし「慣れている」というのだから、巡だけでなく、かぼにとってもあまり良くない状況が待っている、ということなのだろう。

嫌な予言をしてくれる。

「まあ、なるようにしかならんものだ。様子を見てみるかの」
「……」

巡とかぼは、そろって天笠和菓子店ののれんの前に立った。

店の前に姿を現した和菓子店の主人は、巡とかぼの姿を見とめて、

いささか目を見開いたようだった。

「綺麗なお水持つて、ここまでついてきてくれたのお」

クルクルと飛び回りながら歌うように話すミズの姿を追うでもなく、店の主人は巡とかぼだけを、数秒眺めていた。

「……入りなさい」

それだけ言つて、主人は店の奥へ引つ込んでしまう。

厳格そうに見えるが、商売をやっているだけに、普段はそれなりに愛想の良い主人だが、今日のこの様子は、歓迎されているのかどうかも微妙だ。だが入れと言つたのだから、門前払いという訳ではないし。そもそも門前払いされるいわれもないのだが、先ほどの主人の表情の硬さが、予想外の来訪者を拒んでいるようにも見えたのだ。

巡がこの店の奥まで通されるのは、初めてのことだった。

普段は用事もないのだから当然かもしれないが。

店の主人——天笠あまがさ庄しょう二郎は、決して人付き合いの嫌いなタイプではないが、いかんせん巡は子供だから、個人的に庄二郎と親しくなる機会など、これまでには無かった。

「店先であまり大きな声を出すものではない」

庄二郎は、ミズに対して言う。

「はあ、い」

年寄りに説教されてもおののくこともないミズだ。もともと、庄二郎が生まれた時からミズは彼を知っているのだから、恐れる必要などないのかもしれないが。

「少し遊んで来なさい。私はこの子達と話がある」

「ええ、だつて、ミズが連れてきたんだよお」

自分だけ追い出されることに納得のいかない様子のミズだが、庄二郎の性格を知っているのか、一度反論しても聞き入れてもらえないと見るや、仕方ないといった体で部屋から出て行ってしまった。

莊二郎、頑固親父の部類なのかもしれない。

静かな和室の中で、かぼが口火を切った。

「姿が、見えておるのだの」

「ああ」

かぼの言葉に、短い言葉だけで頷く莊二郎。

「じゃあ聞くが、あの子は最近、水盤に綺麗な水を入れてもらえないせいで元気が無いとか言っていたが、本当なのかの」

「……」

「物の怪や、付喪神といった存在のことを、ぬしはどれだけ知っているのかの？」

「……」

かぼが何を言っても、莊二郎は黙ったままだ。

「もしもぬしが、己の持ち物である水盤を邪険に扱っているのだとすれば、その水盤の物の怪であるあの子はいずれ消えてしまうだろう。それを知っているか？」

直球で物を言い続けるかぼの言葉をずっと黙って聞いていた莊二郎だが、ややあつて一言だけ、そうなのだろうな、と呟いた。

「わちは別にそれについて説教する気はないがの。人が人に対してそうであるように、物の怪に対してだって、個人が個人をどう思うが勝手だ。たとえそれで己が消えることになるうが、わちらにとつてはそれもまた運命。人間が運に見放されて早死にするのと何ら変わらん。ただミズは、ぬしが水盤を大切にしないのは、主の身体が悪いからなのではないかと心配しておる。実際そうなのだとしたら、そつちの問題もあるでな。せつかくの縁だし、確認のためにもこうして出向いてきた訳だが」

莊二郎は、巡とかぼを交互に見つめた後で、口を開いた。

「その物言いから察するに、お前さんは人間ではないようだな。あの子以外にも、そういう存在があったのだな」

莊二郎は立ち上がり、二人に背を向けた。

「私があの子の存在を知ったのは、つい最近だ。まだひと月と経ってらん。ただ大切にしてきた水盤に、あんな幽霊のようなものが取り憑いているのだと知って、平静でいられる人間はそうはおらん。そうだろうが」

「……だから、その元である水盤を放って、あの子を消滅させようとしているというのか？」

「だとしたらどうだというのだ？」

言い捨てる莊二郎に、かぼも立ち上がった。

「別に、ならこちらは何も言うことはない。物の怪も人間と同様、結局は己の手の届かぬ部分には常に受身でしかないのだから。例えそれが己の魂の存続に関わることであっても、ミズだって納得せざるを得まいよ」

畳の上に座ったまま黙り込んでいた巡の袖を、かぼはくいくいと引いた。

「帰るぞ、メグ。これ以上話すことはない」

淡々と話を進行させるかぼだが、巡は黙って立ち上がった。

「期待に添えなくて済まん」

二人に背中を向けたまま、莊二郎は呟く。さつさと帰れと言わんばかりの態度だ。

立ち上がった二人は、挨拶もないまま奥の和室から出た。

「どうしたメグ。やけに大人しいの」

かぼと莊二郎のやり取りの間、黙って聞いていた巡の顔を、かぼは覗き込んだ。何事かの意見でも言いそうなものののに。

「ん……」

和室から店先に出て、そこでフワフワと飛び回っているミズを見つけた。ただ黙って飛んでいる分には、誰かに発見されることはまずないだろう。

他に客の姿が見えないことを確認して、巡はミズに対して一言だけ質した。

「ミズ、シュークリームは好き？」

巡たちの姿を見て飛んできたミズは、いきなりの質問にキョトンと目を見開いた。

「うん？ 好きだよ。初めて食べたのは最近なんだけど。テレビとかで見て、ずっと憧れてたから。あれ、ホントおいしいよねえ」

ほんわかと顔をほころばせるミズに、巡はそう、とただ頷いた。

「また来るよ」

多くは語らずに、巡とかぼは店を後にした。

きつと何事か話し合ったのだろうと単純に考えているらしいミズは、にこやかに手を振って巡たちを送り出す。

「どうした、メグ」

良くわからない行動を取る巡に、かぼはゆっくり歩きながら、彼の顔を見上げる。

「うそだよ」

一言だけ、呟く巡。

「なんで、うそなんかつくんだ」

足許に視線を落とす巡に、かぼはうんうん、と頷いてみせる。

「さあな……でも、わたらのためかもしれん」

巡が何を言わないでも、かぼはわかっているようだった。

多分また、天笠和菓子店には出向くことになるだろう。

二人きりの和室で、巡と莊二郎は、しばし無言で向き合っていた。

再び天笠和菓子店を訪ねた巡だが、今日はかぼはつれてきていない。というよりは、かぼ自身がついて来ることを辞退した。

「どうせ、黙って聞いていることしかできないからの」

というのは、かぼの談。おそらく、これから巡が莊二郎から聞きたそうとしている話の大筋を、かぼはもう理解しているのだろう。そしてそれがどんな内容であれ、かぼは反抗する気も意見する気もない。ならば、巡が自分で聞いて、自分で判断した方がいいだろうと、そう考えたのかもしれない。

巡の方にも、確信できていることが少なくともひとつはあった。

「なんで、嘘をついたの？」

巡の言葉に、莊二郎は無言のまま見返してくる。

ミズは今、巡の家でかぼたちと遊んでいて、ここにはいないから直球での会話が出る。正確には、巡が心置きなく話を進められるように、かぼがミズを家に呼び出したのだが。

「天笠さんがミズを良く思ってたんで、それで水盤をいい加減に扱ってミズを消そうとしているなんて、嘘だ」

「……」

だって、ミズはシュークリームが好きだと言っていた。

天笠和菓子店が、洋菓子であるシュークリームを店頭に置き始めたのはいつだ。巡の考えが間違っていないなら、それはちょうど、莊二郎がミズと出会った頃ではないのか。

巡がシュークリームをもらったとき、莊二郎は言った。シューク

リムが食べたいと言っている子がいると。それはミズのことだろう。だから、いつでも彼女に食べさせてやれるようにと、むしろそれが一番の目的ではなかったのか。

ミズは、シュークリームの存在をテレビで知ったとも言っていた。どんな形でかは知らないが、ちゃんとテレビだって見させていたということだ。ミズのことを、その魂ですらどうでもいいと思うくらいにうとましく思っているのなら、そんなことをするだろうか。

「なんで、そんな嘘をつくのかが知りたい」

莊二郎の言を嘘だと決め付けて、巡は話を進めた。
多分、間違いではないだろうと。

「……」

莊二郎は、一瞬だけ目を閉じる。

「あまり深入りをさせて、嫌な思いをさせるのもどうかと思っていたのだが……あれから考えたが、お前さんも物の怪と共にある身、あまり子供扱いして隠すのも良くないのだろうな」

物の怪というものの性質を知っておくのも悪くないだろう、と、

莊二郎は前置きした。

「私の水盤の扱いは、以前も今も変わってはおりん」

「……え？」

「変わったのは、ミズの方だ」

言いながら、莊二郎はほんの少しだけ、ため息をついたように見えた。

「どういうこと？」

「水盤に張る水も、活ける花も、これまでとなら変わってはおりん。水盤で花を活けるのに最良であるはずの水を、そうでないように感じるようになったのは、ミズの方だ」

莊二郎は、再び目を伏せた。

「寿命なのだよ。ミズのな」

莊二郎の率直な一言に、巡は目を見張った。

「……寿命？」

莊二郎が本当のことを言っていないというのはわかってはいたが、今のその言葉は予想外だった。というか、巡にはその言葉のちゃんとした意味が、上手く頭の中に浸透してこない。

莊二郎は、床の間に飾られた水盤を見やった。

「我が家に伝わるこの水盤はな、随分長いこと大切に扱われてきたが、これといった名品ではない。銘もない数物のひとつだ。むしろあまり出来のよくないものでな。焼きも上薬も甘いものを、見た目が気に入ったという理由だけでタダ同然で譲り受けたというのが真相だ。これまで良くもったものだと言ええる」

それは、つまり？

「限界なのだよ。ミズの本体である水盤は、もう壊れかけておる」大切にとは言うが、誤って畳の上に落としたことだって、莊二郎が生まれる遙か前からの長い長い時間の中で一度や二度ではない。そういった衝撃だって、その場ではなんともなく見えても、疲労がたまっていく原因になる。

焼きも上薬も甘いといういわゆる不良品であるなら、水など注がずに、ただ飾っておいたほうが良かっただろう。けれど天笠家はその水盤に水を張り、花を続け続けた。本来そうであるべきものとして。そういう意味でも、大切に扱ってきたと言えるかもしれない。だが、つまり。

「本体である水盤が壊れたら、ミズの魂も、保ってはいられない」
「……」

人間が年を取っていくのと同じように。

そしていつかはその生涯を終えるのと同じように。

形のある物はいつかは朽ち、その役割を終えるときが来る。

「知っての通りであろうが、ミズは水盤そのものの物の怪ではなく、うちにある水盤のそれだ。その水盤が壊れれば、ミズはミズとして生きてはいられないということだ」

「……そんな」

ミズは、年老いて生涯を閉じようとしている存在なのだ。

莊二郎は、そう言っている。

「物には必ず寿命がある。今が、ミズのその時なのだ。だから、どんなに大切に扱ってやろうが、朽ちかけているミズの身体は、それを正常には感じ取れなくなっているのだよ」

美味しいと言っていた水を、美味しく感じられなくなってしまったのは。

壊れかけた水盤が、その身に無遠慮に水を注がれているから。

ミズの魂そのものが、老いて壊れて消えかけているから。

「それを薄々感じ取ってはいるはずなのだがな。ミズは表面上認めようとはしていない。だから、多くを言えないでいたのだが……うちの水盤は、もういつ壊れてもおかしくはない状態だ」

「ミズが……」

消えようとしている。

そして彼女は、それを認めようとはしていない。

だから、美味しくなくなった水を、おじいさんの体調不良のせいにしてようとしている。

語られたことの意味を悟るのに、頭が追いついてこなくて、どう反応していいのかもわからないまま。

巡は、俯いた視界に広がる畳を、ただ意味も無く見つめていた。

「そんな感じはしていたよ。魂の消えかけてる物の怪は、案外とわかるものだ。だが……」

思案顔になるかばに、巡はその表情を覗き込む。

「大抵、物の怪なんてのはその運命を甘受するようにできているというか、それが常なんだがの。ミズがそれを受け入れようといっていないというのが、気になるところではあるな」

莊一郎も、そんなようなことを言っていた。

人間の姿になっているシンが、巡のベッドの上でゴロリと寝転が

「オレらみたいなのは、正直寿命なんて存在しないようなものだけだな。だから、寿命があるヤツの考え方ってのは、根本からは理解できねえけど……」

かばやシンは、元となるそのものの存在が消えて無くならない限りは、その魂は消えることはない。かばが何の物の怪であるのかは聞かされていないが、これまでの言から察するならば、シンやミーシャと同じ存在なのだろう。だがミズは、莊二郎の持っている水盤の寿命が尽きれば一緒に消えてしまう。

「もともと『生きている』者たちと違って、わちらには存在するといふ事に関しての執着はあまりない。聞き分けのない人間と違って、運命を受け入れるのがたやすくできているからな」

聞き分けのない人間で悪かったな。

心の中だけで悪態をつく巡だが、ここで毒づいても始まらないので黙っている。今話しているのはそんなことではない。

「人間に愛されて生まれた存在だから、ということかもしれないが、ミズのような物の怪など、他にも星の数ほどいるからの。もっともわちらも、その全てを掌握している訳ではないから、実際は己の消滅についてどう思っているかなど、わからんのだが」

存在し続けることへの執着があるうがなかるうが、それは必ず受け入れなければならない運命。何故ミズは、それを認めようとしていないのだろう。

「薄々わかつているはずだって、天笠さんも言ってたけど」

「人間だってそうだし。メグにはまだわからんだろうが、事故にしろ病気にしろ突発的に死んで行く者以外、大抵は自分の命が終わりかけていることくらいはわかるものだ。だがミズは、それを受け入れようとしていない。理由はあるんだろうが……」

未練とか、そういうものだろうか。それとも何か別の。

「なににせよ、それがあんなら聞いてやること位はできなくはないが、運命は変わらない」

だからな、と、かぼは巡を見た。

「ぬしはどうする。ミズとはあまり関わらない方がいいのではないか？」

巡はえ、と表情を変える。

「なんで」

「別にぬしがそれでいいのなら、わちは構わんがの……ミズと関わっていれば、必ず、ミズの死に目に遭うことになるぞ」

「！」

ミズと関わった時に、かぼが言っていたことの意味が、今わかった。

場合によっては、嫌な思いをすることになると。

ミズは人間ではないが、人間のように会話のできる存在だ。だから、もう話をして、ひとりの人間のように、その存在を認めてしま

った。ものの死は全て等しいとはいえ、やはり名も知らぬ存在の死を伝えられるのと、知っている者が死んでいくのは、全然違うものだ。

だが巡は、まだ本当の意味で「死」というものを知らない。

まだ誰のことも、失ったことはないのだ。

「それでもまあ、人間の死と物の怪の死は、まったく違うものだがの」

ほんの少し、巡に気を遣ってるのだろうか、かぼは軽い調子でそんなことを言う。

「違うつて？」

幾度もの死と向かい合ってきたであろうかぼは、フウ、とため息をつく。

「物の怪は、その魂が消えるときに、器もあとかたも残らない。だが生の刻の生き物は……死体というものが、残る」

そんなことはわかつている。わかつてはいるが、それがどれほどの差であるのか、巡にはよくわからない。

「身体が残っているからこそ、その喪失感は、恐ろしくでかいぞ。」

……まあ、こんなことは口で言ってもわかるものではないし、本当は、その時になって初めてわかるものなんだがの」

これまで動いてしゃべって息をしていたものが、その機能を一切停止する。

例えば病気で、もう心臓が動いているだけのような状態になっていたとしても、それはまだ、生きている。

それがすべて止まったときに。

その身体は、嘘のように、違うものになる。

もう二度と動かないし、しゃべらない。まるでこれまでのことが、夢であつたかのように。

流れていた血が止まり、体温が無くなった身体は、とてもとても冷たい。

何年も動いてきたもののなのに、そうなった瞬間から、腐敗が始ま

る。

生と死の、境界線。

それを知らない巡には、やはり言われても、心から理解することは難しい。

「話が逸れたな。とにかく、そういう『生物』よりは、物の怪の消失はあつという間だということだ。それでもな、そこにいた者が消えてなくなるといふ事実に変わりはない」

だから、それが嫌なら回避することもできるのだぞ、と、かばは言う。

ミスと関わるのをやめればいいのだと。

「ミスは、もうそんなにすぐに、消えてしまふの？」

巡の質問に、かばは頷く。

「水盤次第だからの。今日消えてもおかしくはないのだよ」

水盤が壊れたら、どうしてもダメなのだろうか。

水盤を大事にする気持ちから生まれた物の怪なのに。その大事にしていた人の気持ち、残ったりはしないのだろうか。

いや、こんな風に往生際が悪いのが、人間なのかもしれないが。

かばがダメだと言っているのだから、そうなのだろう。

「それでも」

巡は俯きがちになっていた顔を上げた。

「だからって僕は、逃げたりはしないよ。誰も逃げられないのに」

ミスも、荘二郎も。

巡が直接の当事者という訳ではないが、そのことを知ってしまったからには、まるで無関係という状態には戻れない。ミスの死に目に遭わないようになって、今さらだ。

「天笠さんだつてきつと、辛くない訳はない。ミスだって」

荘二郎やミスが、今どいう風に考えているのかも、ちゃんとはわからない。けれど、それを知っていてやる存在は、多い方がいい

ような、そんな気がしたのだ。

「もつと、天笠さんにもミズにも話を聞きたい。僕だけ無関係を決め込みたくない」

一大決心をするような感じでもなく、淡々と言う巡。

「そうか」

そんな巡に、かぼはただ頷いた。

巡がそういう気でいるのなら、かぼはもう、何も言うつもりもなかった。

巡は莊二郎と二人で話したときに、初めてミズの元となっている水盤の姿を見た。

それは深い深い藍色で。絵柄は入っていないが、意識して作られた色むらが目を楽しませる、上品な雰囲気を持つ水盤だ。莊二郎は何の銘もない上に不良品のようなものだと言っていたが、見た目だけなら、大量生産とはいえなるほどひとつひとつ手で作られたであろう特有の趣をかもし出している。

今日もそこには、薄いピンク色の水蓮が活けられていた。

「おじいさんはいつも、お庭の蓮の池から、このお花を持ってきてくれるんだよあ」

その水盤に腰掛けながら、ミズはニコニコと笑っている。

今のミズを水盤からあまり離してしまうのは良くないんじゃないかと考えて、ミズと遊ぶという名目で天笠家まで足を運んだ巡だったが、一見して今のミズに、弱っているような変化は見えない。

水盤自体も、巡の目から見えてどこが良くないのか判断することは出来なかったが、莊二郎の話によると、もう全体的に弱っていて、目には見えにくい亀裂もあちこちに生じているらしい。片手に持つて振り回してみれば真っ二つに割れてしまってもおかしくないほどで、おいそれと動かすことも出来ない状態なのだ、と、少し悲しそうに見える表情で言っていた。

それでもこうやって、ちゃんと水を張って花を活けている。

「ミズはさ、どうしてこうやって、物の怪になったんだと思う？」
何とはなしに、巡はミズに訪ねてみた。その言葉に、巡について

遊びに来ていたかばも彼に視線を向ける。

ミズは、いきなりの巡の質問に、うーんと首をかしげて困った顔を作る。

「わかんない。でもお、この水盤を大事にしてくれる人と、お話が出来るかもしれない存在になれたのは、嬉しいよお」

物の怪になったからといって、全ての人間と会話できる訳ではない。ミズはまだ生まれてから百年しか経っていないという話だが、その間に、ミズの存在に気付いたのは、莊二郎が初めてであつたらしい。

なにもこんな今際の際になつてと思わなくもないが、こういう時だからこそ、ミズの存在力が強くなつたのだと考えられなくもない。命の、最後の灯し火のように。

「そうだよな。物の怪と人間は、会話が出来る。……なあ、かば」
巡は、今度はかばの方に話を振った。

「物の怪はどうして、人間の姿で生まれてくるんだ？」

巡の言葉に、かばはキョトンと目を見開く。

数秒そつしたあと、かばはあからさまに呆れた表情で巡を見た。

「別に全ての物の怪が人間の格好をしている訳じゃないぞ。人間であるぬしが、人間の形をした物の怪しか認識できていないだけだ」

物の怪の総数で言ったら、人間と話の出来る物の怪のほうが、出来ない物の怪よりも数は少ないらしい。話す機会がないからこそ、人間である巡には認識しにくいだけで、本当はそこかしこに物の怪は存在しているのだ。

「だとしてもだ。じゃあなんで、かばやミーシャやシンや、ミズみたいな物の怪は、人間みたいな姿で生まれてきたんだ？ 元は人間じゃないだろう？」

かばは何だかわからないが、ミーシャは川で、シンは猫で、ミズは水盤だ。人間でないものから魂を独立させて生まれてきた彼らが、どうして人間の姿でいるのかが、巡にはわからない。

かばは、どこか遠くを見つめるような表情で、巡から視線を外し

た。

「正直、そのところの真実は、わちら物の怪にもわからんよ。だが……」

「だが？」

「人間の姿に転じる物の怪の多くは、人間と関わりの深い環境にいることが多い。だから、人間の姿になって生まれてくるのかもしれない」

かぼは再び、巡を見た。

「人間と、話がしたいのかもしれない」

人間の使う言語を用いなければ、人間と交流を図るのは難しい。人間を含む、全ての生物の力が弱まる魔の刻でしか大手を振って存在できない魔物たち。けれど、それでも、いつの世もその生命力で大股闊歩で生きる人間に。

懂れて、いるのかもしれない。

「己らを生物の代表のように勘違いしている種族だがの。それをまると否定できない魂の強さを持っているのが人間だ」

憎まれ口も忘れないかぼ。だが、別にそんな人間を責めている様子でもない。

「人間と、何らかの形で関わりたい願望の表れなのかもしれない」
もちろんかぼにも、真実はわからないけれど。

「ミズはあ、おじいさんと話がしたかったよお、ずっと。やっとそれが叶ったんだもん、すごく嬉しいさあ」

これまで生きてきた百年間のうちの、まだほんの一ヶ月ほど。

「ミズの水盤をこの家に置いてくれた人のことは、ミズも憶えてないけどねえ」

物の怪として魂を得る前のことは、ミズもさすがにわからないらしい。

「だから他の物の怪のことはわからないけどお、ミズは絶対、人とお話したくて、お礼言いたくて物の怪になったんじゃないかなあつて、そう思うよあ。この水盤で心を癒されてる人たちに、ちゃんとその気持ちを、水盤も受け止めてるよつて、そう教えてあげたくて……」

嬉しそうにそこまで言つて、ミズはふと俯いた。

「でもあ……おじいさん、まだミズに美味しい水くれないんだよ。どうしてなのかなあ。ミズのこと、嫌いになっちゃったのかなあ」それでもそんなはずはないとでも言いたそうに、ミズは言葉にしてみました後で、フルフルと首を振った。

そうではないのだと、巡はミズに言えなかった。

水が変わったのではない。ミズが変わったのだ。

巡があの小川の水を持ち帰った日だって、荘二郎はその水を、水盤に張ったらしい。けれどその時ですら、ミズは水が綺麗になったと喜ぶ気配はなかったそうだから。

どう言えばいいのかわからない。

自分が言っているのかどうかも。

多くを言えず、「おじいさん、どこからだの具合悪いんじゃない？ 大丈夫？」と、荘二郎に対し気を遣う言葉しか掛けられないミズと、それをわかつていても沈黙を貫く荘二郎。

彼はこれから、どうするつもりでいるのだろうか。

ミズが、急に弱くなった。

この一日二日で、ミズの姿を見なくなったと思っていたら、ミズは水盤の前でじっとしたきり、ほとんど動かなくなっていた。

今にも死にそうという訳ではないが、水盤の縁に腰掛けたまま、ただぼんやりと一日を過ごしているらしい。その表情も、明らかに精彩を欠いている。

天笠家に様子を見に来た巡は、それを目の当たりにして緊張を覚えた。

隣に立つかばは、表情ひとつ変えていないように見える。どんなことを考えているのかも、巡には読み取することはできない。

巡とかばの姿を見て、ミズはその来訪を喜んだが、すぐにとっても悲しそうな表情を見せて俯く。

「もうずっと、ミズ美味しいお水入れてもらってないよお。どんどん元氣じゃなくなっていくんだよ。どうしてなのかなあ？」

莊二郎の体調を気にしていたミズだが、ここへ来てそんな余裕も無くなって来ているらしい。それに、体調が悪いはずの莊二郎は、いたって普段通りの毎を送っている。

「なんでかなあ？ おじいさん、そんなにミズのこと嫌いなのかな。嫌われて、放っておかれて消えちゃうなんてことないよね？ おじいさん、どうしてる？ 元氣なのかな？」

もう、自ら確認に動くのも億劫なのだろう。莊二郎のことを気に掛けているというよりは、自分のことに必死になっているようにも見える、今のミズだ。

巡は、どうすればいいのかわからない。

このままではミズは本当に、自分は嫌われていると誤解したままこの世から消えてしまうことになるのではないか。そんな風に思った。

本当のことを、言っただけでやるべきなのではないかと。けれど、それを知らせてどうなる？

キミは莊二郎のせいではなく、自分の寿命が尽きて消えていくのだと。

ミズにしてみれば、同じことではないか。

それにこれはおそらく莊二郎とミズの問題であって、巡が口出することでは無いように思える。けれど。このままミズを黙っていることしか出来ないなんて。ミズがいなくなってしまうかもしれないという事実も悲しいが、それをこうやって傍観するしかないことも、悲しい。かぼの言う『嫌な思い』が、こんなところにも形を成している。

スルリと音を立てて、巡の背後の襖が開いた。

そこに、莊二郎が立っている。

「天笠さん……」

「おじいさあん」

莊二郎の顔を見ると同時にその名を呟いた巡の声に被るように、ミズの呼びかけが部屋に響いた。

「おじいさん、そこにあるのは新鮮な、綺麗なお水？ ミズに持ってきてくれたの？ もうおじいさんは元気になった？ ミズのこと嫌いで、いじわるになったんじゃないよねえ？」

矢継ぎ早に問いかけるミズ。

いじわるなどと言われなければならないことを莊二郎がしていた訳ではないが、そう言われても莊二郎はもちろん怒り出すこともなく、その手に持つ水筒を水の目前に掲げて見せた。

「これは、今日その坊主と嬢ちゃんがミズのためにと持ってきて

くれた、小川の清流の水だ。この前、お前が私にと持ってきたものと同じな」

正確に言えば、あの時運んできたのは巡だが。

「今朝、水盤に入れてやったのはこの水だ。どうだ？」

そう言われて、ミズはわからなそうな顔で首を傾げる。

「……？」

言われている意味がわからない。

今朝の水？ それは違うはず。美味しくなかった。はず。

だってミズは、こんなに元気をなくしているのに。

ミズが元気をなくしているのは、莊二郎がミズのために綺麗な水を用意してくれなくなったからであって。すなわちそれは、ミズの水盤が大事にされなくなったからであって。そうでなければいけないはずだ。

他に、ミズが元気をなくす原因の心当たりが、あつてはいけない。本当は、水が綺麗かどうかが最終的な問題ではない。この家の水盤が、魂というものを形作るほどに大切にされているかどうか問題なのだ。

愛で生まれた魔物は、愛が無ければ存在し続けられない。

だから逆に、大切にさえされていれば、ミズはずっとここにいられるはずなのに。

ちゃんと綺麗な水を与えられてもミズが元気にならないのは。

本当は水盤なんてもうどうでもいいのに、仕方なくやったことだから？

そんな風に、思いたくない。

けれど、そんな風に思いたくないけれど、じゃあそうでなかったとしたら、どうしてミズは、どんどん弱くなってきたのか。

愛されていて、こんなに弱くなっているのだとしたら。

ミスがたどり着く結論は、ひとつしかありえない。

「ミス……認めなさい」

莊二郎の一言に、ミスは両目を大きく見開いた。

「出ていた方がいいかの？」

かぼが小さく呟く。

だが、莊二郎は緩やかに首を振った。

「お前さんがたが嫌なのでなければ、構わん」

小さな声で言う莊二郎は、ミスに本当のことを話すつもりでいるらしかった。

多分、お前さんも憶えているだろうな。

莊二郎は、ミズに向かってそんな風に話し出した。

「水盤のあるこの部屋では騒ぐことが出来ずに、私はいつも不満に思っていた」

莊二郎がまだ幼かった頃の話だろうか。

ミズの水盤のあるこの部屋は、中庭に続いている和室で、水盤のほかにも年季の入っていそうな掛け軸やら用途の良くわからない調度品やらが置いてあって、確かに子供が遊ぶには向かない場所のようにも思える。

「私は兄と違って乱暴者だったし、暴れたい盛りだったからな。兄が入っても怒られないこの部屋に、自分だけが入るのを許されないことに腹を立てていたな」

意外な過去だ。

物腰静かな莊二郎にも、子供時代はあったという訳だ。

元氣のないミズも、それにはうんうんと頷いた。

「あの時は驚いたんだよお。ミズ、こわされちゃうかと思ったんだもん」

にやは、と笑うミズ。けれど当時、笑い事では済まされない事態が起こっていた。

「兄ばかりが可愛がられていると思いこんでいた私は、役にも立たない古いものがこの部屋にあるのが悪いのだと、この部屋にある装飾品を次々と壊してまわったな」

「うわ……」

ついつい声を上げてしまう巡。

莊二郎、かなりの悪たれ坊主だったらしい。

床の間に掛けてあつた掛け軸を外して放り、壺は中庭に投げて壊した。使いもしない日本刀は池に投げ込み、薬箱や茶器も散らかしまくつて、そのいくつかは使い物にならなくなった。そのどれも、法外に値段の張るものではなかったが、どれも年季の入ったそれなりに高価なものであることは間違いなかった。

「そして水盤に手を掛けたときに父親に見つかつて、大目玉を食らったな」

ミズが命拾ひした瞬間だ。

閻魔か鬼神かのように怒つた父親は、散らかり放題のその部屋に、莊二郎を丸一日閉じ込めた。つまりこの部屋だ。

この部屋には鍵はついていない。襖を開ければ隣の部屋だし、脱出する気になれば、中庭にも出られた。けれど、当時の莊二郎にそれはできなかった。それほどまでに、父の存在は脅威だったのだ。この部屋を抜け出そうものなら、今度はどんな厳罰が待っているのか。当時の家庭の多くがそうであつたように、天笠家の大黒柱も例にもれず厳格で、逆らえる人間など家族の中には誰ひとりいなかった。

そんな風に、どれほどの処遇が待っているかも最初から想像できたのに、莊二郎は衝動を抑えることが出来なかった。結果、予想通りに父を怒らせた。

「この世に存在する全てのものは、いつかは壊れて無くなる。いつかは消えてゆかねばならぬ物を、お前が途中で壊すとは何事かと、相当絞られたな」

そして、時代を越えて残せるものを大切にする精神。それがいかに尊いものであるか。そんな説教も時間をかけてされた。やんちゃ盛りの当時の莊二郎には、到底心から納得できるものではなかった

が。

そうして薄暗い部屋にただ押し込められて。

莊二郎はその間、唯一壊れていないミズの水盤と向き合っていた。莊二郎が壊し、散らかした部屋の中で、唯一無事であった水盤。

そこには、いつも通り淡い色の水蓮の花が、活けられていた。

水に浮かび、けれど揺れることも無く、ただ静かに。

はかない時間を咲き誇る花と、それを抱える、藍色の水盤。

長いことただそれを眺めなければならなかった莊二郎は、物言わぬそれに、確かに慰められたのだ。その、静かな美しさに。

「ミズはそのときずっと、いいこいいこっとおじいさんの頭なでてたんだよあ」

ニコニコと笑うミズ。

もちろん当時の莊二郎には、ミズのそんな姿は見えていない。けれど、人や動物のようにには動かない彼らが与えてくれる潤いのようなものに、初めて気付いたのだ。彼らのそんな恩恵はあまりにも密やかすぎて、じつと静かに感じようとしなければ、気付けるはずもなかった。

それがとても大切なことであるのだと、莊二郎はその時初めて感じた。

「それからだよねえ。おじいさんが、自分でミズに花を活けてくれるようになったのは」

ミズは嬉しそうに言う。

莊二郎はまだ子供だったから、時には手折ってきた桜の枝を不恰好に無理やり飾るなどという無茶をしたこともあったが。そのときは、父には叱られなかった。いや、桜を折って持ってきたことだけ注意されたような気もするが。

「それ以来、水盤は私にとってとても身近なものになっていたし、きつとミズにとっても、私が一番身近な人間であつたろうと、自負

はしているよ」

うん、とミズは頷く。

「みんなミズの水盤を大事に大事にしてくれたけど、水盤を嫌ってたおじいさんが一所懸命お世話してくれるのが、本当に嬉しかったんだあ。だからこの人だけにでも、ミズの姿が見えるようになればいいのになって、ずっとずっと思ってたんだよ」

お願い叶って、しかもミズが存在を受け入れてくれて、とーっても嬉しかった。

そう言って、ミズはくふふ、と笑った。

「私はつい最近までミズの存在に気付かなかったが、随分長い時間を共に過ごしてきた。だから、ミズ、その私が言うことを、しっかりと聞きなさい」

「なあに？」

莊二郎の言葉に、巡だけがそっと目を伏せた。

来る。

ミズがすべてを知るであらう、その瞬間が。

ミズは、無表情だった。

もう、寿命なのだと教えられても。

それが逃げられない運命であると聞かされても。

思ってもみないことを言われて、思考がついて来ないのか。それとも薄々感じていたことを認めるのに時間がかかっているのか。ミズの心の中を、巡が読み透かすことはできなかったけれど。

「最近この部屋からあまり水盤を移動しなくなったのは、もういつ壊れてもおかしくなかったからだ」

莊二郎は、水盤と、そこに座るミズを見つめたまま、ゆっくりと話す。

それまで莊二郎は、水盤を陽のあたる場所に出したり店先に移動してみたりと、色々なことをやっていたらしい。

けれど、ここ最近それが出来なくなっていた。

流れるというほどではないが、微かな水漏れも発生しているような状態だったのだ。持ち運ぶ際に、突然壊れてもおかしくない。

「物には絶対に寿命がある。無機物でも有機物でも。魂にだって、終わりは必ず来るものだ」

魂の大きな流れについては、莊二郎の知るところではない。人にしろ物の怪にしろ、心とか魂とかいう物が、形を失った後にどこへ行くのか。どのような形になるのか。あるいは完全に消滅するのか。それは、誰にも、わからない。

けれど、個々としての魂、たとえば今そこにある『ミズ』という魂が、終わりを迎えようとしているのは紛れもない事実だ。

いずれは莊二郎や巡だつて。

そして、ずっと遠い未来に、かばやミーシャやシンだつて。いつかは。必ず。

「だから、ミズ……」

それでも、言いよどむ莊二郎。

こんな告知など、したいはずはない。けれど、それをしなければ、ミズは大きな誤解を残したまま、この世から消えることになる。

莊二郎の言葉を遮るように、ミズはフワリと飛んだ。

「ミズ？」

呼びかけにも応えずに、ゆるりと莊二郎の目前を横切り、開いたままの襖の向こうへと向かう。

「ミズ！」

どこへ行こうとしているのか。

そのままどこかへ消えやしないかと、一瞬戦慄した莊二郎が立ち上がりかけた。

「今の状態で、水盤から離れて遠くへは行けないと思うがの……」ボソリと呟くかばを、立ち上がりかけた莊二郎と巡が見つめる。

「弱くなった魂は、抛り所を離れては存在できんよ。別に弱ってもない、わちらですら長いこと遠ざかつてはいられんのだからの」例えばミーシャが川から離れてはいられないように。

弱ったミズは、なおさら水盤からは離れられない。

「でも……」

あまりに無表情だったミズの様子が気になった巡が口を開きかけた時、ミズが先程と同じ調子でゆるゆると戻ってきた。

腕に、何かを抱えている。

どこにでもあるような、木工用ボンドだった。

「ミズ！？」

片腕一杯にそれを抱え込んで、グルグルとそのボンドのフタを回

すミズ。外したフタを投げ捨てて、ボンドの口を水盤へと向けたミズの目前に、莊二郎は瞬間の判断で腕を差し出した。

水盤との間に入り込んだ莊二郎の和服の袖に、全身のあらん限りの力を振り絞って圧迫された容器から飛び出した白いボンドが大量にかかる。

「何をする！」

莊二郎の声に、ミズはパツチリと見開いた目を彼のほうへと向けた。

「何って、ボンドで水盤をくつつけるんだよ。壊れかけてるなら、ボンドで直せば大丈夫じゃない。水漏れしそうな部分、ミズが一番知ってるしい」

さも当然のように言うミズから、莊二郎はボンドの容器を取り上げようと手を伸ばした。

「やめなさい」

厳しい顔を見せる莊二郎に、ミズは眉を寄せる。

「なんでえ？ どうしてジャマするの？」

莊二郎の手から、ボンドを守るように抱え込むミズだが、掌サイズのミズと莊二郎では、力に差がありすぎる。そうでなくともミズは弱っているのだ。ミズはすぐに莊二郎の手で捕まえられてしまった。

「そんなことをして何になる！」

莊二郎にボンドを取り上げられて。怒気を帯びた声で責められるような形になって、ミズの表情に初めて感情が浮かんだ。

「なんでよお！？ 水盤が壊れたら、ミズが死んじゃうんだよ！？ 消えちゃうよ？ おじいさんはその方がいいのお！？」

「だが、だめだ！」

多分、ミズは気付いていた。

水盤自体が寿命を迎えていることを知っていて、それでも認められなかったのだらう。だから無理やり理由付けをして言い逃れをしていたのに、止めを刺すように真実を突きつけたのは、莊二郎だ。

ミズは激しく首を振る。

「物の怪は凄く長生きなんだから！ 人間よりずっとずっと！ だから、ミズは人間がミズより先にいなくなっちゃうのだって、ずっと見守ってきたよ。悲しくたって寂しくたって、それが運命だと思って、思うようにして、せめて静かに見守るのが一番いいんだって」

まくし立てるミズは、そこで大きく息を吸い込んだ。

「長生きなのに！ なのになんで、よりによって、やっとミズのと見えるようになったおじいさんより先に、ミズが消えなくちゃならないの！？」

「ミズ……」

「ミズがいなくなったら、おじいさんひとりぼっちじゃない！！ ミズはひとりだって平気だよ、慣れてるもん。そうやって生きていくのが物の怪だもん。でもおじいさんは違うじゃない。おじいさんをひとり残して、ミズだけが消えちゃう訳にいかないでしょお！？」
人は、いつか死ぬ。

ミズが生まれてからまだ百年ほどしか経っていないが、その間だけでも、ミズは自分が知る人間を幾人か見送ってきた。ただひとり、ミズの存在を見つけてくれた荘二郎だって、いつかは。

それをわかっていて、ミズはずっと見送る覚悟をしてきたというのに。

自分が先に行かなければならないなんて。

この家でひとりで暮らす、荘二郎を残して。

その事実を否定するように、ミズはただ首を振って硬く目を閉じる。

「長ければいいというものではないわ……」

かばが、俯いたまま小さな声で呟いた。

かぼは、あつという間の仕草でミズの身体を掴むと、自分の洋服の飾り紐をするすると外し、それでミズの胴体をきつく縛り上げた。「痛い、いたーい!!」

「ぬしが妙な真似をするからだ」

背中を固く結ばれた紐を、ミズは自分で解くことはできない。その端をしっかりと握ったまま、かぼはこともなげに座りなおした。

「しばらく大人しくして頭を冷やせ」

「ちよつと、かぼ……」

巡が呟きかけても、かぼはその紐を解く様子はない。縛り上げるなんて、ちよつとやりすぎなんじゃないかと巡は思ったのだが。

巡は、頑として聴く耳を持たないかぼではなく、荘二郎の方へと向き直った。

「天笠さん……その、その水盤は、修復、みたいなことは、できないの？」

恐る恐る、といった体で、巡は荘二郎に問いかける。

ミズの出してきたボンドで思い出したのだが、骨董品の修復、なんて言葉を巡はテレビで何度か聞いたことがあった。

けれど荘二郎は無表情のまま。

「できなくはないだろうな」

「……それなら……」

荘二郎は、そんな巡の言葉に首を振る。

「お前さんの言うこともわからんでもない。だがな、それをやったとして、いつかまたなくなるのは逆らえない運命だ。確かに私が生きている間くらいは過ごせるかもしれない。だが、傷つき壊れかけた身体を無理やりつぎはぎだらけにして生きて行きたいと、お前さ

んなら思つかね？」

「……」

巡は、正直言葉を返すことができなかった。

それでも、少しでも長く生きられるのなら、その方がいいんじゃないかと。そんな風にさえ思えるのだけれど。

「お前さんはまだ若い。それでも長く保てる方がいいと、そういう風に思うかもしれない。若者が生に執着するのは当然だし、むしろそれでいい。だが老いというものはな。自分の持つ機能が、正常に働かなくなるといふことなのだよ。弱って折れた足や腕を無理やり縫い付けて、長く息を続けなければならぬというのは、決して幸せなことではない。……歳を取るとな、そういうことも、わかってくるようになる」

言っていることの意味はわからなくはないけれど。

でも。だけど。

ミズは、ただ。

「ミズは……天笠さんを残して行きたくないと、そう願っているだけなんだろう？」

それだけが彼女の唯一の願いなのだとしたら、それに伴う苦しみなんて、承知の上なのではないかと。難しいことはわからないけれど、その願いくらい、叶えてあげたっていいんじゃないかと、巡は考えた。

「そうだよ。ミズは、ミズはただ……」

「わがまま娘は黙っておれ」

乗り出して巡の言葉に勢いをつけようとするミズの行動を、かばは普段の己の行動を省みない一言で一蹴した。

「メグ。こやつのは、ただのわがままだ。ぬしが真面目に取り合ってやる必要はない」

「……かば」

あまりに冷たい、かばの態度。

物の怪は全体的にドライかもしれないが、ここまでだったろうか。

「天笠の爺をひとりで残したくないなどと言ってはいるがな。そんなことは余計な世話というものだ。こやつは爺のために言っているのではない。自分のためだ。全てな」

「そんなあ！」

かぼの言葉には、当然のごとくに反発するミズ。

自分はただ莊二郎に寂しい思いをさせたくない、それだけを考えていたのに。

「爺がひとりだなどと決めているのは、ぬしの勝手だ。ぬしは、ひとりきりになる爺のために言っているのではない。己が『ひとりきりの爺』に必要とされている存在だと、思いたいだけではないか」

「……！！」

違う、と、ミズは力なくその首を振る。

「違うよ、そうじゃない。ミズは本当に……」

「本当に爺のことを考えていると言っのなら、自分がいなくなつた後のぬしのことを考えている爺の気持ちは何故わからない。存在の理を捻じ曲げることで、ぬし自身にまで歪みを与えてしまうことを良しとしない爺の意志を、何故汲めない！ぬしはただ、行くな傍にいてくれと言って欲しい、必要とされていただけだ」

ひとりの寂しさを味わせたくないということは。

それを真剣に考えているということは。

ミズ自身が、そんな寂しさを過去に何度も味わって、辛い思いをしてきたということだ。

その寂しさを知らないのなら、莊二郎にそんな思いをさせたくないなどとは思わないはずで。慣れていようがいまいが、そこに逃げられない辛さがあるのは事実。

莊二郎だって、人工的に永らえさせてまで、ミズにそんな思いをさせたいわけがない。

「人間のように、未練がましいことを言っな、ミズ」

巡には、かぼや莊二郎の理屈は素直に納得することができない。

けれど、一番身近な年長者である母のことを考えた。

これまで意識したことは無かったけれど、順当に行けば、親子ほどの差がある母のほうで、巡よりも先に死ぬことになる。巡のほうに先に逝くという事態は、親不孝というものだ。

もしもその時が来たら。

死の縁に立つ母がもし、生きることを望んだとしたら。

死への行進を続ける身体を引きずって、「お前を残して行くのが心配だから、この身体をとりあえず長く保ってくれ」と懇願されたとしたら。

自分はどう思ふのだらう。

それは苦しみの時間の延長。

そうまでして母を長らえさせることを、自分は望むのか、望まないのか。

今の自分なら、きっと母の言うことを自分でも望み、彼女を永らえさせようとするだらう。けれど、長く生きていると考え方が多様化するという理屈もわからなくはない。納得できなかるうが、それは事実なのだと当事者が言うのだから。

ミズの願いと莊二郎の願いは同じであつたとしても、選んだ道は、相容れない。

とてもとても、難しい問題だ。

そして難しいからこそ、莊二郎は、殉ずることを選んだのかもしれない。

ミズにわざわざ厳しい物言いをするかばも、きっとそんな莊二郎の意思を汲んだ。

そういうことなんだろうな。

巡は自分なりに、そんなことを考えていた。

「運命は変えられんよ」

かぼは呟く。

「時の流れは、物体を消耗させる。物体が消耗すれば、魂だって消耗する。それがどういことなのか、わからなくはないだろう」

かぼの言葉に、ミズは黙ったままだ。

巡には、かぼの言うことはやっぱり理解しがたかったけれど。

「抵抗などできないのだ。ミズは皆を置いて旅立つのではなく、そこに残されるのだから」

魂が消えるということは、魂を持つものを置いていくことと同義ではない。むしろ、置いていかれるのはミズの方だ。

例えば天国のような場所へと駆け上って行くのではなく。

歩くことをやめて立ち止まったミズの魂は、時間の流れから置いて行かれる。それが、魂の死というものだ。本当のところはともかく、かぼはそういう風に、魂の消失というものを位置づけていた。

「いつかは皆、そうやって足を止める。そして自分の傍を通り抜けていく『時間』というものを、操ることなど出来ない。他の皆の『生きている時間』はな」

だから。

だからミズは、怖かったのかもしれない。

死ぬ、ということは。

魂が身体を抜けて飛翔するのではなく。

疲れきった魂が、時間から取り残されるということ。

多分きつと、そういうこと。

「私も、そう長いこと生き続けるわけではないよ」

静かな口調で、莊二郎が言った。

「どうせあと十年か二十年か。すぐに私も、この世からいなくなる。悠久の時間の中では、瞬きほどにも満たない一瞬だ」

莊二郎が、ほんの少し、笑った。巡たちには初めて見せる表情かもしれない。

「そして私が立ち止まる場所は、きつとミズのいる場所だろう。そこは、時間から取り残されている場所なのだから」

その言葉は、ただの慰めでしかない。本当のところは、誰にだってわからないのだ。けれど莊二郎は、根拠のない慰めをミズに向けて続けた。

「だからミズは、安心してそこで待っていれば良い。ほんの僅かな時間だ」

この世での、時間稼ぎがバカバカしく思えるくらいに。

「おじいさんは、悲しくないの？」

ミズは、莊二郎を見上げた。

しかし莊二郎は、首を振る。

「悲しいことなどあるものか。私は何も失いはしない」

朝が来て夜となるように。生の刻と魔の刻も、どちらもきちんと訪れる。

表裏一体であるこれらのように。

すべてのものは、もとをただせばきつとひとつだ。そして莊二郎の中から、ミズが存在が消えることはない。

「天笠さんは、ひとりじゃないよ。少なくとも、僕やかばにはもう出会ってる。この街には、天笠さんのお菓子を楽しみにしている人も沢山いる」

巡がようやく、自分なりの結論を口にした。

「そしてミズも、ひとりじゃない。君がどこで立ち止まっても、そこにはみんないる」

これまで見送ってきた、沢山の人たちが。

だから、悲しむ必要なんて、どこにもない。

それが真実であるかどうかはわからない。けれど、それはどうでもよかった。

避けられない運命を目前にする相手に、差し出さずにはいられない優しさがあるだけだ。見つからない真実を詮索するくらいなら、例えば優しい嘘がいい。

かばが、その後を引き継いだ。

「ミズ、ぬしは運命に対して絶対的に無力だ。だがそれは、全てのものがそうだ」

だから、折り合いを付けていかなければ。

生きているものも、そうでないものも。

「ミズと出会えたことは、私にとって幸運だったのだ。だから、お前に関することで悲しいことなど、何も無い」

莊二郎が、ミズを縛っていた紐を解いた。もうミズは、その場から動いたりはしない。

愛するという心を、そのままその姿へと変えて返してくれるそんな存在に。

出会えたことが、幸運だ。

「ミズと出会えて、幸せ？」

「幸せだ。ミズもそうだろう？」

「ミズはおじいさんに出会えて……」

幸せ。

「うわあああああん」

ミスは声を上げて、泣き出した。

迫り来る瞬間を、その小さな身体全部で受け止めようとするかの
ように。

別れるくらいなら、出会わないほうが良かった？

死ぬことがつらいなら、生まれてこないほうが、良かった？

でも、ミズは幸せだったよ。

せつかくお話できるようになったおじいさんとお別れするのが悲しくて悲しくて、ミズはそれを認めようとしなかったよね。

だけど、それを悲しんでちゃいけなかったんだ。

だって、最後におじいさんと一緒に暮らせたことが、ミズにとっては幸せ。

存在を知られないままで消えていったとしたら、今ほど悲しくはなかったかもしれないけど、今ほどの幸せも知らないままだった。

幸せの裏には、悲しみがある。

悲しみの裏には、幸せがある。

大きければ、片方も大きく。小さければ、片方も小さく。

振り子みたいなものだね。

明かりを落とした真夜中の和室の中。

水盤の傍で眠る莊二郎の掛け布団に身体を預けて、ミズはずっと囁くような声で話し続けていた。

「ミズは幸せ。だってミズがこうしているのは、ミズの水盤が、人にとってもとても愛されてるってことの証明だもんね」

愛が、自分を生み出した。

自分はなんと幸福な存在であることか。

愛されたまま消え行くことの出来る自分は、この上なく、幸せだ。

「おじいさんがまだ小さかった頃、みんなに莊ちゃんって呼ばれてたよね。ミズも、そう呼んでれば良かったなあ」

呼んでも気付くことなく、振り返らない人間に対して、ミズは一度も名前で呼びかけたことはなかった。呼びかけたって意味がないような気がしていたから。

「沢山名前を呼んでいたら、もっと早く気付いてもらえたのかもね」
もう、確認する術はないけれど。

「莊ちゃん……にやは、なんか照れるなあ。やっぱおじいさん、でいいや」

ポリポリと、ミズは頭をかく。

「メグちゃんも、かぼちゃんも優しい子だよねえ」

かぼにはしこたま怒られたけれど。

莊二郎や巡を傷つけないための、精一杯の優しさだったのだろう。ミズがわがままを言わずに、全て納得して運命を受け入れられるように。誰かが、言わなければならぬことで。

それをかぼは、自分が引き受けたのだ。

「ミズのために作ってくれたシュークリーム、凄くおいしいから、あの子達にもわけてあげてね。あ、でもそしたら、お金儲けられなくなっちゃうかあ。うゝん……でもでも、メグちゃんやかぼちゃん、と、ずっと仲良くしていてね。そしたらおじいさんだって、寂しいことなんてないもんね。それに」

そうしたらきっと、ずっとミズのこととも忘れないでいてくれるだろうし。

「忘れないでね。ミズのこと……なんて、言わなくてもきつと、おじいさんはミズのこと忘れたりしないと思うけどね」

ミズは、掛け布団の上から莊二郎の身体を抱きしめた。傍から見えたとすればそれは、莊二郎の身体の上に張り付いているようであ

つたろうけれど。

「あつたかい……眠いなあ。とっても眠い。今日はここで寝ていいよね……？」

大好きな莊二郎の上で、あたたかな、やすらかな。

なんて幸せなまどろみ。

「恥ずかしいけど、明日おじいさんが起きたら、うふふ、言ってみようかな。言っちゃおうかな。ミズは、おじいさんのこと」

コトン。

静かな音を立てて、床の間に置かれた水盤が、綺麗にふたつに割れた。

長い年月を経て刻み込まれていた亀裂が、己の重みに耐えられなくなつて、無理に繋がっていることを、今、やめたのだ。

器を失つて、そこにたたえられていた水が床の間の上に広がり、音もなく畳の上に流れ落ちた。

活けられていた水蓮の花だけが、割れた水盤の上に静かに佇んでいる。

莊二郎の身体の上から、ミズの姿はあとかたもなく消えていた。これまでのことが、まるで夢であるかのように。

莊二郎は、そっと閉じていた目を開けた。

暗闇の中、水に濡れた床の間の上で、ふたつに割れたまま役目を

終えた水盤を静かに見つめる。

——悲しいことなど、何もない。

そう、すぐに、自分も行くのだから。

それまではそう、老いばれは老いばれなりに、この世界で満足いくまで生き抜かねば。悔いのない人生を歩んでいかなければ、ミズに合わせる顔がない。

きつと幼いあの少年は、泣いてしまいかもしれないし。

そうしたら、泣くなと肩を叩いてやらねばならないだろう。

もしも泣かずに耐えることが出来たら、強い子だと褒めてあげよう。

あの物の怪の少女には——ありがとうと。

明日はこんなにも、忙しい一日になる。

大丈夫だ。悲しんでいる暇もなさそうだ。

ミズの言葉だって、ちゃんと聞くことが出来た。

「お前の言葉、しかと、最後まで……」

莊二郎は、再びそつと目を閉じた。

『明日おじいさんが起きたら言っちゃおうかな。ミズは、おじいさんのこと』

ミズは、おじいさんのこと。

おじいさんのこと、だーいすき。

「かぼは、天笠さんの新しい水盤見た？」

学校から帰宅した巡が開口一番言うのに、かぼは顔をしかめる。

「ぬしが連れて行ってくれんのに、わちが単独で見ってくるわけがなかろうよ」

よく言う……。

巡は小さな声で、呟いた。

いつもひとりで好き勝手に出かけてるくせに。

「しかし、今度は黄味の勝った淡い色の水盤とは、爺さまの趣味もよくわからんの」

「ミズの水盤は藍色だったもんね。でも前のは天笠さんが選んだ訳じゃないし……って」

やっぱり既に水盤を見ているんじゃないか。

どうしてこう、すぐわかる嘘を言うかな、と巡は思っけれど。どうせあれこれと言いつつ返してくるだろうから、何も言わない。あれから巡が天笠和菓子店に行くのに、かぼを連れて行ってなかったのは事実だし、そのことで拗ねているのだろう。けれど、一緒に行けば菓子を要求されるし、それを却下すれば荘二郎が売り物を分けてくれようとしてしまうし。それでは申し訳ない。

荘二郎は、ミズの水盤が壊れてから、すぐに新しいものを買って入ってきた。

ミズの水盤は、庭の池の中に沈めたらしい。

即刻破棄してしまうのはあまりに忍びないが、いつまでも壊れた水盤を抱えているのは良くないと判断してのことだろう。

失くした物に縛られていては、新しい一步は踏み出せない。
今度の水盤も、長い時間を天笠家で過ごすことになるだろう。

「あまりにも人間くさかったの……ミズは」

かばが、ポツリと呟く。

「そう？」

「人には人の、物の怪には物の怪の心のありようというものがあるのだから。違う時間、違う次元に存在する者同士だ。心のあり方で同じだったら、色々と不都合もあるだろう？」

確かに、そう言われるとそうなのかもしれない。

物の怪でなくたって、例えば人間と動物だって、多分まったく違うものだ。姿かたちも生活の環境も寿命も何もかも違う者同士が、同じ心持ちであるはずがないし、同じでいいとも思えない。

「人間に愛されて生まれた物の怪ならではの、なのだろうな。前にも言った、人間への憧れが、とても強かったからなんだろう」

おかげで厄介だったが、などと、かばはわざとらしくため息をつく。

「天笠さんが、かばが悪役になってくれたおかげだって言ってたけど」

かばがミズを諭してくれなかったら、ミズは納得できずに泣いたまま消えていたかもしれないと。

けれどそんな巡の言葉には、かばは気もなさげにフンと鼻をならした。

「別にそんなつもりはないわ。人の情という根拠を持って生まれ、それを抱えたまま消え行くことができる、そんな幸福な存在だといふのに、わがままばかり言っておるあやつに腹が立ったただけだから」

そんな風に言うかばに、巡はあの時かばが呟いた言葉を思い出した。

『長ければいいというものではないわ
かばは、そう言ったのだった。』

「なあ、聞くけど……」

ポツリと呟く巡に、かばはなんだと首をかしげてみせた。

「長い時間を生き続けるって、やっぱり辛い？」

聞かれたかばは、キョトンと巡の顔を見返す。

「別に、辛くはないぞ。わちらにとっては、それが普通だ」

うん、と、かばは自分をも納得させるかのように、ひとつ頷く。

「生まれ来ることに意味のある存在だというのは、うらやましくもあるかもしれんがの」

まるで、天変地異のように生まれてきている、他の物の怪よりもずつと。

けれど、そういう自分の存在は、それが当然のことと物の怪たちは受け止めているものだ。

だから。

生の刻に生きる者たちと、同じような心を持っていたではダメなのだ。

例えば人なら、この空虚な時間の長さには、とても耐えられない。

「天笠さんも、寂しくなるかな」

たとえ一ヶ月という時間でも、ミズと一緒に暮らした娘か孫のような存在だったろう。それもあれほどまでに、人間くさい彼女がいなくなつて。

「寂しいなどと思わせてはなんのだよ。なんのための人間社会だ。メグがそう思うのなら、傍にいてやればいいだけの話だろう。苦になることでもなかる」

「……まあね……」

「わちだつておるしの！」

かばはやかましいから、寂しいどころか鬱陶しくて仕方がないと

思っけど。

そんな風に憎まれ口を叩いてみても、それを聞き流す今日のかぼは上機嫌に見える。

「爺さまの心の中に、ミズはいるからの。問題ない」

それこそ生まれた時からずっと共にあった水盤。大切にしてきたその心が、消えてしまう訳ではない。

そう、巡もかぼも莊二郎も。ミズのことは忘れない。

生まれてきたことに意味を持っていた幸福なミズだけれど。

生まれてくることに、理由なんてなくなっていたい。

そこから過ぎす時間の中で、育てて行ける何かがあるはずなのだから。

それは形では残らない何かで。

だからこそ。

ずっと、そこにあって受け継がれていく。

ミズという存在は。きっとそんな何かの、結晶だったのだ。

<第三話・了>

くれぐれも身体と誘拐と宿題の進行状況には気を配るように、とおかしな指示を飛ばす朝比奈の言葉を締めくくりに、一学期が終わった。

何だかんだと溜まった荷物を抱えて下校する生徒たちの間を縫って、朝比奈は巡の傍に寄って来た。

「成瀬、お前は特に気をつけるよお」

わざわざ近くにまで来てそんなことを言う朝比奈に、巡は微かに目を据わらせてしまう。

「大丈夫、です」

「大丈夫じゃないヤツほど大丈夫とか言うもんだ。あんまりひとりで変なところに行ったりするなよ。お前は実績があるからな」

朝比奈の言葉に、巡は実際何も言い返せない。

かばに出会ったときもそうだったが、巡は大人しそうな顔をして好奇心旺盛な質なので、興味のあることに遭遇すると、それを追及するために無茶をしてしまうような部分がある。そういう時に他人を巻き込まないのはある意味美点かもしれないが、ひとりで行動するが故に、何かがあるまで誰も気付けないという嫌いがある。

まだ小学校にあがる前、巡はひとりで遠くはなれた街まで歩いて出かけてしまい、迷子になったあげくにヒッチハイクを繰り返して市内を一周した後で、農家のおばさんのリヤカーに乗って帰ってきたことがある。

理由はただ、流れる川がどこまで続いているのか知りたかったから。

けれど当然川沿いをそう長いこと歩いて行けるわけもなく、途中で辿っていたはずの川を見失い、どうやって帰ればいいのかわからなくなってしまうのだ。

自分の住む町を正確に言えないほど幼かった巡が、一度も警察のお世話にならずに帰ってきたのはまさに幸運だ。関わった大人たちが、誰も警察に届けようとすらしなかったのも、おかしい巡り合わせかもしれない。

一家の武勇伝として語られてはいるが、巡の担任になった時にその話を聞きかじった朝比奈は、頭を抱えずにはいらなかった。

本当に、とんでもない遠方まで行ってしまったり、すっかり誘拐でもされたりしたら大変なことになっていたというのに。

それ以外にも、地味な実績ならいくらでもある。

天然な巡の姉を朝比奈も見たことはあるが、実際巡も相当なものだと思っている。

「休み中はオレも学校にいないことも多いからな。緊急連絡先、ちゃんと控えてあるだろうな？ お母さんに確認しておけよ」

「はあ……」

なんで自分ばかり、こんなに心配されなければならないのだ。ちよつと心外な巡。

特にクラスの問題児という訳ではないのだが。

「実際、夏場つてのはおかしい連中もボコボコ出てくるもんだ。家に帰っても安心せずに、鍵をかけるのを忘れるなよ」

それはもう、学期末の注意事項でも散々聞いた。

「わかりました」

こういう時は、素直に返事をしてさっさと退散するに限る。

決してちゃんと話を聞いていない訳ではないが、教師の説教などというものは、反論すればするだけ長引くものだし。

「特に知らない人間には気をつけろよ。お前は巻き込まれ型なんだからな。オレの目の届かないところで、余計なことに首突っ込んだ

りするなよ！」

担任は伊達ではない。朝比奈は巡の性格までしつかりと理解している。

しかしえらい言われようなのは確かだった。

家に帰った巡からその話を聞かされたかばは、声を立てて笑った。
「そりゃあ仕方ないの。ぬしはちよつと目を離すと何をしでかすかわからんからの」

かばにだけは言われたくない。

大体、自分にそんな評価がついてしまったのも、ちよつと前にかば絡みで意味不明な行動を取っていたのが決定打ではなかったのかと、つい人のせいにしてしまいたくなる巡。

まあ、確かに理由としてそれは大きいかもしれない。

「そうか……夏休み……長い休みか……」

かばは、急に何かを考えるような素振りを見せる。

「……何」

「まあ、確かに気を付けるに越したことはないの。子供の長い休みというのは、大人の目が届かなくなる」

至極まともなことを言うかば。こうも現代事情通だと、生の刻の間、時々しか目を覚まさなかったという論が、ますますもって怪しくなってくる。かばに言わせると、物の怪は目覚めた段階の社会そのものを簡単に受け入れられるのだということらしいが。

かばは、珍しく真面目な表情で巡の顔を見つめた。

「なるべくひとりにならないように心がける」

「は？」

いくら休み中とはいえ、その言い方は少々大げさではないだろうか
かと巡は思う。

「何だよ、急に」

「ん」

困ったように目を伏せ、腕組みをするかば。

「どうも最近、おかしな人間がうるついているように感じての」
「おかしな人間？」

「この近所でな。どうもここいらの住人じゃない感じの人間を、何
度も見かけてな。この家の前でも何度か」

かば、ちよつと嫌なことを言う。

「思い過ぎとかじゃないのか？」

それが気のせいでないなら、ちよつと気味の悪い現象だ。

「なんと言うかな……今日もな、この家の前にそいつがいてな、こ
こから外を見ていたわちと、目が合ったのだよ」

「……」

目が、合った？

「それで、どうした？」

「どうもせん。そのまますぐにいなくなってしまったからの。まさ
に見ないフリ、といった感じだったかの」

かばは見た目だけはまったく普通の子供と変わらないから、目が
合ったくらいではそれが物の怪であることには気付かないだろう。

けれど、かばからアクションをかけているわけではない状況で、
素で彼女が見えたということは、その人間は逢魔の力を持っている
ということだ。

それを、自覚しているのかいないのか。

微妙なところだ。

けれどどちらにしても、知らない人間がこの辺りをうるつしてい
るというのは、あまり気持ちのいい話でもない。

「母上がない時は、できれば天笠の爺さまのところにも行って
いた方がいいかもしれんの」

「……」

それはそれで、色々和不都合が出てくるようにも思う。

だが、大人たちにも知らせておくに越したことはないだろう。

今は母親は家にいないから仕方ないとして、莊二郎には知らせておいたほうがいい。かぼの言う通り、物の怪絡みだと面倒だし。

巡は、早速とばかりに立ち上がった。

家を出た途端、かばは巡を小さな声で制止した。

「まて」

「？」

「わちを見るな。わちの言うことだけ、そ知らぬフリで聞け。……
和菓子店の方角に、見知らぬヤツらのひとりがいる」

「……」

ヤツらのひとりって、相手はひとりではなかったのか。

もしかして、本格的に何かヤバい状況なのだろうか。まさか誘拐団とか。それともここいら一帯の土地の買い上げだとか。どれもこれも現実的とは思えない。こんな事態に陥ったことすらない。

「和菓子店の方角はマズい。学校に行けば、まだ担任が残ってるんじゃないかの」

巡のような子供を何がしかの理由で狙っていると決まった訳ではないが、何かがあつてからでは遅い。

巡は黙ったまま、学校の方角へと方向を変えて歩き出した。

走り出したい衝動に駆られるが、それは何とか耐える。

藤乃木小学校の校門が視界に入ったあたりで、巡はビクリと足を止めた。

門の前に、誰かがいる。

クリーム色のワイシャツにカーキ色のスラックスと、姿はどこにでもいそうな普通の青年だったが、まとう空気が違うというか。

妙なプレッシャーを感じさせる雰囲気。

ゆるりと首を傾けたその青年は、巡の姿を視界に捉える。

力強い視線だった。

「こんにちは」

やわらかいのかそうでもないのか、判断に苦しむ声音で、静かにそれだけを口にする青年。

「……こんにちは」

一応、巡は挨拶を返してみた。

怪しい空気満点だったが、ここで端から疑う素振りを見せては、こちらが不利になる可能性もある。正直、巡の警戒心は最大値まで高まっていた。多分、この人物は、何がしかの特別な用事があるここにおいて、そして彼の意識のベクトルのようなものが、真っ直ぐに巡へと向かってきている。

「もう夏休みになるんだな。キミ、名前はなんていうのかな？」

ブルリと、巡の肩が震えた。

「なんで僕の名前を聞くの？ おじさん誰？」

巡の反応に、青年は眉を寄せて困ったように微笑んだ。そうしてもなお、とっつきやすいようには見えない。

「オレはまだ二十代なんだがなあ。まあ子供から見れば充分におじさんか」

唇の端をつり上げつつ、ガリガリと後ろ頭を掻く。

「警戒心が強いのは結構だが、キミひとりでは我らの追尾は撒けんよ」

「……」

青年の言葉に、かぼの目つきが鋭くなる。間違いない。

この男は、まともな類の人間ではない。それを隠すつもりもなくあからさまにすぎる。そして今、その標的は巡だ。一体何が目的なのか。

「僕に何の用？」

巡は青年を睨みつける。が、それだけの言葉を発するのが精一杯だった。こんなシチュエーションに今まで出遭ったことがないのだから、おののくのも無理はない。

「せんせ〜ってば」

急に、巡の後方から細い女性の声。

ビクリとした巡が振り返った。

高校生らしき制服を着た少女がひとり。屈託のない笑顔で巡の至近距離に立っていた。確か、巡の通う小学校のごく至近距離の高台にある、藤乃木学園グループのひとつである私立藤乃木高校の制服だ。

「……」

気配にまったく気付かなかった。

「ダメじゃない。こんな小さい子脅かしちゃ〜」

高校生とはいえ、大して年も離れていなさそうな少女に小さい子扱いをされて、いささかムツとする巡だったが、今はそんな場合ではない。

無言のまま微動だにできない巡に、トコトコと近付いてくる女子高生。

「私たちが用があるのは、そこのおチビちゃんの方なんだし〜」

「！」

彼女の視線は、はつきりとかぼを捉えている。

「そういうわけにもいかん。彼が逢魔の力を持っている限りは」

「……」

逢魔。

彼はハッキリと、そう告げた。

「話を聞かせて欲しくてね。どういっつもりで、その魔物と共にいるのか」

コッソ、と音を立てて、青年の革靴が、一歩巡の方へと踏み出し

た。

「魔物って……」

ジリ、と、巡は半歩後方へと退く。しかしその先には、ニコニコと微笑む女子高生がいる。

「とぼけなくていい。キミが逢魔の力を持っていて、その魔物と一緒に行動しているのはわかっている。私は」

「そこまでにして下さいよ」

「!」

後方からの声に、青年は一瞬の動作で振り返る。

校門の内側から姿を現したのは、朝比奈だった。

「うちの生徒をナンパするのはやめてもらえませんかね」

「先生!」

「朝比奈……」

「!？」

巡の呼びかけに続いた青年の「朝比奈」という言葉に、巡は驚愕した。

この人物は、朝比奈の顔見知り?

「今そいつに指一本でも触れたら、いくらあなたでも容赦できませんよ」

何が起こっているのか。

巡には、事態がまったく理解できなかった。

「指一本でも、とはまた、随分な言い様だな。まるで私が悪役のようだ」

クク、とさも愉快そうに笑う青年は、スルリと巡に近付くと、その肩にポンと手を乗せた。

その瞬間、巡の視界から朝比奈の姿が消える。

正確には、一瞬の動作で朝比奈が動いたために、その動きを予測していなかった巡の動体視力がついて行かなかったのだ。

青年と巡の間に瞬時に割り込んだ朝比奈の右拳が、青年の顔面めがけて打ち込まれるが、彼は驚く風でもなく、その拳を片手で受け止めた。止められた朝比奈の方も、それは予想の範疇だったのか、戸惑うこともなく左腕で巡の身体を自分の背後へと回り込ませる。

「充分悪役ですよ。満足な理由も述べずに個人の事情に深入りして待ち伏せなんてね。しかも相手は子供だ」

受け止めた朝比奈の拳を、青年はグイと払う。

「躊躇無しに攻撃してくるとはな。随分と嫌われたものだ」

「まさか、あなたが魔狩人になるなんてな……」

朝比奈の背後に庇われた巡には、彼の言っていることの意味がわからない。

魔狩人？

「いつ私が魔狩人になったと言った？」

「違いますか」

「いや、違わんがな」

青年を睨みつける朝比奈に対して、睨まれている青年の方は余裕

の笑顔だ。

「朝比奈、お前の方こそ、何故私達から離れた？ 私たちのやつて
いることを知っている以上、裏切り者の烙印を押されることは避け
られんぞ。正義でも気取っているつもりか」

「正義なんてありませんよ。オレはただ、オレのやりたいようにや
っているだけだ。魔狩人たちのやり方はオレの意志とは相反する。
それだけです」

そうだろうな、と青年は呟いた。

「お前がそうであるように、私も私の意志で動いているだけの話だ。
お前と意見が合わないのは仕方のないことだな」

「……」

朝比奈は、唇を引き結ぶ。ギリ、と歯噛みをしているのが巡にも
わかった。

「結局……あなたも人間以外はどうでもいいんですか」

「どうとでも」

気楽な様子でそれだけ言うと、青年は一步退いて、朝比奈から離
れた。

「お前がいるんじゃないか。出直すでしょう。だが私は、そこ
に魔物がいる以上、見過ごすつもりはないからな」

「……」

コツコツと音を立てて歩き出す青年を、朝比奈は微動だにしない
まま、ただ睨みつける。ここで追いかけて引き止めたりするのは
得策ではないと判断してのことだ。

「せんせってば」

まるで存在を無視するようにその場に取り残されて、そこにいた
少女はパタパタと青年の後を追う。クルリと振り返って、巡に向か
って「またね」と笑顔で言いおいてから、いそいそと青年に追
いついて共に歩き出した。

その場に残されたのは、三人だけ。

無言のまま朝比奈を見つめるかぼと、険悪な表情を隠そうともしない朝比奈。それにおののく巡。

訳がわからなかった。

ここは小学校の校門前なのだから、朝比奈が出て来たのは別に不自然なことではない。むしろ巡たちは、朝比奈に会うためにここに来たのだから。

けれど、巡は普段飄々としている「クラス担任」である朝比奈が、誰かに無遠慮に殴りかかるのをはじめて見た。そして先程の青年との会話は。

人間だとか魔だとか、そんな単語を平然と使う朝比奈を、巡は理解できない。

「……先生？」

やっと呟いた巡の声に、朝比奈はハツとしたように巡を見下ろし、曖昧な笑顔を見せた。

「悪い。驚かせたな」

ハハハと笑って見せるが、巡の表情から戸惑いの色は消えない。

朝比奈は困ったように巡を見下ろした。

「まあ……いつかは通らなきゃならない道だしな……」

ポリポリと、頭をかく。

「あれが、対魔物の研究機関とやら、なわけか？」

巡の足許で、ずっと黙っていたかぼが口を開いた。

朝比奈は頷く。

「そういうことだ」

巡は、目を見開いた。

「先生、なんで、かぼが……！？」

「あ、っと」

かぼに向けていた視線を、朝比奈は再び巡へと移した。

「どうということ？」

朝比奈が最初からかぼの存在に気付いていたという事実を、巡はまだ知らない。先ほどのまでのやり取りのせいでかぼが見えているだけならまだしも、まるで知り合いのような雰囲気がかぼと話す朝比奈に、巡は驚きを隠せなかった。

色々なことを、順を追って話す必要があった。

「これから、嫌でも面倒くさい事態になる。でもって長期戦になるのは必至だ。最初から、話を聞いてくれるか？」

困ったように、けれど優しい表情に戻った朝比奈に、巡は安堵しつつ頷いた。

ここではもう、頷く以外に出来ることはない。

遠慮がちな態度の朝比奈だったけれど。

巡にとって、話を聞く以外の選択肢は、無いように思えた。

かぼと初めて会話した公園までやってきた朝比奈は、せがまれたソフトクリームをかぼに渡しつつ、ベンチに腰掛けた。その場に立ち尽くす巡にも座るように促す。

「まあそう緊張するなよ。って言っても無理か」
苦笑する朝比奈は、いつもの彼だ。

けれど、今まで知っていた朝比奈とは違う。もつとも、巡は自分の担任教師であるという以外、朝比奈のことは何も知らなかったが、「まあひとつずつだな。とりあえずオレは、最初に教室に来たときから、その子のことは見えていたよ」

「え……」

「別に言っても良かったんだが、お前があんまり必至に隠そうとするからさ。それにあそこにいた他の人間にこの子が見えていない限り、隠し通そうとする意識は必要だと思っただし」

巡は、あの時朝比奈に言われた言葉を思い出した。

悟られなくては冷静に対処できるようにするんだな。

最初からそのつもりで、朝比奈は巡にそう告げたのだ。

「先生は、逢魔の力があるってこと？」

「ああ。まあ、それ自体はそんなに珍しいことじゃないけどな。これからそういう人間はどんどん増えてくるし」

それはかぼも言っていた。けれど、巡は自分以外にそういう人間を見たことがなかったから、驚きを隠せない。

莊二郎にもミズは見えていたが、あれは莊二郎の家に関係が深い物の怪だったから莊二郎が感知しやすかったというだけで、彼自身

に逢魔の力がある訳ではないと、かばが前に言っていた。実際かばのことも、巡と一緒にいて巡がかばをそこにいる者として扱っていたから見えていただけで、だから、正体を知るまでは、かばのことを普通の人間だと思っていた訳だし。

「それで、な」

考える素振りを見せつつ、朝比奈は巡とかばを見る。

刺激の少ない話し方を考えあぐねているようだ。

「魔の刻と生の刻の移り変わりの歴史は、これまでも暗に研究されてきてたんだ。昔からな。スパンの長い事変だけに、表に出ることはなかったが」

これまでの千年は、生物の繁栄の時代である生の刻だった。

千年と一口で言っても、これは途方もなく長い時間だ。文献で残る歴史の裏に、時の流れに埋もれ消えていく、あるいは事実を捻じ曲げられて残っていく事象はきつと数多くある。ひと言で千年前までは魔物が横行していて、またその時代が来るのだと言われても、大抵の人間はピンと来ない。

「神職だとか名のあつた家系とか、古くから代々続いている家の口伝や書物でだけ、その事変は語り継がれてきた。オレもまあ、そのクチでな。で、オレが生まれた頃には既に、連中との横の繋がりができてた訳だ」

「連中……」

先程巡の前に姿を現した彼らのことを言っているのだろう。

もともと彼らは、移り変わりの時代である逢魔が時ではなく、その後に来る本格的な魔の刻への対策を講じる集団だった。

これから先、この世界は魔物が横行する世の中になる。

今は物の怪と言われる者たちが出現するだけで済んでいるが、いずれ時代が進めば、生の刻の住人に危害を加えようとする連中も姿を見せ始める。それは、長い歴史の中での研究で明らかだ。

「本当に、そんな世界になるの？」

「なるな。近いうちに。とはいっても、1年や2年の話じゃない。50年か100年か……そういう未来の話だけだ」

魔の力が強まれば。

この世に存在するものに依存している物の怪だけでなく。魔の力のみから発生する魔物も出現し始める。彼らは、人間をはじめとする生の刻の住人のようには意志を持っていない。無害な者もいるがその大半は、生きる者に襲い掛かってくる危険な存在となる。

ただ己が存在しやすい世界となるために、その本能のままに。

巡は背筋に冷たいものが走るのを感じた。

「どうにも……できないの」

「できないな」

これまでも繰り返されてきた歴史だ。

そうやって、生の刻の住人と魔の刻の住人は、交互に繁栄と衰退を繰り返してきたのだ。人間の知る歴史の表舞台には出てこなかっただけで。

「だからあの連中は、そんな時代を迎え撃つために、魔物に対抗できる機関を作り上げようとしているんだよ」

フウ、とため息をつきつつそこまで言った朝比奈に呼応するように、かばもその両腕を組んで息をついた。

「それ自体は別段悪い話ではないよな。命の危険がある以上、それに対抗するのは人間の自由だ。攻撃には防衛しなければならん」

「そうだな。けどオレは、連中からは手を引いた」

巡が、朝比奈を見る。

「なんで？」

「性に合わないんだよな。そういうの。人間の未来を考えるのは結構だけどさ。でもだからって、誰もが社会のために、官庁に所属できる訳じゃないよな。そういうことだ」

それに、と、朝比奈は付け加える。

「連中の中に、いわゆる過激派のような人間が出はじめたし」

「過激派？」

「この世に存在する全ての魔物を敵対視する人間たちだ。彼らは、魔の刻の住人をすべて排除しようと考えている」

人間に襲い掛かる存在だけでなく、たとえばかばやミーシャやシンのような存在もすべて。

「要領が悪いの……そんなことが可能だと思っているのか」

自分も標的になっていくというのに、呑気な口調のかば。

「うん。無理だな。人間の力でそれは、限界がある。魔物たちが生の刻の連中を喰らい尽くすのが不可能なのと同じくらいに、人間が全ての魔物を排除するなんてできっこないんだ」

けれど、それをやろうとしている。

魔の刻の住人というだけで、何も罪のない者まで。

「だからまさか、あの人までそうなるなんて思ってもいなかったのに……」

最近怪しい動きを見せる連中の中に。まさか、彼の姿を見つけることになるうとは。

「あの人……」

「お前に声を掛けてきた、彼だよ」

朝比奈は再び、大きなため息をついた。

彼は、その名を氷村喜孝ひむらよしただといった。

「オレの知っているあの人は、魔の刻の住人との共存派だったんだ」
「共存派？」

朝比奈の言葉に、巡は首を傾げる。

「ああ」

魔の刻の到来と共に出現するはずの、凶暴な魔物たち。攻撃的な彼らには、防衛なり何なりの対策を取らねばならない。それは生の刻を生きる者たちのために。つまりは自分たちのために。

それと同時に、魔の刻を生きる無害な物の怪たちとは共に生きていけるようにと。

そういう風に考えている人間は多い。

物の怪たちは、人間と魔物の間にあって中立だ。

特にルールがあつてのことではない。ただ彼らは、己が暮らせるだけの場所さえあればいいのだから、人間にしても魔物にしても、無闇に狩ろうとする意志がないだけの話で。

魔の刻の住人にとって、生の刻のパワーは自分のためには良くないものだ。だから、魔物たちは生の刻の住人に対して攻撃的になるわけだが、何かを抛り所にする、かばたちのような物の怪は、生の刻の力が多少強くても何の問題もない。魔の力しか抛り所のない純粹な魔物たちよりは、ずっとタフに出来ているのだから。多少不便はあつても、その場に存在することくらいは出来る。

そういう中立な立場の彼らだから。

彼らまで攻撃対象にして、敵に回すのは得策ではない。

「むしろわちらは、自分の領域を荒らそうとする存在こそを、敵とするだろうな」

かばが呟く。

人間であろうが、魔物であろうが。例えばこれがミーシャなら、自分が抛り所とする川という存在を脅かそうとするものが現れたら、その対象と本気で闘うだろう。

人間であるとか魔物であるとか、そんなことは関係ない。
だから、それなら。

人間は、物の怪たちと心を通わせて、彼らを味方に付けた方がよほど有利になるはずなのだ。中立であるからこそ彼らは、自分が護ろうとするべきもののために、純粋にその力を振るう訳で。

「例えばわちは、メグの家には世話になっているからの。メグやその家族に危害を加えようとする者が現れれば、そいつと闘うくらいのはやるだろうな」

「……」

そういう風に例えられると、巡にもわかりやすい。

「それがわかつているはずなのに、どうしてあの人は……」

朝比奈から見て、氷村という男は、それを一番強く思っている人間に見えていた。

魔の刻をどうやって生きていこうかと思えば、あぐねる集団の中にあつて、いかに物の怪たちと力を合わせていくか、そして魔物たちと無駄な戦いをしないで済むにはどうすれば良いのかを、考えている人間だと思っていたのだ。

何が彼を変えたのか。

それとも、朝比奈が知っていたはずの彼は、もともと虚像でしかなかったのか。

「魔の刻の住人たちを殲滅しようなんて考えている人間は、それがいかに無謀であるかをまるでわかっていない。魔の刻と生の刻の移り変わりの歴史を、まったく鑑みていない」

本当に、人間さえ生きていれば他はどうでもいいと考えているのか。

それほどまでに、人間以外の違う次元の種族を、許すことが出来

ないのか。

この世界は、人間だけで成り立っているのではないのに。

「わざわざ敵を増やすことはないのにの……」

人間が牙をむけば、物の怪だって対抗せざるを得ないのに。

「氷村さんはな。藤乃木高校の教師なんだよ」

「え……」

朝比奈の言葉に、巡は一瞬面食らう。

あれが、教師？ 普通に？

初対面の印象が特殊だっただけに、そんな普通の職業の人だといふことが、少々理解しにくい。けれど、それであの女子高生が「先生」と呼んでいた訳かと納得する。彼女にとっては、氷村は自分が通う学校の教師なのだ。

しかし。

「なんで？ そんなに、逢魔の力のある人って多いの？」

「いや、ちよつと特別なんだ」

どういう風に言っているかわからない、巡の短い質問の意味を、

朝比奈は正確に理解したようだ。

逢魔の力なんて、そうそう持っている人は少ないだろうと巡は考える。これまでそんな素振りを見せる人間を見たことなんてなかったし、朝比奈のことを知るまでは、こんな特殊なのは自分くらいかと思っていたのに。だって実際に、お目にかかったことがなかった。なのに。

巡、朝比奈、氷村に女子高生。

なんでこの地域に、こんなに集中しているのか。

あの少女だって、そう遠い場所から藤乃木高校まで通ってきている訳ではないだろうし、かぼですらこの地域の人間ではないと思うほどに異様な雰囲気だった氷村までもが、その学校を職場としていたなんて。

巡は、そう質したかったのだ。

「特別って、どういうこと？」

朝比奈は、またも考える素振りを見せてから、巡を見た。

「藤乃木学園グループの学舎があるあたりな。あそこ、魔の刻の住人が発生しやすい『ゲート』があるんだよ」

なんだ、それは。

ゲート？

「便宜上の言葉で、本当に次元を繋ぐ門とかいうファンタジックなモノがある訳じゃないけどな。つまりわかりやすく言っちゃえば、魔物が発生しやすいポイントがな」

巡は、少しもそんなことは知らなかった。当たり前だが。

朝比奈の言うそれも、十分ファンタジックだ。

「お前の通う小学校含め、藤乃木学園が建っているのは、そのせいなんだ。もともとあそこには、そのために、学校を建てたんだ」

「……え？」

そのためにつて。

なんの、ために？

予想外の朝比奈の言葉に、巡はその瞬間、ただ面食らうことしか出来なかった。

世界のいたる場所には、魔物が出現しやすいポイントというものがある。

それに関する定義は確立されていないが、長い歴史の中で、その地点だけは確実なものとして確認されている。未だに発見されていない地点もいくつもあるのではないかという仮説もあるのだが。

それは日本にもいくつか点在していて、そのひとつが、藤乃木学園グループの小中高の学舎が近接して建つ地域一帯なのだ。

「なんでそんな場所に学校なんて作ったの……」

巡の疑問ももつともだ。

朝比奈は苦笑する。

「まず最初に言っておくけどな。魔の刻に対する研究機関、これを起ち上げた創立者の中に、藤乃木学園グループの理事長もいるんだ」

藤乃木学園グループの理事長。学園を創立した人物だ。

随分な高齢と聞くと、巡はその人物を見たことがなかった。これまでに一度も、学校で姿を見せたことはない。その名を聞く機会があるような場面でも、いつも代理を立てていた。見たこともない人物だから、もちろんそんな怪しげな機関の創立メンバーだなんてことも知るわけがなかった。もつとも、そんな機関の存在自体を、巡はついさっき知ったのだが。

「もともとあそこには古くから魔の浄化を生業としてきた藤乃木家の有する社があつて、神域とされていたんだけどな。成瀬は知らないかもしれないが、高校の裏手には、今も小さな社は残っているんだぞ。で、まあ……」

朝比奈、少々言いよどむ。

「学校の作り自体が被いに都合のいい形になっているとか色々ある

んだが、要は、将来的に退魔に優れた人材を育成する場にしたいと、
そういう目論見があつただけだな」

「……………」

「……コメントに苦しむ心境なのは良くわかる。がな、まあ、あまり馬鹿にしたものでもないんだぞ。近い将来、魔の刻が訪れれば、おのずとそういうものに対抗できる人間ってのは増えてくるのが自然の摂理つてもんで、それを教育する専門機関があれば、さらにそれは優秀な者になる」

朝比奈の言いたいことはわかる。

だが巡にとつてはどうしても現実味がないというか、想像の世界に行きがちな子供を現実に引き戻す役割を担っているはずの大人が、率先してそんなことをやっているなんて信じがたい、という感情の方が先に立ってしまうのが正直なところだ。

もつとも、今となりにかばがいる時点で、それは想像の世界ではないのはわかってるのだが。

「だから今は、あくまで準備段階で、藤乃木学園は普通の学校として機能しているんだけだな」

まあそのうちわかるよ、と、朝比奈は言う。

「いずれ、10年20年と経てば、時代の変化にお前も気付く」
魔の刻という、現実には。

「で、話を戻すけどな。そうやって創立した学校なんぞな。その中の教員や学生には、研究機関の人間が紛れ込んでるんだよ」

「学生も？」

巡の意外そうな言葉に、朝比奈はうんと頷く。

「高校だけだけどな。そもそもその機関つてのが、古くから横の繋がりのある連中だけが関わっている由緒正しき内輪受け軍団なんぞな。せいぜい高校生くらいにはなっていないと、内情が露呈しかねないんで、そもそも機関にほとんど子供はいない」

本当に、現実にあるとは思えない話だ。

朝比奈も実のところ、ふと気付いたらそのメンバーの中に名前を連ねていた、という経歴がある。

朝比奈家というのも、古くからそういったことに深く関わりのある家系で、神道に身を置く親類も多くいる。その中には機関に関わっている人間も少なからずいて、朝比奈自身、知らずの内にその力ゆえにメンバー候補に上がっていて。

高校在学中にそれを知った朝比奈は、それ以来、頑なにそれを拒んでいたのだが。

「本人の意志もお構い無しにそんなことを言われてもなあ……」
それで、内情を少々知っているのに仲間にならないからといって裏切り者扱いされても、正直困る。というか理不尽この上ない。

こんなはずではなかった。

機関の創始者の中では、朝比奈は藤乃木家とだけ面識がある。他のメンバーは日本や世界のあちこちに散らばっていて、名前さえも良く知らない。けれど、藤乃木に関して言えば、そんな風に人を拘束するような人間ではなかったはずだ。

裏切り者の烙印を避けられない——なんて。

そんな風に言われなければならない理由が思いつかない。

誰も最初から、そんな機関を作ってくれとも入れてくれとも頼んでいない。

多分、そんなことを言っているのは一部の過激派の人間だけなのだと思うが。一度しつかりと、藤乃木に確認を取った方がいいのかもしれない。

「先生が藤乃木小の教師なのは、その機関の関係？」

機関の人間ではないと、朝比奈は言うが。無関係であるとは、巡には思えない。

「確かに、普通の教師とはルートは違うな。まあ教職は取ってたし、知らない仲でもないし、機関云々とは関係無しに、これからの時代、ゲートであるこの場所で勤務することで、多少は子供たちを護るこ

とが出来るんじゃないかと藤乃木に打診はされたんだよな」

機関とは関係無しに。そういうはずだったのだが。

「ふうん……」

無表情に納得する巡に、朝比奈は多少の居心地悪さを感じる。後
ろめたさというか。今この子に、自分はこういう感想を持たれてい
るのか。

「正直な話、別にオレは機関に悪い感情は持っていない。けどな、
いちいち乱暴な行動を取る連中には、感心できないんだよ」

そんな人間ではないと思っていた氷村でさえ。

かばに対する負の感情は、まるで隠していなかった。

物の怪であるが故に、人間と共にいていい存在ではないと、全身
で語っていた。

どうしてあんな風に攻撃的になってしまったのか。

当のかばはといえば、朝比奈と巡のやり取りを横で聞きながら、
呑気な顔でソフトクリームを征服している。巡に負けなくらい、
感情の読み取れない少女だ。

さて、どうしたものかな。

朝比奈は、隣に座る巡にも聞こえないような微かな声で呟いた。

もう大丈夫だからと、巡は家に帰された。

けれど不安は消えない。

もう家に帰った方がいいと朝比奈は言っていたが、大丈夫ってどう大丈夫なのかと問い質したいくらいだ。正直、家の中なら安心だなどと今の巡には到底思えなかった。相手は既に巡の家も知っていて、いつどんな手を使って乗り込んでくるかもわからないのだ。だからといって、他に逃げ場がある訳でもないのだが。

どういつつもりで、かぼと一緒にいるのかと訊かれた。

どういつつもりって、要は成り行きで。

でも今は家にかぼやシンがいるのが当たり前になっていて、いなくなればいいとか、そういう風には思わない。

それを知って、相手はどうしようというのだろうか。

そこに魔の刻の者がいる限り、また彼が現れるのは必至だ。本人もそう言っていた。

それで、どうする？

朝比奈の言うことをそのまま受け止めるとするなら、氷村はかぼを、どうにかしようとしているのではないか。例えば、物の怪であるかぼを、消してしまう——とか。

彼にそんなことが出来るのかはわからない。

けれど、そうする気満々なような、そんな気配だった。

それをするためなら手段も選ばないような、そんな気さえする。

そんな容赦のない印象が、あの氷村にはあった。

「どうすればいい？」

考えの煮詰まった巡は、かぼに向かって訊いた。

「どうもこうもないわな。なるようになるし、なるようにしかならん」

かばの返答は明快だが曖昧だ。

「過去にそういう輩がまったくいなかったわけでもないしの。わちらは慣れっこだ。それをかいくぐってきたから今わちはここにいるけど、負ければそういうわけにはいかんの」

相変わらずの、不真面目そうなニヤケ顔。多分、かば自身は大真面目に答えているのだろうが。

けれど巡は落ち着かない。当然だ。

自分が誰かに狙われるなど、これまでに経験したこともなくて。それが、どう出てくるかもわからない。

正直、怖い。

「まあ、少なくともあ奴そのものは、ぬしにはそれほど危険はないだろ。この界限にいる限りはな」

呑気そうに、かばは言う。

「なんで」

「奴の身元は、割れてるだろう。経歴に何がしかの虚偽がある可能性もなくはないが、それにしたってこの近辺の学校で教鞭を取っている身だ。警察沙汰になるような無茶はしないだろうよ」

かばの言葉は少々難しかったが、それでも、それもそうか、と巡は思う。が。警察沙汰。あまり体験したくはないが、実際はどうだろう。

「もつとも、あの男以外の誰かが出てくればわからんがの。そもそもその何とか機関というのは、わちも良く知らん」

「……」

嫌なことを言ってくれる。

こんな状況で、頼るものが何もないというのは苦しい。何かが起こった時に、身体を張って大丈夫だと安心させてくれる存在がないというのは。

普通に生活している限りは、巡はまだ年長者の保護下にいるのが

当然な年頃なのだ。

「……メグ。これは母上にも相談した方がいいかもしれん」
「えっ？」

自分の思考を読むかのような台詞に、巡は驚いてかぼを見る。

「メグ自身の危険の可能性もそうだがの。やはり、ぬしひとりで対抗しようとするのは良くない」

それに、遅かれ早かれ、この世界は別のものへと変貌していく。
できることなら、それを知っている人間から少しずつ、そういう世界への免疫を作っていった方がいいと、かぼは考える。

もうメグは知っているのだから。

メグから家族へ。そして地域へ。急ぐことはないし、ただ単純にそんなことをふれ回っても、どうかしてしまったと思われるのがオチだ。だから、まずは一番近いところから。幸いメグの家族はかぼたち物の怪に一応の理解がある。それに関係するところで巡が狙われていると知れば、彼女たちなりに守ってくれるだろうし、自衛もしてくれるだろう。

その時、かぼやシンがどう思われるかは定かではないが。

カリカリ。

ドアの向こうで、微かな音がした。

カリカリカリカリ。

巡はすぐに察する。これは、猫のシンが扉に爪を立てている音だ。入ってくれとせがんでいるのだろう。

かぼが立ち上がって、ドアを僅かに開けてやると、「やーん」と甘えるような声で飛び込んできたシンが、巡に飛びついてきた。
「シン。どうした？」

ぐいぐいと押し付ける勢いで、巡の肩にやたらと擦り寄るシン。
普段から人懐こいが、こういう彼は珍しい。

「……」

かぼが、そんなシンの様子に目を細めた。

「そう来るか。相談する間も与えてくれんらしい」
かぼは、小さな声で呟いた。

シンが巡になすりついてきた理由は、一瞬後に明らかになった。

「……なんだ、これ!？」

シンを抱きかかえたまま思わず叫んだ巡の視線の先。部屋の壁から、真つ黒な影のようなものが、染み出してきた。

液体にも固体にも見えない、黒い何か。それがゾロゾロと染み出してきて、何かの形を成そうとしている。壁の向こうには、シンが寝ていたはずのかぼの部屋がある。この影の気配に気付いて、脅えたシンは巡の部屋に飛び込んだのだらう。

「魔物だな」

「魔物!？」

落ち着き払ったように見えるが、かぼの声のトーンが低い。

「力は……さほど強くはないの。シン、変化しろ」

かぼの命を受けて、巡にしがみついていたシンが、急速に人の形へと変化した。

「うわ……」

支えきれずに、巡は大きくなり始めたシンを抱えたまま尻餅をついてしまう。

ドタンと大きな音を立ててひっくり返った巡の上に乗ったまま、人間の姿となったシンは目を見張って影の方へと振り返った。

「何なんだこりゃ!　なんで魔物が!？」

「シン……痛い……ッ」

「あ、悪い」

巡の声を受けて慌ててその場から立ち上がったシンに向けて、かぼが鋭い視線をそれでもやんわりと向ける。

「シン、ぬし、魔を浄化する力は持っているかの」

「いやー……」

かぼの言葉には、シンは申しわけなさそうに首を振る。

「オレ純粹に猫なもんでさー。逃げる以外の防衛手段持っていないだわ」

「だろうな……」

魔物に、物理的な攻撃は通用しない。

かぼたち物の怪が、滅多なことでは消滅しないのと一緒に。その上、魔物と呼ばれる連中は、かぼたちのように、依存する何かを持たないため、魔物を消滅させようとするなら『浄化』するしかないのだが。

「わちの浄化能力だけで、何とかできそうかの……」

かぼはぼやく。

「な、何なんだよ、かぼ！ これは！」

「魔物だ魔物！ 話はあとー！」

巡の叫びを一蹴するかぼ。確かに、今は呑気にこの影の説明をしている場合ではない。

「塩が聖水でもあればな……」

うずうずと形を成す黒い影は、四肢をうごめかす獣のように見えなくもなかった。二本の足で立とうとしているから人間のようにだとも言えるのだが、不自然に揺らめくそのシルエットは、とても人間とは思えない。

「塩ならあるわよ」

のんびりとした声音と共に、部屋のドアが勢い良く開いた。

姉、芽衣がそこに立っている。

「滅せよ、悪魔あー！」

拍子抜けしそうに力が入っていない台詞と共に、あまりにも不釣り合いな素早さで、黒い影に向かってひと掴みの塩が投げつけられる。

行動だけは電光石火だ。

「~~~~~!」

声にならない声というか、奇妙な音を立てながら、黒い魔物はグググ、と身体をふたつに折り曲げた。どうやら苦しんでいるらしい。「メグに変なことする奴は、私がやつつけちゃうからねえ」

両手でガッツポーズの芽衣。その拍子に、左腕で抱えていた塩の入った紙袋の中身が、全て床に零れ落ちた。というかぶちまけられた。その量ほぼ1kg。

「芽衣……」

しかし、その光景に頭を抱えたのは巡ひとりだ。

「よし」

芽衣の塩投げを受けて、かばは魔物に向かって両手を思い切り広げた。

バシんと、その両手で、自分の身長の数倍ほどもある魔物を左右から押さえつけるかば。そこからベコリとへこみ始めた魔物を、今度は上から押さえつけて、さらにへこませる。それはまるで、綿菓子を手で押しつぶしているかのような光景だ。

何度も何度も繰り返し返して小さくなった黒いものを、最終的に、両手でギュウ、と押しつぶした。

再び開いた手の中には、もう何も残っていない。

手品のようだ。

「……………」

あまりにもシニールな光景を、眉間にしわを寄せて見つめていた巡。

「浄化完了、だの」

浄化。あれが。

巡の知識上の、いわゆるフィクション上の『浄化』とは、大分違う。

「助かったぞ芽衣。いいタイミングだったの」

かばの言葉に、芽衣はぶちまけた塩を蹴散らしながら、巡の方へと駆け寄り、その肩を両腕で抱きしめた。

「だって、メグの部屋に来ようと思ったら、かばちゃんの部屋から変なものがはみ出てたんだもん。蠢く黒い影っていったら幽霊じゃないじゃない？ だったらお塩で撃退できるだろうって思って、慌てて台所から持ってきたんだよ」

黒い影イコール幽霊。芽衣らしい判断である。しかしさっきは悪魔とか何とか言っていたような気もするが。細かいことは気にしないのだろう。

それにしても姉、素晴らしい瞬発力だ。

動く影↓幽霊↓塩という三段活用も瞬時に行っている。しかも今回は、その個性的な判断がドンピシャだったのだから、運がいいというか、もともと彼女の実力なのか。

「ていうか、なんなんだよ、これは……」

巡がこんな風に、はっきりと魔物を見たのはこれが初めてだ。かばたち物の怪とは違う、意志の薄い魔物。巡にとっては幽霊と大差ないそれ。

そう、幽霊なんてものだって、これまでに一度だってお目にかかったことなどないのだ。

「純粹な魔物だ」

「純粹な魔物？」

さっきもそんなようなことを言っていたかばだが。巡には今いち、現状そのものが理解できない。急に黒い影が現れて。その影が塩のひと掴みで苦しみ。かばが、それを握りつぶした。一体この部屋で、今何が起こったのか。

「こんなものが今普通に出てくるわけはないんだがの」

「……？」

かばの言葉にうんうんと頷くシンと、まったく意味のわかっていない巡。そしてそれを抱きしめる芽衣。

「まあ、奴らの仕業だろうが……」
腕を組んでため息をついたかばの次の言葉を、一同は一斉に視線を向けて待つのだった。

かばの表情は渋い。

一同の視線が集中する中、かばはどすんと床に尻をついてあくらをかいた。

「この逢魔が時に、あんな魔物がほいほいと出てくるわけがない」
まだ、そういう時期ではない。

かばたちのような、抛り所のある物の怪、つまり、生の刻に近しいものから次々と動き始めるが、魔の刻の空気そのものから生まれるような、純粋な魔物は、今のこの時代にそうそう生まれるものではないはず。

かばの言葉に、シンだけがうんうんと頷いた。

さっき対峙したような魔物は、魔の刻に生まれ、生の刻には消滅する。生の刻の空気では存在し続けるのは難しいからだ。時代をまたぐことは、まったくと言っていいほどに無い。そこがかばたち物の怪との大きな差だ。

だからまだ、生まれてくるには早いはずで。

「じゃあなんで、あんなのがうちの中にいたんだよ」

巡の疑問に、かばは唸る。

「降魔^{カバ}、しか考えられん」

「降魔？」

「奴らならやるかもしれん。氷村か、研究機関の過激派とかいうお仲間か」

機関と聞いて、巡は氷村との会話を思い出す。だが、降魔とは何だ。

「魔の刻になれば、人間の持つ力の中でも、魔に関する部分が強くなる。そういった力に長けている人種は、己の力で魔の力を魔物として形作り、生み出すことが出来る。それを、降魔という。多分奴らの中に、その力を持つている者がおるのだろ」

力のある者といつても、その力の大きさは、時代が大きく左右する。生の刻と魔の刻では、力の大きさには歴然とした差が生まれる。生の刻の住人の「生きる力」は魔の刻には弱くなるが、生の刻の住人が持つ、逢魔の力を含む魔に属する力だけは、魔の刻の方が格段に上がるのだ。だから、先程相手にした魔物は今は大した強さを持つておらず、苦労せずに倒すことが出来た。もちろん手加減している可能性もあるが。

「あの人かその仲間が、あれを作り出したっていうのか？ それで僕の家を襲わせて……なんて、なんでそんな必要が……って」

あれ、と巡は思う。

彼らはどうも、物の怪と一緒にいる巡か、もしくは巡と一緒にいるかばが気に入らないらしいが、その巡を脅す目的があったにしろ、いくらなんでも早急すぎるというか、それよりむしろ。

「魔物を良しとしない人間が、なんで魔物なんて作り出すんだよ……」

目的と手段が相反しているというか。

「ん、まあ、の」

今日のかばは、うなりがちだ。

「例えば魔の刻に、人間が己の生み出した魔物を使い魔とし、襲い掛かってくる魔物に対抗したという事例はあるな。逆に、魔物を使って悪さをしようとする人間も、当然いつの世にもいる訳だが。しかしの……」

この世界に魔物はいらない、人間が一番だと考えているような連中が、わざわざ自分で魔物を作ってまで、物の怪に向かわせるとはそれほどまでに、物の怪が憎いか。

魔物には魔物。

純粹な魔物でないかぼのような物の怪に、浄化の力はまず効かない。魔の力には魔の力で対抗するのが一番いいと、知っているのだろうか。

しかしその危険性は、理解しているのだろうか？

もともと、生の刻に属する者の力自体が弱まるのが魔の刻なのだ。魔の空気に当てられて、魔の力を使役できる人間は増えてくるが、それでも人間は魔の刻において圧倒的に不利。当然だ。生の刻の住人は、生の刻に繁栄する者なのだから。

魔物を使役できる人間にしたって、力の強い者はそう多くないし、その少数の人間がどんなに頑張ったところで、せいぜい自分の身近の安全を少々確保するくらいのもので。自分の作り出した魔物を制御しきれなくて、破滅を迎える者だっている。諸刃の剣だ。

そうとわかっていても、抗わずにはられないのが人間なのかもしれないが。

同じ人間である、巡の安全を脅かそうというのはいただけない。

まさか、魔物と共にいる人間は、一緒に消し去ってしまえばいいとも思っているのか。魔物を肯定する、人間の敵として？ 降魔を使ってくるなど、そうとしか思えない危険行為だ。

だからこそ過激派と呼ばれているのだろうか。

かぼたちを敵としているのは、機関そのものではなくその一部の過激派だ。

「話してる意味がよくわからないんだけど」

それまで黙っていた芽衣が、口を開いた。

そういえば芽衣には、ちゃんとした形でかぼや逢魔が時の話をしたことはなかった。かぼが人間ではないということだけはナチュラルに受け入れてしまっていたようだが、なぜかぼが現れたのかとか、そういうことはまったく知らない。

「とにかく、これって安心して眠れないってことなんじゃないのかなあ？」

「……」

言われてみればそうだ。

こんな風に、いつどこで魔物に襲われるかわからない状況では、夜眠ることも難しい。

「まあ、問題なかる」

かばは、サラリと言う。

「芽衣がさつき塩を投げたら効いただろう？ 魔物は人間の作る結界や浄化の守りには弱いものだ。あの、お札を貼ったり塩を盛ったりする行為だな。あれで案外防げるものだ」

魔の刻の全盛期には、人間もそうやって身を守ってきた。もともと、自然な状態であるなら、人の作った建物自体、ある程度結界の役目を果たすものなのだ。その代わり、魔物が活性化する夜に外をうろつく人間はほとんどいなかったが。

不夜城のようなこの時代ではどうなることやら、と思わなくもないが、人間の作る喧騒も、魔物の弱点となり得る場合があるから、その辺の良し悪しは相殺といったところか。

「まあ、今回のようにわざわざ家の中に向けて魔物を放たれた場合、防ぎようがないがの。そうとわかっていれば、かばがいるから一応は安心だぞ」

人間の作る『建物』という領域の中では、魔の力は弱まる。が、それに加えて。

「わちは物の怪だから。実は不眠不休で大丈夫なんだ。メグたちが寝ている間、家の中を見張っていることくらいは出来るぞ。おかしな気配があれば、すぐに叩き起こしてやれるしの」

かばは雨には弱い、家の中に雨は降らない。それに雨自体は、苦手というだけで、かばの存在自体を危うくする弱点ではない。さつきは一瞬虚を突かれたが、そうと覚悟していれば、あんな不覚は取らないで、もっと早くに気配を察知できる。

「そっか……」

とりあえず、巡と芽衣は納得するが。

本当は、わかっている。

どんな目的があるのかは知らないが、こんなことが繰り返されるのだとしたら、多分いずれはこちらの神経が参ってしまう。

どうにか、対策が必要なのだと、この場にいる全員が考えていた。

一度魔物に襲われてからは、その日一日は何事もなく、翌日を迎えた。

それで巡がぐっすりと安眠できた訳ではないが、少なくとも、かばがいるだけで一応の睡眠はとることができる。今が夏休みで良かったのかもしれない。授業中に舟をこぐという事態だけは避けられる。

それにしても、よくわからない。

魔物を放つことで、こちらを倒すなり脅すなりの何がしかの目的があるのなら、一息にやってしまえばいいのに、と巡は思う。もちろん、それを実際にやられて困るのはこちらなのだが、出会って別れた途端に魔物を放ってきたくせに、やることが中途半端というのか。それとも、そうできない事情でもあるのか。

「事情、か。ないでもないかもしれないが」
かば、もってまわった言い方をする。

「降魔などという行為を、ホイホイとやって消耗しない人間などいないからの。そう一度には魔物は作れまい」

まだ魔の刻の空気も薄いから尚更だ。

しかし、その温存期間の長さがわからない。一日なのか、一週間なのか。

それも、あの魔物が力の限界だったとしての話だ。実は全然力など余っていて、様子を見ている可能性だってある。かなり低い可能性だが。

それ以外に、この中途半端な攻撃に理由があったとしても、まる

で思いつかない。

巡は唸る。

あまり現実的ではないが、思いついたこともあって。

「あの氷村って人、話できないかな……？」

「……」

話し合いでどうにかなる人種なのかどうかはかなり謎だが。

正直なところ、あの氷村という男が巡とかぼをどうしたいのか、はつきりとした目的がまだわからない。あまり友好的な雰囲気できなかったのは確かだが、一体彼は、巡たちをどうしたかったのか。氷村が魔物を放ったという証拠もない。

どうしたいのか、なんて、それを聞いて、巡の望むような事態になるかどうかわからないし、むしろそうでない可能性が高いわけだが。相手の思惑がわからないうちは、具体的に動くのも難しい。

そしてこのまま一生、逃げ隠れしながら生きて行けるわけもない。

どういうつもりでかぼと一緒にいるのかと、氷村はそんなようなことを巡に質した。

ということとは、かぼさえ巡から離れば、巡をつけ狙うことをやめるというのか。

それで全てが丸く収まるなら、かぼは躊躇なく巡から離れるだろう。けれど、この逢魔が時から魔の刻において、生の刻の住人と魔の刻の住人、攻撃的でない者同士であるなら、共に暮らすに越したことはないのだ。共存を選ぶことで、生の刻の住人は、魔の刻でも少しは過ごしやすくなるというのに。

もっとも、純粹な魔物ではないかぼたちのような物の怪も、全てが友好的というわけでもないのし、その見極めは正直難しい。それは生の刻の住人、いわゆる人間などにも言えることであるから、何も物の怪に限った話ではないのだが。

「まあ、あの時ヤツは、担任の妨害を受けて撤退したからの。そのうち頼まんでも姿を現してくると思うが」

すぐにまた接触することになるだろう。

その前に、理解者をひとりでも多く確保した方がいいかもしれない。

他人を巻き込むのは本意ではないが、黙っていても危険にさらされそうな人間には、逆に事態を把握してもらっておいた方がいいだろう。

すなわち、母や姉には。

昨日の魔物を芽衣だけは目撃しているが、結局のところ、逢魔が時のことについて詳しい話はまったくしていないのだ。

理解しておいてもらった方が、何かの時に素早く対応できる。

「あとは、天笠の爺にも言っておいた方がいいな」

「……なんで？」

思いも寄らぬ名前が出て、巡は面食らう。

「爺さまにはミズがいたからの。物の怪と接触のある人物として、チェックが入っている可能性がある」

ミズは、かぼたちのような物の怪とは少し違う。こういった付喪神的な物の怪は、ほとんど間違いなく人間に害を及ぼしたりしないのにどうして、そのミズと接触があるからといって荘二郎が狙わなければならないのか、巡には即座に理解が及ばない。

「あくまで仮定だから、本当に奴らが爺を監視しているかどうかはわからないが」

わからないが。しかし、おそらくは。

いくらそれが付喪神のような存在でも、一度そういったものに接触した人間は、基本的に魔の存在を察知しやすくなる。荘二郎にその傾向は現れていないように思えるが、実際はいつまた魔を見つけてしまうかわからない。連中もそれを知っているだろうから、荘二郎を監視していても、何ら不思議はない。それどころか、すでに釘を指す方向で動いている可能性だってある。

巡だって、気付けば彼らの監視下にいた。

彼らの視界は、どこまで広がっているのだろう。想像だにできない。

最初にどう行動すべきか。
巡は迷った。

家族に話すか、荘二郎に確認を取るか。連中との接触を試みる方向で行くか、その前に朝比奈に相談すべきか。

選択肢の多さに、巡はしばし、頭を抱えて悩むことになった。

迷っていても仕方がないので、とりあえず巡は天笠和菓子店に連絡をつけることにした。

家族は今留守にしているし、電話なら家から出ずにすぐに行動に移せるからだ。莊二郎に直接会いに行くのは避けた方がいいような気がした。

一階の電話のそばに置いてある、母の手書きの電話番号簿を探し出して、子機を持って部屋へと戻る。せっかくの子機が親機のすぐ隣にあるのは若干不便なこともあるが、普段は気にならないから、まあいい。

これまでにあったことを手早く話すと、電話の向こうの莊二郎は何事かを考えるように一瞬黙った。

『その連中のひとりが、うちにも来たかもしれんな』

「えっ？」

巡は驚いたが、やっぱり、という思いもある。

『スーツ姿の見慣れない男がひとり、菓子を買いに来た。しきりに店の中を見回していたし、シュークリームをひとつだけ買って行ったから不思議に思っていたが』

天笠和菓子店、シュークリームしか売れていないのではないか。いやそんなはずはないか。というか、今はそんな話をしている場合ではない。

「もしも、これからその男に何かを聞かれても、知らぬ存ぜぬを通した方がいいような気がする」

巡のそんな言葉に、莊二郎は再び考えるように無言になる。

『…… もっとも、私は何を言おうにも、ミズ以来物の怪に出遭って

いる訳ではないしな。何も話すようなこともないが……」

だが、と、彼は付け加えた。

『私は年寄りだが、一応は大人だからな。私の心配などせんでいいから、何か困ったことや不安なことがあったら相談に来なさい。力になれることもあるだろう。大概いつでもここにいるしな』

「……うん」

莊二郎の身を案じての行動だったが、かえって気を使わせることになってしまった。けれど、正直莊二郎のその言葉は巡にとって心強かった。夏休み中、巡はひとりになることも多いし、やはり不安はつきまとう。

けれどもやはり、無闇に甘える訳にはいかないだろうな、という思いはあるが。

かばが、電話を貸せとせがむ。

巡は、隣に座るかばに受話器を渡した。

「爺さま、かばだ。こないだの餡子の菓子ほうまかったぞ。……それでな、爺さまも一度はミズという物の怪と接触してる訳だろ？だから安全のためなんだがの、もしもこれから先、別の物の怪を発見したとしても、知らないフリをしてくれんかの」

莊二郎にはおそらく、逢魔の力はない。少なくとも、今のところは。

巡のように、もともと逢魔の力を持っている人間は、一度物の怪と出遭うことで、他の物の怪も発見しやすくなってしまうことが多いが、莊二郎はそうではない。ミズとは縁が深かったから姿を見るまでに至ったが、他の物の怪はそうはいかない。

が、絶対に物の怪と遭うことはないと言言できる訳ではない。

一年二年と時が過ぎて行くことに強くなる魔の力で、物の怪の出現率も高くなれば、後天的に力に目覚める者も出てくる。物の怪という存在を知っている莊二郎が、他の人間よりもそういうことに敏感になるのは当然だし。

ならば、もしも物の怪と出遭ってしまったら、見てみぬフリをした方が都合が良い。

物の怪と暮らしているというだけで魔物を放たれた巡のことを考えると、物の怪との関係は持たない方がいい。もしも物の怪をその目で確認したとして、知らん振りをしていれば、物の怪の方から無理やり接触を持ってこようとはしない。かぼのような例外もいるが、彼女にしたって、巡とはつきり接触をしてしまったから付きまとってきたのであって。もしも巡が上手く立ち回って知らぬ振りをしていたなら、そうはならなかっただろう。

とにかく、莊二郎は今は物の怪とは接触をしない方がいい。お互いのためにも。

もしもそうなってしまったら、莊二郎もその物の怪も、連中に狙われることになってしまいかもしれない。

莊二郎がどう考えているかはわからないが、とりあえずは納得したような返事をしてきた。巡たちに心配をさせないようにとの配慮かもしれない。

とにかくこれで、身近な物の怪仲間（？）への連絡はできた訳だ。

ピンポーン。

子機の通話を切った瞬間、来客を告げる電子音が鳴り響いて、巡はビクンと肩を震わせた。

「……誰だ？」

インターフォンで受け答えは出来るが、それをやることで家に人がいることを知らせて大丈夫な相手かどうか。しかし、居留守を使うのも躊躇われる。

「待っている」

かぼが、するりと部屋の窓を開けて、音も立てずにそこから外へと滑り出した。

「ちょっと、かぼ……」

客人の確認をしに行ったのだろう。が、普通の人間ならそんなかぼの気配に気付くことはないだろうが、もしも連中のうちの誰かだとしたら、決して安全ではない。そんなことは承知の上なのだろうが、ハラハラせずにはいられない巡だ。

「メグ。来客だ」

カラカラ、どさ。

「……！！ か、かぼ！！」

持ち前の身軽さで、かぼは再び巡の部屋の窓まで飛び上がり、軽快に窓を開けて戻ってきた。

——その片手に、自分の三倍以上身長のある男の腰のベルトを引っ掴んで。

急に掴まれて二階の高さまでひとつ飛びで連れてこられた揚句に、窓付近で放り出されて、その窓枠にしがみついているのは、朝比奈だ。

「せ、先生！？」

それでも朝比奈は、引きつった笑顔を巡に向けながら律儀に挨拶してきた。

「よお。ここんちの出迎えは変わってるな……たまげた」

足場がまったくないわけではないが、二階の窓にぶら下がっている朝比奈は、それでも這い上がるべきかどうか迷っている。

「このまま、あがってもいいものかな……？」

「……」

「担任だったから、ここまで連れてきた。手間がなくてよかる」
いけしゃあしゃあ。

もっと普通の出迎え方が出来たはずだろうと、今かぼを諭しても

遅いだろう。

巡は頭を抱えつつ、担任教師を二階の窓から迎え入れるという珍妙な経験を果たしたのだった。

床に下り立つ前に靴を脱ぐのに難儀していた朝比奈だが、何とか生徒の部屋に土足で踏み込まずに済んだようだ。

何しろ、二階の窓からの訪問は、朝比奈にとって初めての経験だ。

「昨日は災難だったな〜」

こともなげに言う朝比奈。

「お気楽に言うな。ぬしが大丈夫だと言うから家でのおんびりしていたというに、即座に襲われるとは思っていなかったぞ」

のおんびりしていたと言うべきかどうかはわからないが。

しかし、魔物に襲われたのを朝比奈は知っているような口ぶりだ。「そう言うなよ。結構弱かったろう？ この家の周りにはオレがまじないをかけといたし、使いも出しておいたからさ。君らで手こずるようならフォローを入れられるようにはしておいたんだぜ、これでも」

「……使い？」

巡が首を傾げるのに、朝比奈は頷く。

「オレが四六時中見張ってる訳にもいかないからさ。ちょっとした魔物を作って連絡役にこの家の周りに放しておいたんだよ。そういったいつでも情報がオレに伝わるし、多少の戦力にもなる」

お気楽な様子で説明する朝比奈だが、巡には彼の言葉が今いち噛み砕けない。具体的にそれがどういうことなのか、さっぱりわからなかった。

かばが、朝比奈を見る。

「担任。ぬしも降魔の力が使えるのだな？」

「まあね」

朝比奈は、降魔の力を使っていわゆる魔物を生み出し、巡の家の周りに放しておいたのだ。それはつまり、巡を襲った魔物と同様の作り方をされた魔物だが、だからといって人間を襲ったりしない、朝比奈の役に立つ使い魔だ。

要は、降魔で生まれる魔物も、使い手次第、というところか。

「全然知らなかった……」

巡だけが、呆然としている。

つい最近までただのクラス担任だった男が、実は魔物も作れるオカルトマニアだなんて、まったく気付かなかった。というか、気付かなくて当然だ。いや、別に朝比奈はオカルトマニアという訳ではないが。魔物のことなら何でも知っていそうな朝比奈は、巡にはそう見えてしまう。

もっとも、朝比奈が降魔の力を持っているのも当然というか、その程度の力がなければ、そもそも機関からお呼びがかかる訳がない。「しかもぬし、属性的には浄化か」

「大当たり」

朝比奈は、降魔という魔物を作り出す力を持ちながら、もっとも得意とするのは、浄化や祓いの方面だった。作り出した魔物ですら、敵対する魔物を祓うために駆使される。そう、家の周辺にまじないをかける、すなわち結界を張るなど、誰にでもできることではない人にはそれぞれ、得手不得手がある。朝比奈は、場を浄化することで、そこを魔の入りにくい結界とするのだ。

だがそれも、今回は完璧ではなかったようだ。

魔の刻が深くなるにつれ、朝比奈の力も強くなるのかもしれないが、比例して、敵対する魔の力も強くなって行く。皮肉なものだ。

「そういうことは、ちゃんとやっておいてよ……」

巡はぼやく。

結界や使い魔のこともそうだが、人間が作り出した魔物に襲われる可能性があるなんて、そうなるまで誰も教えてくれなかった。予備知識があつたなら、少しは覚悟も出来ただろうに。

「悪かった悪かった。あんまり怖がらせても良くないと思って言わなかったんだけどなー。あ、だったらあれか。オレの使いも、目に見えるところに目に見える形でいたほうが安心できるか？」

もともと魔物は形を存続させるのが難しいから、形のある物に詰め込んであるけどな、などと、朝比奈が呑気に話している内に、窓の外から何かのそりと部屋に入り込んで来た。

窓枠を乗り越え、ぼたりと部屋に落下したそれは、よいしょとでも言うように二本の足で立ち上がり、とことこと歩いて巡の前を横切る。

「……………ッ！」

クルクル巻かれた金の髪が美しい、深紅のドレスに身を包んだ西洋人形だった。

その人形は、すたすたと歩いて壁際までたどり着くと、そこに積んであるコミック雑誌の上に這い上がり、トスンと腰掛けて、微動だにしなくなった。

終始、無表情。

魔物は感情を持たないし、その器は人形であるから表情がないのは当たり前だが、壁にもたれかかったその人形は、人工的な青い瞳だけが瞬きもせず、ただただ巡を見つめている。

「……………」

「あれがオレの使いだ。家の周りを張っていたんだがな。部屋の中に置いておいてもいいぞ」

巡は、その人形から視線を逸らしながら呟く。

「……………先生」

「ん？」

「怖いよ……………」

魔物に西洋人形という朝比奈のセンスも疑いたいところだが、それより何より、今まであんなものが家の周りを徘徊していたのかと思うと、うなだれてしまう巡だ。よく誰にも発見されなかったものだ。

それに、今は微動だにしないから、その動かない瞳が、朝から晩まで巡を見つめているということになる。瞬きもせずに。それは怖いというか、それに見つめられたままで、夜ひとりで眠れそうにない。

「やっぱり外でいいよ。むしろ外がいい。家の裏にでも待機させてよ」

「そうかあ？」

首を傾げる朝比奈は、西洋人形がオカルトアイテムとして名高いという事実を、失念しているようだ。巡の言葉の意味が良くわかっていない。

黙って成り行きを見守っていたかばは、朝比奈が少女趣味な西洋人形を所持しているという事実の方に、興味津々なようだったが。

「氷村さんと話がしたい？」

驚きの表情を作る朝比奈に、巡は頷いた。

巡の入れてきた麦茶をひとくち飲んで、朝比奈は巡に向き直る。

「なんでまた」

「だって、何もわからないから」

魔物を放ったのは、確実に氷村という訳ではない。が、おそらくは彼か、もしくはその仲間だろうとは思う。だから決して友好的な関係であるとは言えないのだが、それでも。

何故、巡とかぼが一緒にいるのを見咎めるのか、それを彼の口から直接は聞いていない。

わざわざ危険人物と話をするのも躊躇われるし、そもそも話というものが成り立つのかどうかすらわからないが、はっきりとした理由もわからないままに襲われるのも納得できるものではない。

「まあなあ……」

困ったように呟く朝比奈。

彼も、巡の言いたいことがわからないわけではない。が、氷村が魔狩人になっていたのだとすれば、かぼを擁護する巡の話など、聞く耳も持たないだろう。彼らは、魔物全てを人間の敵としているのだから。

「物騒な話をするけど、怒るなよ」

朝比奈は、唸りながら両腕を組む。

「たとえば彼らが、成瀬の傍にいるその子を消してしまったとしてよ
う」

その言葉にピクリと反応する巡。が、とりあえずは頷いた。怒る

なと釘を刺されたばかりだ。

「それでも、逢魔の力を持つお前さんの前には、また違う物の怪が現れる可能性だってあるよな」

それはそうだ。

現に、既に巡の周りには、かぼだけでなくミーシャやシンだっている。

「その魔物を、成瀬は拒まない。そしたらヤツらは、それも消しにかかるんだろうな。でもきつとまた、別の物の怪が、成瀬の前に現れる。それが魔の刻ってもんだ」

魔の刻において、逢魔の力を持つ人間の前には、魔物が集まってくるものだ。その人間の近くにいたる物の怪をいくら消し去ったところで、別のものが次々と現れる。つまりはキリがない。

「だとしたら、だ」

物の怪が姿を現すのは、そこに逢魔の力を持つ人間がいるからだ、ということになる。

実際は、目に見えていないだけでそこかしこにいる物の怪たちが、やはり、それを目で見ることでできる人間の前に、集まりやすい。

「その人間が、物の怪を擁護する立場をとっているとなれば……」
彼らにとつて、巡自身が、魔物を庇うジャマな存在となる。

「……じゃあ……僕はどうなるの？」

どうされるのか。

「わからない」

朝比奈は答える。

わからないから、怖い。逢魔の力を持つ者の中でも、巡のように物の怪と馴れ合っているような人間を、どうするつもりでいるのかわからないから、困るのだ。わかつているなら、それがどんなに危険を伴うものでも、対策が講じられるだけマシなように思う。わからないから、どう回避していいのかもわからない。

そういう場合のマニユアルのようなものも、あちらには存在して

いるのかもしれないが、朝比奈は蚊帳の外なわけで、実際のところはやはりわからない。

魔物を良しとしないのは人間を生かそうとするからのはずで、極端な話だが、もしも魔物と馴れ合う人間を片っ端から始末して行っただとしたら、それこそ本末転倒な気もしないでもない。が、そうしてでも魔物の存在を許せない理由のようなものが、無いとも限らないし、キリがないとわかっていてやっている可能性もなくてはならない。「成瀬をどうするつもりなのか分からないから、あの人と話すつてのは、危険な行為になると思うんだよなあ」

うっかりかどわかされる可能性だってなくはないし、その後どうされるかなんて、皆目見当もつかない。どこまで非人道的な行動をやらかしてくれるか。

そんなことをやってたってキリがないのだということを、納得してくれる様子もないのだから。

しかし、それでも。

はつきりとした理由が知りたいという巡の気持ちもわからなくはないし、それに。

どうせ、こちらから出向かなくても、すぐに会いに来てくれそうな気もする。

「お前さんが自分から動く必要はないような気がするな。多分、氷村さんはまた来るだろうと思うよ。例えこっちが会いたくなくてもな」

「……」

それもそうだろう。

氷村と話をしたいという思いはあったが、多分、それは近い未来に叶う希望だろう。考えなければならぬのは、どうやって会うかということよりも、いかに安全なシチュエーションで氷村と対峙するかということだ。

魔狩人という連中の規模が、どれだけのものなのかもわからない。
「藤乃木に聞いてみたんだけどなあ……過激派や氷村さんのことは放っておけの一点張りだし」

「……」

そんな無責任な。

「機関から派生した連中相手に、何でそんな日和見発言するかな、あの爺さんは」

機関の頂点といえる藤乃木の頭首の、考えていることがわからない。
い。

朝比奈は、腕を組んでため息をつくことしか出来なかった。

思えば。

当然かもしれない。

目の前に現れた氷村と対峙しながら、巡はそんな風に考える。

家の方が、かえって危ないのではないかと最初に言ったのは、巡自身だ。家という人工の結界があるにせよ、人の作り出す魔物というのが、どれほどの力を持っているのかわからない。だとすれば、他人の目のない自宅というのは、格好の的になってしまっているのではないかと。

一理ある。

それに、そうでなくたって、結局この先ずっと家の中に籠っている訳にもいかないのだし。

そうして、家の中で襲われた翌々日にはかぼと共に外に出た巡だったが、結局何の関わりもない他人に迷惑をかけてしまうのではないかと、ついつい人のいない方に向かってしまった。

そして、学校の裏の雑木林へ。

そりゃあ、氷村だって現れるというものだろう。

ミーシャに会えれば事情も説明したいと思っていたが、その前に彼に会ってしまった。

「久しぶりだな。少年」

かすかな笑みを浮かべる、その男。

「まだ何日も経ってないよ……」

巡のそんな言葉に、氷村は「それもそうか」と肩を揺らした。つ

くづく、雑木林という舞台が似合わない男だ。

「なんでまた、こういう人気のないところに来るのかな、キミは。誘っているのかい」

ある意味、そうなのかもしれないが。

もしも家に魔物を放ったのが氷村だとするなら、この男は他の人間の前でも何をしでかすかわからない。被害は最小限に、なんて自己犠牲の精神で行動している訳ではないが、街中に魔物が突如出現した場合の混乱を考えるのが恐ろしい。魔物が見える人間がいるかもしれない。そうでなければ、自分たちの挙動を見られて気が狂っているとも思われるかもしれない。

「おじさんは、なんで僕を狙うの」

距離をとったままじっと見つめてくる巡の視線をうけて、氷村は片手でガリガリと頭を掻く。

「おじさんじゃないってのに……傷つくな……」

「なんで僕を狙うの？」

答え以外の言葉は聞きたくない。

なんだかこの男に対して油断をしていると、都合よく煙に巻かれてしまうような気がした。

氷村は、ちらりとかぼを見る。

そして、唇の端をあげて笑った。

「理由を話す義務はないな。そんなに時間もない。だから単刀直入に訊くが、そこにいる物の怪と決別する気は無いかな？」

「ないよ」

何故そんなことを訊かれるのか、それでどうするのかと質したい気持ちはあったが、巡はとりあえずはつきりと答えた。

多分、その答えによって氷村のこれからの行動がまったく変わることになるのだろうとは思っただけだ。

魔物を否とする氷村は、巡とかぼを引き剥がしたがっている。

質問から察するに、これは確実なのだろう。

「そうか。……なら」

氷村は、その場に片膝をつくと、左手をピタリと地面に当てた。

「魔物には魔物だ」

ズルズルと、その手許から黒い影が立ち上がり始めた。

人家や人気がないとはいえ、それでもここは隔絶された場所ではないというのに。

「なんで、物の怪と人を引き離そうとするんだ！」

巡は叫んだが、氷村は微動だにせず魔物を作り上げている。

「質問している場合ではないと思うな。この魔物は君のそばの、その物の怪を倒しに行くぞ。もちろん、邪魔をするならキミも巻き込まれるだろうな」

ズルリと、その影はうねり始める。カンガルーか恐竜かというようなシルエットのそれは、二本の足で走り始めた。

まっすぐ、かばに向かつて。

「メゲ、どいている」

無表情というか、お気楽そうな表情で、かばがそれだけを言う。

「かば！」

巡は叫ぶが、かばはひらひらと手を振る。

「魔物との戦いで、ぬしに出来ることなど何もなかる。わちはそう簡単に倒れたりはせんぞ」

巡には、逢魔の力はあるが、それを倒す力はない。少なくとも、今この時には。

せめて朝比奈のように、魔物に影響する力があつたなら。

「近寄ってくれるなよ。足手まといだ」

ニヤニヤと笑うかば。

ヒョイヒョイと魔物の攻撃をかわしながら飛び跳ねるその表情だけ見ていると、本当に、余裕そうには見えるけれど。

「魔物は、一体だけとは限らないんだよね」

氷村の数メートル後方からの声。

そこには、初めて氷村と会った時に一緒にいた女子高生がいた。

「そんな!？」

彼女の足許からも、小さな黒い影。

大きさこそ、さほどでもなかったが、子犬程度の大きさの魔物の影が、数体地面を這ってこちらに向かってくる。彼女も降魔の力を持っているらしかった。

いくら余裕そうに見えるかばでも、多勢に無勢で勝てないのではないか。

巡はその場でオロオロするしかない。

助けなきや。でも、あんなのとどうやって闘えばいいのか。

巡は、人間とだって身体を張った大喧嘩などやったことがない。けれど、かばはそれらをかわしながら、息を乱すことも無く呟く。

「こちらとて、ひとりではないわ」

その言葉に、巡ははっとなって目を見開く。

そこにはいつの間にか、攻撃態勢に入っているミーシャの姿があった。

戦闘体勢に入りつつも、ミーシャは腑に落ちない様子で、かぼの方を見た。

「一体何がどうなってやがるんだ？」

かぼの敵なら自分にとっても敵だろうというくらいの判断はしているのだろうが、騒ぎに気づいてこの場に現れただけのミーシャには、事情がまったく読めていない。

「物の怪を、ほ、許せないヤツが、はっ、魔物でな……と！」

「……はあ？」

襲い掛かってくる魔物をかわしながらのかぼの言葉は、聞き取りにくいというか、意味を汲み上げにくい。

「物の怪と人間の馴れ合いが気に入らないっていう人間が、降魔の力で魔物を操って、かぼを襲ってるんだよ！」

代わりに、巡が答えた。

「なんだあ、そりゃあ……」

「話は後でいいから、さっさと加勢しろ！」

いくらかぼが身軽でも、魔物の数が多くては、避け切れない。一度動きを止められたらピンチは間違いないだろう。

「……まあとにかく、こいつらは倒していいという訳だな」

ミーシャは納得したらしい。

「ずいぶん簡単に言ってくれるな」

ミーシャの出現に一瞬目を見開いた氷村だったが、それでもどこか余裕のある表情だ。まだまだ自分の方が有利であるとも確信しているのか。

巡は、どうしたらいいものかと考えあぐねる。しかし、どうやつても自分は足手まといにしかならないだろうと自覚しているから、

おいそれと手を出したりは出来ない。魔物の倒し方など知らない自分が加勢したところで、返り討ちにあってかばに余計な手間をかけさせるだけだろう。

でも、だけど。

ジリ、と。無意識に足を動かしたところで、視界の隅に物凄い勢いで駆け寄ってくる人影を捉えた。

「メグ……!!」

「芽衣!？」

それは、部活で家を留守にしていたはずの、姉だった。

普段のおっとりさ加減からは想像もできないような勢いで走ってくる芽衣。塩の入った特用袋を抱えて全力疾走する姿は頼もしいというか、変というか。

「なんでこんなところに」

「朝比奈先生から連絡受けたんだよ〜! メグが危ないって!」
そういえば、朝比奈は使い魔を巡の家に置いていったのだった。しかし、家からは普通に出かけてきたはず。ということは何か、あの西洋人形が、こっそりと巡たちの後をつけて来ていたということなのだろうか。いつの間に。

「メグ、私も加勢……」

巡の近くまで駆け寄ろうとしていた芽衣を、そこに佇んでいた女子高生が、やんわりと押さえつけた。

「……!!」

「ジャマはダメだよ。んーと、お姉さん?」

大した力も持っていないなさそうな女子高生なのに、芽衣を背後から押さえつける力は、振り解こうとしても、ビクともしない。

「大丈夫」

少女が、呟いた。

「えっ……？」

その呟きに、一瞬動きを止めてしまった芽衣。

「センセは優しいから、手さえ出さなければ、巡君には危害を加えないよ。絶対。だから安心してほしいんだけどな」

このまま巡も芽衣も動かなければ、彼らが魔物に襲われることは無いということらしい。もちろんかぼとミーシャだけは逃れられはしないだろうが。

「彼らは物の怪だもん。人間と一緒にいたって、お互い不都合が沢山生じるだけなんだよ。センセは、それを回避したいだけ。物の怪の存在によって、いつかあなたの弟さんが傷つくことになるのを、知っているから」

少女は、芽衣に優しく笑いかけた。

「沢山裏切られるし、沢山裏切らなければなくなる。人間と物の怪である限り」

少女は囁き続ける。

巡と芽衣だけは、助かる。

かぼとミーシャを放っておきさえすれば。

芽衣はブルブルと首を振った。

「そういう問題じゃないのよぉ！」

バシンと、少女の手を振り払う。

「巡に手を出したら、そりゃあ許さないよ！でもかぼちゃんだつてうちの大事な家族だし、ミーシャちゃんだつてお友達なんだから！同じことだよ！！」

裏切るとか傷つくとか、この女は何を言っているのか。

芽衣には理解できない。

「そんなの、人間同士だって同じじゃない！」

芽衣は、巡の方へと駆け出した。

「メグ、加勢するよ！ 朝比奈先生も来てくれるからあ！」

駆け寄る芽衣に、巡はハツとなって頷いた。

何の迷いも見せない芽衣の姿に、躊躇の気持ちが霧散した。足手まといを恐れていたら、何も出来ない。自分ひとりでは無理でも、芽衣がいるなら、二人で何か小さな助けにくらいなれるかもしれない。

少女は、そんな二人の様子にため息をついて、微笑んだ。

「……いい子だねえ」

クスクスクス。

小さな笑い声をもらして、トントンと片足のつま先で靴を鳴らす。そこからさらに、数体の魔物の影が生まれ、巡たちの許へと這い寄って行った。

かばを囲っていた数体の魔物のうちの一体に、景気良く塩が撒かれた。

「な……！」

一番驚いたのは、応戦していたかばだった。

ググと妙な音を立てて一瞬縮こまった魔物が、塩の飛んできた方向へと振り返る。一応動物と同じように、視界というものはあるらしい。

「何をやってる、メグ、芽衣……！」

塩をたたきつけた張本人である巡と芽衣に、かばは怒鳴りつける。一瞬手の止まったかばの正面の魔物を、ミーシャの爪が切り裂いた。

「止まってる暇はねえぞ、かば。数が増えてる」

「すまん。けどな」

塩を撒かれた魔物は一瞬ひるんだが、攻撃対象をかばから二人へと移した。ズルズルと、しかし歩くよりも速い速度で巡たちの方へと向かう。魔物は塩の浄化能力に弱いが、それを撒いたり盛ったりしても、それは忌避剤にしかない。塩のある場所で、魔物は留まったりはしないからだ。

「メグ、芽衣……！」

しかし巡と芽衣は、ぎりぎりでその魔物の背後にまわり、それを二人がかりで全身で抱きしめた。押さえつける角度的に、魔物は巡たちに牙を剥くことも爪を振るうこともできなかったが、一歩間違えれば大惨事だ。

「グ、グ、グ」

どこから出ているかも定かでない、唸るような音。

巡と芽衣が全身で締め付けている部分から、魔物がグズグズと崩れ始めた。

「!？」

魔物は砂のように崩れ落ちて、影のように地上を這いずった後で、消滅した。

「メゲ……!？」

魔物の一体を握りつぶしながら、かぼは二人に驚愕の視線を向ける。

「塩」

全身塩だらけなんだ、と巡は呟いた。

巡と芽衣は、小川で全身を湿らせた後に、塩をその身体に振るっていたのだ。

「半ば塩水みたいになっても効くんだねえ……」

妙な部分に感心している芽衣。

すべての魔物が塩や聖水だけで消滅するわけではない。が、この魔物はその程度だということだろう。賭けとしてはいささか危険すぎるが。

「僕たちだって力にはなれるから、こっちは気にしないでいいよ」

さらに、紙袋の中から塩を掴み出す巡に、新たな魔物と向き合うかぼはそれでも鋭い視線を向ける。

「危険なことに変わりはないだろうが！ 一歩間違えば死ぬぞ、メゲ！」

「それでも、何も出来なきや後悔する！」

これからだって、こんなことがないとは限らないのだ。今日、今だけの話ではない。逢魔が時において、魔物の増加に伴い、人間の悪意だって、絶対に生まれる。今の氷村たちに限ることなく。

それに対応できる力をつけなければならないと、巡は思う。少なくとも、自分たちは今、時代の移り変わりという事実をもう知って

いるのだから。

「美しい自己犠牲の精神かな？」

氷村は笑った。

「別にそれでも構わないが、命を粗末にするのはどうなのだろうな。逃げて永らえた方が得策という場合もあるんだよ、少年」

バカバカしい、と氷村は呟く。

「命を張ることの意味すらまだわかっていないだろうに。そうやって安易に命を投げ出した拳句に、君はいつか裏切られる」

安易なんかじゃない。

そう言いたかった巡だが、多分、死ぬということを実に理解していないという点では間違っているだろう。けれどそんなの、関係ない。だって、命を捨てるつもりなんかない。ただ、全力でぶつからなければならぬ時があつて、今がまさにその時だ、というだけだ。

「物の怪諸君にしたつてそうだ。君らは何度、人間に裏切られたかな。襲われ、追いやられ、生きていく場所を奪われて。それでも生の刻の住人を信じた拳句に消された者も多いだろう。所詮」

人間と魔物は、相容れることなど出来ないのだよ。

「それはそうだろうな」

かぼは呟く。

「頭の固い者は、人間にも魔物にもいるものだ。だがわちは、メグを裏切らん。裏切る理由がない。裏切らない理由があるとすれば、信頼されているから、それだけだ」

「そのために、自分が消えるのも構わないと？」

「消える気など、さらさらない」

危機的立場で命を捨てるのは簡単だ。

けれどそれでは、相手の信頼を受け止めていることにはならない。生きていたいし、生きていて欲しいから、今この場で彼らは誰かを信じるし、頼る。そして頼りにしろと身体を張る。それは、自己

犠牲なんかではない。

そうやって、浄化の手段を持たないはずの巡と芽衣だって、魔物をやっつけて見せた。

もしも自分たちが倒れたら、何の意味もないことを、彼らは知っていたのだ。

「フン……」

まだ足りないらしいな、と、氷村は呟いた。

「これで最後にしたいものだ」

ズズズ、と、これまでに無いほどの巨大な影が、氷村の足許から生まれる。

「まだ出るか……」

「ありゃあ、単体じゃちと難しいぜ」

かぼとミーシャが、揃って舌打ちする。

「氷村さん……!!」

氷村の後方に、朝比奈が現れた。全速力で駆けつけたらしく、肩が上下している。

「もうやめろ!!」

氷村の脇をすり抜けてかぼたちの方へと向かおうとする朝比奈の肩を、氷村が掴んだ。

「氷村さん!!」

朝比奈の肩を掴む、氷村の手の強さに朝比奈の動きは止められる。そんな彼の耳元で、氷村は唇の端を吊り上げて囁いた。

「なら、お前が死ぬ役を引き受けるか？」

「氷村さん、あんた……」

二人から距離を置くかぼたちの位置では、氷村が朝比奈に何を囁いているのかは聞き取れなかったが、氷村が本気でかぼたちを消そ

うとしている、それだけはよくわかった。

だからうつかりすれば、朝比奈も巡も芽衣も、死ぬ。

「担任！　ぬしはメグを護ってくれ！　魔物はわちが何とかする！
！」

かばは怒鳴ったが、朝比奈は氷村の手を振り払って駆け出した。

「悪いが聞けないな。君やその河童くんは、浄化が出来るんだろう？　なら、そのためにこの魔物を押さえるのは、オレの役目だ」

先程までの魔物の倍はあろうかという魔物に向かって、朝比奈は走る。彼にも浄化ができない訳ではないが、体力的に一番余裕があるのは彼だったし、あまり大きくない能力なら、魔物を閉じ込める結界の作成の方に使った方が良く判断したからだ。

ようやくこれまでの魔物を全て消し去った後のかばたちに、あまり余力がないのも事実だった。

しかしあつさりと、朝比奈は己が飛びついた魔物に組み敷かれた。

「担任！！」

「先生！！」

地面に仰向けに倒れつつ、朝比奈はそれでも笑ってみせる。

「手早くお願いするよ……」

「ぬし、ずいぶんと危なっかしく器用だな……」

朝比奈と魔物は、小さな結界の中にいる。魔物と組み合った瞬間に、彼は瞬時に己を中心として魔の力を抑える結界を展開したのだ。その瞬発力に関心する暇もなく、氷村と女子高生を除く全員が、魔物を縛る朝比奈の許へと一斉に駆け出した。

「先生!!」

全身塩まみれで駆け寄ってくる巡と芽衣に、朝比奈は渋い顔を見せた。

「お前らまで来るなよなあ……危ないぞ」

呑気に呟くが、魔物の爪が食い込んでいるその肩からは、血が滲みはじめている。

「一番危ないのは先生だろ!!」

巡の叫びは的を射ている。が、いまこの場面で、誰が一番とか言い合うのも、既に空しい。

巡と芽衣は、先程やったように、塩まみれの全身で魔物に抱きついた。朝比奈に負担をかけないように、そして踏みつけないようにするのは至難の業だ。

もちろん、身体の大いこの魔物は、巡たちの体重を受けても重みで潰れるようなことはない。が、やはり塩は効いているようだ。全身をブルブルと振って、彼らを引き剥がそうとする。

振り回される巡たちも必至だが、下にいる朝比奈はそれどころの騒ぎではない。

さらにそこに、かばが飛び上がって魔物の背であろう部分に取り付いた。

「まったく、どいつもこいつも無茶をする……!!」

そこまでやったのだから、最後まで責任を持って押さえつけていると命令を飛ばして、かばは魔物の背をギュウ、と押さえつけた。その背後に、ミーシャがまわる。

「潰れる……死ぬ」

「今さら文句を言うな！」

下でうめく朝比奈と、上から押さえつけるかぼ。巡と芽衣とミーシャと、誰かひとりの力が欠けても危険だ。五人がかりで精一杯だった。

「オレがここで逃げ出したら、みんな死ぬよなあ……」

朝比奈が呟いた。

「ぬしがそうする人間だったら、はじめから命なんて懸けさせずに逃がしておるわ！」

朝比奈も、巡も芽衣も、言ってわからないのだから仕方がない。

彼らがそうやって身体を張ろうとするなら、かぼだってそうしなければ皆の手痛い末路を目にすることになる。

「氷村さん……オレマジで死ぬって……」

朝比奈が、頭上に位置する場所に立っている氷村へと視線を向けた。

氷村は微笑で応える。

「まだ余裕そうじゃないか。逃げてでも死んでも皆無事では済まないのなら、生きて力を発揮するしかないよな？ お前が一番はじめにリタイアするか？」

「オレは今、四人分以上の重量を支えてるってーの！！」

吼える朝比奈を、巡は困ったように見下ろす。

「もうちょつと……耐えられる？ 先生、辛い？」

「あー、気にするな。愚痴は言うが死にやしないって……」

「そう簡単に死なせてたまるか、ボケ！！」

怒鳴るかぼの身体の下で、魔物の身体がジワリと溶け始めた。あと少し。

しかし、魔物のほうも大人しく浄化されるのを待ったりはしない。ブンブンと激しく身体を振って、かぼたちを振り落としにかかった。

「……クツ……離さんからな！！」

全身の力を使って魔物を押さえるかぼ。ミーシャも、芽衣も、巡

も、それぞれが全力で魔物を押さえつけた。

ブン。

「のわ!？」

ボタリと、かばは朝比奈のみぞおちの辺りに落下した。

「ぐえ……ッ」

うめく朝比奈。

「……な……」

なぜ、かばが朝比奈の上に落下したのか。

魔物が、一瞬にしてその場から姿を消したからだ。

全力で押さえていたものが急に掻き消えて、巡と芽衣もバランスを崩して倒れそうにはなったが、かろうじて朝比奈の上には倒れ込まなかった。

「なん……、どこだ？」

状況がつかめない。かばはキョロキョロと辺りを見回した。

魔物が消えたのは、かばの力によるものではない。本当に急に、その姿が消え去ったのだ。かばだけでなく、魔物に張り付いていた面々が全員、あちこちに視線をめぐらせた。

まさか、どこかに瞬間移動したのか。

それほどの力を持っているなんて。

「そろそろ降りてやったらどうかな」

氷村が、歩み寄ってきた。

「ぬ……」

言われてとりあえず、かばは朝比奈の腹の上から降りる。悪いなとど、実はこれっぽっちも思っていないところがかばだ。

「魔物をどこへやった!！」

かばは、氷村に向かって怒鳴りつける。降魔の力で魔物を出していたのは氷村なのだから、その問いが彼に行くのは当然だ。

「私が消した」

氷村はあっさりと言った。

「……消した……？」

何故、なんのために。

「キミたちは、大丈夫なようだからね」

氷村は、そう言って笑う。

「大丈夫って……」

わけがわからない。

大丈夫って、何が大丈夫なんだ。

巡たちは混乱した。

今の段階で、巡とかぼを引き剥がしたがっていた氷村の計画は、少しも達成されていない。なのに何故、彼は笑っているのか。

「もともと、オレたちを殺すつもりなんて無かったってことさ」

朝比奈が、ムクリと起き上がった。

眉間にしわを寄せるかぼたちには、朝比奈の言葉の意味もよくわからない。

「どういうことだ……？」

そんなことしか言えないかぼに、朝比奈は苦笑を返した。そして、ジワリとにじみを大きくする肩の傷を気にもせず、朝比奈は氷村を見る。

「説明、してくれるんでしょうね？」

豆鉄砲を喰らった鳩のような状況の面々に向かって、氷村はただ、頷いて見せた。

一体何が起きているのか、巡たちにはまるで事情が飲み込めなかった。

「……どうということ？」

巡の疑問に、朝比奈はため息を漏らす。

「さつき、あのでかい魔物を止めに入る直前にな、氷村さんは言った。オレが死にそうになったら、絶対にお前らが全力で止めてくれるだろうって。オレたちが命を懸けてもお互いを護ることができたなら……それをこの目で確かめることが出来たなら、自分の——氷村さんの仕事も終わると」

「……」

それは本当に、どうということだ。

わけがわからない。

「氷村さんが、説明してくれるんだろう？」

朝比奈の視線を受けて、氷村はほんの少し肩をすくめて、頷いた。

これから来る魔の刻のために。

やっておかねければならないことが、氷村にはあった。

正確には、やっておかねければならない、というのは氷村の個人的事情であって、誰かに課せられていることではない。

「私は別に、過激派でも魔狩人でもないよ」

飄々と、氷村は言った。

「な……」

絶句する朝比奈に、氷村はおかしそうに笑いかける。

「そうだとはい、一言も言っていないがな？」

「そんな……」

言われてみれば、そうかもしれない。だが、これまでの氷村の態度は、魔物を敵対視する彼らと同じにしか見えなかった。

「彼らの存在を利用はさせてもらったがな。連中に寝返ったと思われる方が、やりやすかった」

かばや巡にとって、敵とみなされる。

その状況が、氷村には必要だった。

「魔の刻と生の刻。ふたつの時代の住人同士が本当にわかり合えるケースは、非常に少ない。だから、生の刻において、魔の刻の住人は時代の片隅へと追いやられるし、魔の刻においての生の刻の住人は、心無き魔物に命を奪われる」

理想論を言ってしまうえば、確かにふたつの時代の住人たちは、互いを認め共存することで、ふたつの時代を共に乗り越えていけると、氷村は考えていた。

けれどそれは、とても難しい。

「魔の連中は情に乏しく自己中心的で、時を越え行く存在。生の連中は、逆に有り余る情によって他者を縛る刹那の存在。この共存は、本当に難しい」

相容れないふたつの時代だからこそ、この世界は均衡を保っているのかもしれない。

けれど、そうだとはい。

同じ世界に存在しているのなら。

こうやって、意志を通じ合わせることが出来るなら。不可能なことではないと、そう思いたかった。

「わちらを試したのか？」

かばの言葉に、氷村は頷く。

「引き離そうとしたのも、半分は嘘ではないよ。もしも最後にはど

ちらかが裏切るくらいなら、最初から共にいない方がいい。お互いに余計な傷を作ることになる」

氷村の脅しと魔物に屈してかばたちが巡を捨てて逃げ出すか、巡がかばたちを引き離すか。もしもそうなったなら、それはそれで良かった。もう二度とお互いに近付かないようにするなら、それでも曖昧な信頼関係を築き上げたあとで拒絶しあうくらいなら、その方がよほどマシだった。

結果的に巡たちは、氷村にとって理想的な結果を返したということなのだろうが。

けれど。

飄々と、氷村はそんな風に言うけれど。

「そんなことをして何になる？　ぬしひとりで」

世界にどれだけの生物と魔物がいるか、わかっているのか。

逢魔の力を持った者だけに限定するとしたって、その全てに対してこんな風に試すようなことを、ひとりで出来るわけがない。

「同じ考えを持って行動している者がいない訳じゃない。だがそれでも、世界そのものを変えるのは不可能だろうな」

そんなことは先刻承知、と言いたいのだろうが。

「自己満足だと思ってくれても構わないが……それでも、自分の手の届くところだけでも確かめたかった」

そんなちっぽけな存在こそが、世界を動かすきっかけにだってなり得る。

かばたち然り。

生と魔の絆を作り上げようとする氷村然り。

魔の刻を乗り越えるべく機関をたちあげた藤乃木しかり。

大きな実りの大元は、すべてちっぽけなひとつの種子だ。

「藤乃木は知っていたのか……」

「ああ」

こともなげに肯定する氷村に、朝比奈は嘆息する。

何もかも知っていたから、藤乃木は氷村を放置していたという訳だ。過激派に寝返ったという誤解もそのままに。人が悪い。

だが。

巡には、おそらくかばも、わからないことがあった。

「氷村……さん」

おずおずと呼びかける巡に、氷村は視線を向けた。不敵に見えるのは装いではなく、彼自身の性格らしい。

「どうしてそんなに、一生懸命なんですか」

こんなことに、氷村は一生を捧げるつもりでいるのかもしれない。だとしたら、氷村がこう生きていこうと決めた裏には、何がしかの理由があるはずだ。きっかけとなる、理由が。

「……」

氷村は無言のまま、小さく肩をすくめた。

よほど、言いたくないことなのだろうか。

「他言無用でお願いしたいがね……」

氷村は、小さく息を吸う。

「私が、物の怪の遺伝子を持っているから——なのだよ」

彼の一言に、巡と芽衣と女子高生以外の全員が、驚愕に息を呑んだ。

そんなばかな、と、朝比奈が呟いた。

「魔の刻の住人に、遺伝子なんてあるわけがないじゃないか……」
朝比奈の言う理屈は、その通りだ。

基本的に、魔物と呼ばれる種族は遺伝子を持たない。この世に存在する物質から、それが魂と呼ばれるものとなって偶発的に生まれるか、魔の力によって生み出されるかのどちらかだ。

何らかの形を持つてはいても、それは細胞によって形作られるものではなく、縁ある物質に近い形をとっているだけで、成長したり老いたりはいしない。魂自体が形を作っているから、その魂が消えれば姿も残らないし、かぼのように人間離れした能力を発揮できたりもする。

魔の刻の住人が普段見せている姿というのは、それゆえに幻と同じような存在なのだ。

朝比奈と同じように、かぼとミーシャも驚いていたが、理由はまったく違った。

禁忌とされた命が。

未だにその血を絶やさずに繋ぎ続けてきたなんて。

「その様子だと、物の怪諸君は事情を良く知っているようだな」
氷村の言葉に、しかしミーシャは首を振った。

「いや。オレが生まれる前の話だ。オレは噂でしか知らん」

「そうなの……」
かぼも頷く。

その話は、ミーシャが生まれた頃には、すでに物の怪の間でもお

とき話のように語られるだけのものだったはずだ。物の怪の間でおとぎ話、というのも妙な話かもしれないが。

「わちは良く知っているよ……」

かぼの表情が曇る。

「氷村。他にもいるのか。お前と同じ者は」

かぼがそんな風に訊き、氷村は首を振る。かぼが実際は何を訊きたいのか、わかっているような素振りだ。

「現存するのは私と私の父、そのふたりだけだ。私たちはこれまで一代にひとりしか血脈を分けてはいない。無駄に末広がりにはなっていないから、安心したまえ」

氷村の言葉に、かぼは苦笑を返す。

「いや、決して責めたいわけではないぞ。もしもその血が人間の中に蔓延したとして、それは絶対にぬしらの責任ではないし、また実際に人間に不都合が生じるわけでもない。だがぬしらは、その血を多く残さぬよう努めていたのだな」

「広めていいものだとは思わなかったからね。人間にとってと言うよりも、自分たち自身のために」

「ん、む……」

「ちょっと……」

話についていけない巡が、かぼをつついた。

「どういうことだよ。話の意味がわからないんだけど」

「ん……うむ……」

頷きながらも、かぼは考え込んでしまう。どこからどのように話せばいいのか考えあぐねているのだ。

「メグ」

芽衣が、おつとりと巡の顔を眺める。

「ちよつと不思議だねえ」

「何が？」

「私はつい最近魔の刻のことを聞いたばかりだから良く憶えてるん

だけど、魔物って、遺伝子は存在しないはずなんだよね？」

それは先程も朝比奈が言った。

しかし、巡には言葉の意味が難しすぎて、何のことがよくわからない。

「つまりね、魔の刻の住人は遺伝子を持っていなくて、魂だけの存在なのね。例えば身体を持って動いてたとしても、それは私たちのように成長したりはしないってわけね」

「……」

「人間や動物は、遺伝子を分け合って子供を作ったりする訳なのよ。私やメグは、お父さんやお母さんから遺伝子を分けてもらって生まれてきたって訳」

巡にもわかるような説明のしかたをする芽衣に、巡は曖昧に頷く。「もつと碎いて話すとな。つまりメグたち人間は子供を作るが、魔物には子供が作れない。子供を作るための遺伝子など持ち合わせておらんのだからな。勝手に生まれて勝手に消え行く」

遺伝子のことを言い始めればキリがない。だからかばは、子供を作るという点に焦点を絞って話した。それでも巡が話を完全に理解するまでには至らなかったのだが。

だが、つまり。

わかったこともある。

氷村が「物の怪の遺伝子を持っている」というのは、話としておかしいという訳だ。

魔物には、遺伝子がない。そういうこと。

「じゃあ、物の怪の遺伝子を持っているってのは、どういうこと？」
「……」

氷村も、かばも無言のまま。

言いたくないのか、それともどう言えばいいのかと逡巡しているのか。

「こやつの言うことが本当だと、それでも、その時代、その場に存在していたわちの方が、詳しい話はできるだろうな」

かぼが、ため息をつく。

氷村がかぼを見た。

「話だけでなく、事実を現実として知っている、ということだね。

私はもちろん当時のことは経験で知っているわけではないし、また知り得た範囲も狭い」

「まあ……」

巡には、どんな事件が起こったのかは想像もできないが。

ミーシャまだ生まれていなかったせいで、その話を知らなくて、かぼはそれを、事実として知っている。

つまりはそれほどに時間を遡った先に、氷村が今回起こした騒ぎの原因があるらしい。

おそらくはかぼが、氷村に代わってその内容を語ってくれるつもりなのだろう。

巡は、先を促すようにかぼを見つめた。

その物の怪は、もつとも人間に近かった。

一滴の水からも、一本の木からも、生きている動物からも。果てには人間の作り出した無機物からも生まれ出でる物の怪。

それが『人間』から生まれたとしても、何の不思議もない。

彼は、人間から生まれた物の怪だった。

物質が何故物の怪としての魂を持つのかは、はっきりとはわかっていない。だから、魂を持ち生きて動く人間から、何故物の怪としての存在が独立してしまったのかも、わからない。

けれどその存在は、鬼として人間から忌み嫌われることになる。

人間の姿を模倣した、魔の世界の住人。

人ではないのに、人の化身としての姿を持つ彼は、魔物の存在が多く認められている時代ですら、受け入れられることは無かった。

総じて生の刻の人間は、魔の刻の住人を好意的に捉えてはいない。だが、実害がない限り放置しておくというのが定石で、人間の方から攻撃的になるようなことはなかった。

闘わずして、その存在を締め出す。

それが、人間が常を選ぶやり方だった。

けれど、彼にだけは違う。彼の姿を見れば追い、その存在を許さずに攻撃を仕掛ける。

人が、彼を許せないのは。

彼が、人を表す存在だからかもしれない。

川が汚れば川の物の怪が衰弱するように。

菖蒲が枯れば、その精が精悍さを失うように。

人の物の怪である彼は、人のリアルな変化を、その身体、その存在で常に表す。

まるでそれは、鏡のような存在。

そんな彼の存在を畏怖する人間は傲慢かもしれないが、感情を持つ者としては自然と言えるかもしれない。

人の物の怪として存在しているにも関わらず、人に近付くことも許されない彼が。

まるで腹いせのように人間の虐殺を始めたことも、自然の流れとして片付けられることかどうか。

彼が掴む子供の髪も、女の柔らかな皮膚も、飛び散る血潮も。

全て自分は自分の身ひとつで作り出すことが出来るというのに。

なのに彼は、生の刻の「人間」たちから極端に忌み嫌われ、避けられるどころか存在すらも許されない。それは何故だ。この身で作りに出せる全てのものが、所詮は偽物だからか。どんなに模倣しても、生まれて生きて成長していく人間とは違うからか。

真似をしているから、存在すらも許されないのか。

物の怪の中で、何故自分だけが。

その手にこびりつく、人の血潮。

その手で掴み取る、人間の臓物。

そら、このとおり。なにもかも、なにもかも、なにもかも！

この手に掴んでいる、ホンモノの人間の部品、その細胞のひとつひとつまでも、自分は模倣で作り出すことができる。

人間の全てを、この身で再現することが出来るというのに。そうして出来上がっているのが、この姿だというのに。

人間から生まれた自分は、何故人間に近付くことも、存在するとすらも許されないのか！

「模倣するしか、できないの」

誰かが、そう言った。

神域とされ、人の近付くことのない山の頂で、さらってきた人間を引きちぎっていた時に、彼はひとりの少女に出会った。

「物の怪であるあなたは、人間を模倣するしか出来ないの。人間よりも優れた能力を持ちながら、それでも究極に人間になることは出来ない。それはあなたが物の怪だから。人間が、物の怪にはなれないように」

それでも、鏡のような彼の存在を許さない人間が彼を追い詰めたことを思い、少女は泣いた。

謝罪の涙ではない。

どうしようもない存在の食い違いに対する、悲しみの涙だ。

どうすることも出来ないふたつの世界への。

その時に生まれたのが、ある意味彼にとって一番人間に近いもの、だったのかもしれない。

彼は、その少女の身体に、小さな命を宿した。

まるで人がそうするように。

それは、何がしかの感情によるものではなく、つきあがった衝動で。

人を殺し、暴き、憶えてきた人の全て。彼らの姿を、行動を、本能を。その細胞のひとつひとつを。遺伝子のレベルまで、彼は『模倣』に成功していたのだ。

そしてそれは、魔の存在からも、忌むべき行為とみなされた。そういったルールが物の怪の間で存在していた訳ではない。ルールの前に、前例が無かったのだから。それが起こってしまったのは、彼が『人間から生まれた物の怪』であつたからかもしれない。

人から生まれた物の怪という存在自体が希少なのだ。

だが、魔の刻の住人と生の刻の住人が誕生の時点で交わるなどという事態が、好印象であるはずはない。相容れない世界の魂の融合。しかも片方は、精巧に出来た偽のものではない。

それがふたつの世界において、どんな存在になるのか。

基本的に物の怪たちは明確な社会を持たない。だから、そうやって生まれた者がどんな存在になろうとも、関係無いと言ってしまえばそれまでだったが。相容れないはずの世界をまたいで混乱を招きかねない彼の存在だけは、禁忌として扱われ。

彼は、物の怪の間でも、歓迎されない存在となってしまった。

彼は、魔の刻の住人であるという枠を越えてしまったのだ。

この回は、少々流血シーンがあります。ご注意ください。

自分の母体となる人間を傷つけ、命を奪う物の怪。

そんな彼とは逆に、少女は生まれた子供を心から慈しんだ。

神域とされるその場所に捕らわれ、奪われてその身に宿した禁忌の子供。

その子供や自分に対し、人間を憎む物の怪である彼が、何がしかの情のようなものを傾けることはない。けれど少女は、人間と物の怪の魂を分けたその子供を愛した。

己の中から生まれた小さな命を愛さない理由が、彼女にはなかったのだ。

子供が生まれるまでの間、ずっと物の怪の傍で半ば監禁されながら過ごしてきた少女だったが、子供のために、人の里へ下りなくてはならない。何もない山の中で身ひとつで、物の怪に投げ与えられるだけの糧では子供を育てることは出来ない。けれど。

鬼と呼ばれる物の怪は、それでも自分が人と同じように作り出した子供というものに、ある種の興味のようなものは抱いていた。だから少女に食べるものを与え、子供を育てるために人の里へ帰ろうとする少女を、繋ぎ止めようとした。

否、子供を連れ去るというなら、殺してしまおうとすら考えていたかもしれない。

少女が赤子を育てているのだと理解はしていても、自分が少女を殺してしまつたら子供も育たないであろう事実までは思い至らな

ったようだ。少女が子供を連れて逃げ出そうとすればその牙や爪を容赦なく振るい、そこには赤子だけは避けようなどという気遣いはまるでなかった。

そう、別にその子供を愛しているという訳でもない。

あるのは、自分が関わって生み出したという優越感と、好奇心。

このままここに留まれば、遅かれ早かれ、少女も赤子も死んでしまふ。

分かり合えない物の怪の傍から、少女はようやく逃げ出した。

鬼と呼ばれた物の怪は、今や本当の鬼のようだった。人々を殺め続けた、その身体に備わった爪は逃げる少女の背中に躊躇なく振り下ろされ、尖った牙は彼女の首を腕を噛み砕こうと狙う。子供を庇いながら山を下る少女は、何度もその刃に傷を付けられた。

それでも走って、走って。崖をを転がり落ちても起き上がり走って。

木々が分かたれる。

人家が見え隠れする。

人里まで降りることができれば、少女は助かるはずだった。

何とか彼の目から逃れて家々の狭間に隠れ、息を潜める少女。

その腕に抱く赤子は泣き声も上げず、おそらくは弱りきっているのだろうが、まだ助かる見込みはあると思ったが、希望は潰えてはいない。

しかし彼女の命を絶ったのは。

鬼の爪ではなく、人間の持つ武器だった。

鍬か、鉋か。それが何かは、背後だったからわからない。

後頭部に受けた衝撃を、地面に倒れ伏す少女が自覚していたかど

うか。

これが、鬼の子を宿した女だ。
この赤子が鬼の子だ。

人は、なんて。

——人は、悲しい。

何かと交わっては生きて行けない、彼らが悲しい。
結局逃げることしか出来なかった、自分が——悲しい。

いつの間にか降り出した雨に地面は湿り、広がる赤の血が、土の色と混ざり合う。

目を閉じることもし叶わなかった少女が最後に見つめていたのは、その赤に染まった土の色と、自分の目の前に立つ、小さな少女の姿だった。

「その時に、わちがその赤子をさらって逃げたのだよ」
かぼは、ため息のような言葉で締めくくった。

「……」

僅かな間、その場の面々には言葉もない。

「……どうして、かぼが？ その子をどうしたの？」
巡が口を開いた。

「ヤツの所業は、風に乗って物の怪たちの間に広まっていたからな。人間と、あってはならぬ接触のしかたを繰り返すヤツを制裁しようと、多くの物の怪がその場に集結していた。わちも様子を見に行っ

たひとりだった訳だがな、いたたまれなくなつて、子供だけは救い出そうと、そう思ったただけだ」

そうでなければ、子供の命もその場で奪われていただろう。

「禁忌の子だ。だがその子供は、何も知らん。せいぜい運を天に任せる程度の権利はあつても良からうよ」

だからかばは、その子供を遠く離れた集落の、人間の家の前に捨て置いた。

「物の怪では、人間の子は育てられん。誰かに拾われなければ自然に消え行く運命の命だったろうが……生きる力が、あつたようだな」
こんなに永い間、その血を絶やさずにいたとは。

そして何より。

何も知らないはずの赤子。

誰がそれを育てたかは知らないが、その里親ですら、その子供の出生は知らなかったはずだ。なのに代々その末裔にまで、その出生が語られているということは。

それを最初に伝えることが出来たのは、ただひとりだ。

「やはり、ただの子供ではなかったということだな……」

その赤子は、生まれたばかりの己に起きた出来事を、記憶していたのだらう。

自分がどうやって生まれ、どうやって生かされたのかを。

自分の父親が何者で、母親がどんな末路を辿ったのかも。

物の怪は、そのほとんどが自分がどうやって生まれてきたのかを記憶しているものだが、その力が、その子供にも受け継がれていたということか。

「そして、その血を受け継ぐ代々の子供たちは皆、己のルーツとなる鬼——物の怪の記憶を、多かれ少なかれ生まれながらに持っている」

氷村の口から伝えられる真実。

だから彼らは、話としてだけ知っているのではなく、己と深く関わる過去の出来事として、そのことを知っているのだ。欠片ではないその記憶は、随分と曖昧なものではあったが。

己の身体を構成する物の怪の細胞は。偽物であるが故に、どれだけ代を重ねても、消えて無くなることはない。

偽物の遺伝子。

けれどそれは、確かに受け継がれていた。

「人を憎んでいた物の怪の記憶と細胞を継ぎ、しかし魔を受け入れられない人間として、私たちは長い時代、命を繋いできたのさ……」

その末裔である氷村の表情は、苦渋に満ちたものだった。

千年以上の長い時を、その血を絶やさずに生き続けてきた魔の子供たち。

その末裔である氷村が、身をもって知っている事実。

母体である人間に受け入れられなかった物の怪は、意趣返しのようにふたつの血を分けた子供を作り上げた。そうしてもなお、彼の居場所がどこかに出来るでもなく。更なる仕返しのように、人間は彼もその血を受けた子供もその母親である少女も、受け入れなかった。

そして彼は。

積み重なった怒りと屈辱を突き崩すかのように、一帯の人間を残さず滅ぼし。

結果、その集落は廃村となった。

その後彼は、自分と同じ物の怪たちによって、その魂を消された。

物の怪たちが一丸となって、彼に向かってきた訳ではない。

けれど、どこでどの物の怪と遭遇しても。怒りに満ちた目が、彼に襲い掛かった。

人間から生まれた物の怪であっても、人間よりは身体能力に優れ、魔の力を持ち、おいそれと他者に滅ぼされる存在ではない。けれど大なり小なりの力や属性の差こそあれ、同属である魔の刻の住人達に数の力で来られたら、単体の彼が勝てるわけがなかった。

自分たちの立場をも危うくする彼の行動を許す者は、ひとりとしていない。社会を持たない物の怪たちの中でさえ、まるでそうと示

し合わせているかのように。彼を生かしていて良い存在だと認識する者は、誰もいなかったのだ。

彼は自分の所業によって、物の怪の中でも居場所を失った。

彼はこの世から消えて無くなり。

ひとつの集落が滅びた。

これが、互いに歩み寄れなかった生と魔が招いた、当然の結果だった。

「生は魔に、魔は生に裏切られる。それはもともと、相容れることのない道を行く者同士だからなのだろう。だから」
だから。

どうせ傷つけあうくらいなら、最初から共に歩むことなど考えなければいい。

だから問うた。

どういふつもりで、お前たちは共にいるのかと。

そして、もしも。

もしも、それでも共に行こうとするならば。そこに、何者にも引き裂かれることのない絆をしっかりと作り上げていけるようにと。

それが、彼と、彼の前を生きていた先達の、本当の願いだ。

そんな絆が、本当に存在するのなら。

違う存在である者同士が、それでも同じ時を過ごさねばならない時代は、必ずやってくるのだから。

「それを実現するために、私たちは命を繋いできたのかもしれないと、そう思うこともある。だからこそ、私は私の手が届くごく僅かな範囲だけでも、干渉して生きて行きたいと考えた」

生と魔が傷つけ合うことなく、できれば共に、ひとつの時代を過

ごして行けるように。

そうでなければ、ふたつの血を持つ自分たちが悲しすぎる。

魔の刻が進めば、生の刻の住人たちは、じわじわと危機的立場に追われて行く。そうした時に憤りを向けるとすればその先は、魔の刻の住人たちだろう。お互いを侵食し合っただけでしか繁栄できない対の存在なのだから、仕方がない。

そうあってもなお、築ける信頼が。

確かにあるはずと信じた氷村の思いは、ただの感傷だろうか。もとより、誰も理解することの出来ない思いではある。けれどそれでも、人も物の怪も、長い時間の中にあって変わって行くものなのだと思いたいのだ。

そして、次に来る魔の刻は、これまでとは違う。

魔物たちと、良くも悪くもちゃんと対峙していけるよう、土台を作り上げようとしている人間がいる。藤乃木たちのように。

生も魔も、昔のままではないのだ。

そんな組織からのバックアップを受けて、氷村は生と魔の絆に関わりながら生きて行ける。ひとりでは、到底出来ないことだった。

「社会そのものを変えたい訳じゃない。私はそんな大それたことをやり遂げられる力などは持ち合わせていない。だが、放っておけば起こりうる悲しみを、ひとつでも減らせるようにと願うことは出来る」

氷村は願い、その願いに則ってこれまで行動してきた。

そんな彼に、巡やかばが見せた姿は、救いとも希望とも言えるかもしれない。

「君たちのその絆が、永く続くものであることを願うよ。裏切られる回数は少ない方がいい」

「……」

ずっと以前からこんなことを繰り返してきたのであろう氷村は、おそらく何度も裏切られてきたのだろう。裏切られるとはすなわち、信じているということだ。

真の絆を確かめるために、危機的状況をその手で作り上げて。それでも揺るがないものを、見せつけてほしくて。

理由もわからず襲い掛かれる恐ろしさは、巡たちも痛感している。そうなった時に、自分の隣にいる物の怪を頼り支え合うのか、それとも畏怖するのか。巡たちは、自然な流れで前者となった。そしてそうはならない者たちも当然いるだろう。

「これからも続けるの？」

「ああ」

巡の質問に、氷村は即答する。

「相容れない存在と馴れ合うのもそれを避けるのも、それは個々の自由だ。相容れないのならせめて、攻撃的な手段はそっくり己に返ってくるということを肝に銘じなければならない。そして共存を選ぶのであれば、それもやはり、それ相応の覚悟が必要であることを知ってもらわなければ困る」

個人の問題で済まなくなる前に。

「今年度いっぱい藤乃木で教鞭はとる。だがその後は各地を歩き回ることになるだろう。それは藤乃木からの打診でもある」

当然のように言う氷村に、朝比奈は肩をすくめた。

「大胆なことをするモンだな、あの爺さまも……」

本当の本気で、生と魔のバランスを保つために全力を注ぐ気でいるのだ。

その組織というヤツは。

「反感も恨みもあるだろう？ 過激派の存在もある。せいぜいへし折られないように、気をつけてくださいよ」

皮肉めいた朝比奈の言葉だが、彼は本気で言っている。彼なりの

気遣いであることは、氷村にも理解できているだろう。

「過激派の件は藤乃木が裏で動いているし、私自身のことも心配は
いらない。とうに覚悟は出来ているし、自分で望んだことだ」

物の怪の血を引く数少ない人間である氷村が、自分に出来ること
を。

それが、背負ってきた自分のものですらない悲しみを軽減できる
術ならば。

余さずすべてを語った氷村が見せる微かな笑みは、決意も悲壮さ
も内包させていながらも、余裕のある力強いものだった。

「生かしておくべきではなかったかな……」

かばが、ぼつりと物騒なことを呟いた。

「え？」

何を、と、巡がかばを見つめる。

「情に流されて、わちはあの時、子供を連れて逃げたがな……」

その結果、どれだけ永い間、その子供たちは過去の悲しみと矛盾を背負って生きてきたのか。

ほんの気まぐれと同情。それが、時代を越え連なる悲劇を生み出したのではないか。

だが、かばのその言葉には、氷村は軽く首を振った。

「そうでもないさ。確かにその事件、その当時に居合わせた人々と魔物には悲劇だったかもしれないが、我々子孫にとっては、あくまで過去の記憶でしかない」

けれど、その過去の悲しみを自分のことのように記憶し、胸を痛めたのも事実で。だからこそ、同じ場所に存在する生と魔のあり方を変えたいと、氷村は考えた。

悲しい過去があるからこそ、それを背負わなくていい未来を作れたならと。

悲しみの中にあつて、それは前向きな考え方だった。

「もつとも……私が子供を作りさえしなければ、人の中にある魔物の血は、私で終わるはずだがな」

何故祖先たちは、ずっと血を繋いできたのだらうと、氷村も考えたことはある。

しかもこれまでずっと、一代に、たったひとりだけ。

二人以上の子供を持たず、けれどその血を絶やすことなく。

そこには何がしかの意味も、あったのか。

人の中の魔物の血を、木の根のように増やすことを恐れたのかのかもしれない。けれども、それを消滅させないようと。

「本当のところは私にもわからんがね。だから私は無責任でも、私でこの血を終わらせてもいいと考えている。だからこそ、この時代において、自分に出来ることは全部してから終わろうと」

無責任というか、血を残すことを強制された記憶は一度もないし、強制された祖先もいなかっただろうと思う。けれどそれでも血を残してきたことに、意味があるのは間違いないのだろうが。

「確かに少し、悲しかったかもしれないな。この血をここで終わらせてもいいと思うくらいには。だがだからこそ、生と魔を近づけようなどと考えもした。これは私だけではなく、連綿たる祖先全ての願いだ」

君は歴史を変えたのかもしれないよ、と氷村は言った。

しかしかばは、苦笑しながらため息を漏らす。

「だが、わちはぬしのやり方には口も出せないが、感心もしないぞ」理由もわからず襲われた立場としては、当然だろう。氷村の出した魔物によって消滅の危機ですらあったのだ。それについては、氷村は否定もせずに唇の端をつりあげた。たしかに加減はしていたが、もしもという事態が絶対に起こらない訳ではないのだ。

だがだからこそ、最初から覚悟もしている。

魔物や人類の、敵となることも。

氷村がそういうつもりであったから、藤乃木も氷村にそれを求めた。

それでいいのだ。

「別に、問題ないわよ」

それまで黙っていた少女が、陽気に口を開いた。

「だからセンセには、私がついているの。ひとりで悪者にならないで済むようにね」

藤乃木高校に通うこの少女は、自身の力ゆえに氷村の本質と行動を知るに至り、高校に入學して以来ずっと氷村の手伝いをしてきた。藤乃木たちの作り上げた機関に属する若手であり、藤乃木が氷村につけた助手のようなものだ。

藤乃木が彼女を氷村の助手につけたのは、他意があつての事ではないかもしれない。けれど、彼女の中にはきつと、彼と添い遂げる理由、もしくは答えがあるのだろう。

彼女だけは、何があつても氷村の味方だ。例え世界が敵に回つても。

ゆえに彼は、ひとりではない。

「そろそろ行くか……鳳」

鳳おおとりと呼ばれた少女は、かばに向けていた視線を歩き出した氷村に移した。

「はい」

やるだけやって、飄々とそこから立ち去ろうとする氷村だったが、ふと足を止めて巡たちの方へと振り返った。

「ああそういえば、あのシュークリーム屋の主人にも、探りを入れるような真似をして済まなかったと伝えてくれ」

彼がミズと接触していたのは確認済みだったが、それ以外の物の怪の影は、彼の周りにはまるで無かった。年齢のせいもあるかもしれないが、性格的にも落ち着いて安定しているようだったから、もしもこの先再び物の怪と接触するような事態が起こったとしても、彼なら上手く対応できるだろう。

探りを入れられていることに気付いていたのだろうに、脅えるでもなく怒るでもなく、それこそ、水面のような人物だった。

「わかった……」

シュークリーム屋にされてしまった莊二郎を気の毒に思いつつ、巡は否定せずに苦笑した。よほどシュークリームが、広くない店内で目立っていたのだろう。

騒がすだけ騒がせて、あつという間にその場を去ってしまった氷村を見送りながら、地面に尻をついたままの朝比奈は盛大なため息をついた。

「疑問も文句も何もかも、藤乃木の爺さんが引き受けてくれるんだろうなあ……」

「……あ……」

良く見れば朝比奈は、その肩を血で染めたまま座り込んでいる。通常重症といえる傷だが、その場にいた皆、きれいに忘れていた。「痛いかな？ 担任」

オロオロと、どうやって傷を手当していいかわからずに逡巡する成瀬姉弟と対照的に、しげしげとその傷を眺めるかぼとミーシャ。

「これが痛くなかったら、オレがおかしいよな。……まあ、いいさ」予想済みの傷だ。

朝比奈に死の危機が訪れた時に、巡やかぼたちがどう出るか。その賭けのようなものだったのだから。

それにこれからは、こんな傷が増える時代になる。確実に。

「しかし、悲しいもんだね。人間から出来た物の怪つてのも」

「……そうだな……」

神妙になって呟く朝比奈の言葉に、かぼはどこか、遠い場所を思い馳せるような眼差しで、静かに頷く。

そんなかぼの表情の変化を、巡はどう捉えていいのか計りかねるかのように、静かに見つめていた。

忙しなかった七月が過ぎ、八月となった。

夏休みともなれば課題もあるし、普段はやらなくていい諸々の用事も言いつけられたりして、それなりに忙しいものだが、それでも夏の暑さの中、巡は割と暇を持て余していた。

「アレはないのか。ほら、良く聞く塾だの、夏期講習だの」

「なんでそういう知識はついてるかな……」

これまた暇そうなかぼの言葉に、巡はげんなりとベッドの上でゴロリと寝返りを打つ。

巡は塾にも通っていないし、夏期講習などというものにも縁がない。一応小学校入学の際に受験はしたが、来年の進学時には藤乃木学園グループの中学に内部入学する予定だ。この学校は持ち上げりの場合内部考査しかない。よほど酷い成績でなければ、簡単に中学校まで持ち上がりで進学できるシステムだ。そこそこの成績を保っている巡は、余計な勉強をしようとはまでは考えなかった。

「氷村さんのこともあったし、少しはゆっくりしたいよ」

暑さのせいか、いささかじくさい巡の台詞。

実際、巡の夏休みなど、いつもこんな感じだ。父親は単身赴任で不在になってから長く、母はそういった企画力には乏しいほうだから、夏休みだからといって大型レジャーが待っている訳でもない。巡も芽衣もそんな生活に慣れ切ってしまったから、不満が出ようはずも無かった。

というか、要は出不精なだけか。そういう意味では本当に若さに欠けた姉弟である。

「氷村さん、かあ……」

夏休みの前半は、色々な意味で衝撃的だった。

魔物に襲われるなどという前代未聞な経験もそうだが、氷村のよ
うに、魔物と人間の血を分けた存在が、自分の知らないところでし
っかりと存在していたなんて。

世の中は広すぎるといえるか、考えていたよりも奇抜というか。

人間と物の怪が分かり合えなかった結果が彼であると見せ付けら
れているようで悲しいけれど。巡だって最初は、物の怪であるかば
を素直に受け入れようとはしなかった。昔の人や物の怪のことをど
うこうとは言えない。

今の信頼関係があるのは、かばが立ち回って巡の心を開いてくれ
たからだ。

「なんだ。あ奴のことが気になるか？」

相変わらずニヤニヤと笑った表情のかばは、グラスに注がれたオ
レンジジュースの中に浮かんでいた氷をボリボリと噛んでいる。最
近のお気に入りらしい。

「ん……」

氷村そのものが、という訳ではなく、氷村にまつわる過去の事件
と、これから自分が進んでいく未来のことが気になる、と言った方
が正しいかもしれない。

過去のことを、言葉で聞いただけでは到底理解など及ぼうはずも
ない。そうでなくとも通常なら、おとし話としても語られそうな
突拍子もない話だ。

それでも魔の刻というものが、これから訪れるのは確実で。

以前かばは、本格的な魔の刻が訪れる頃にはもう巡は生きてはい
ないと言っていたけれど。それでも時代は変わりつつあるのだ。

他人よりも一歩先を進んでいる自分は、これからどうやって生き
ていくのだろうと。

自分にどんな未来が待っているのかなどと、具体的に考えたこと
などこれまでも無かったが、だからこそ、自分の未来に不安を覚え

るようなことも無かった。

魔物との対立とか共存とか。

考えるというか、思いつきもしなかったのは、当然のことだ。

「ふむ」

何事かを考えるような素振りを見せるかば。

飄々と、どうでもいいようなことを考えているようにも見えるが、その表情は、良く見れば存外に真摯なものに満ち溢れている。

「そんなに力むほどのことではないと、わちから見れば思えるのだがの……でもまあ、馴染めと言われても、素直にはいそうですかと言ったことが出来ないのも、人間の特徴だからの」

「……悪かったな」

その手のグチやら説教やは、これまで散々聞いてきた。

人間は、正体不明のものを恐れ、排除するようにできている。もちろん例外だってあるが、それは単なる個人差で、実際人は、自分と違うもの、ましてやその根本を知ることの出来ない物の怪の存在を、そう容易く受け入れられるような社会は出来上がっていない。

いくら代を重ねたところで、そうそう変わったりなど出来ないものだ。

「今回改めて思い知ったが、人間の寿命は長い。他を招き入れないからこそその長さなのだとしたら、このままでいた方がいいのかもしれないが、わちら物の怪にとっては寂しいものだの」

しみじみとしたかばの言葉に、ゴロ寝していた巡はベッドの上で上半身を起こす。

「人間の寿命が長い？ 百年足らずなんて、かばにとってはあつという間のことだろ？」

しかしかばは、首を横に振る。

「それは、例えばメグひとりの寿命を考えれば、その通りだがの。だが人間は、短い命だからこそ次世代を残す。もちろん人間以外の

生の刻の住人も、皆そうだがの。わちが言っているのは、その長さの話だ」

人は子を生み世代を繋ぐ。歴史を作る。そうして古からこれまで、人間というものの存在を存続させてきた。かぼが言うのは、その人間全体の寿命の話だ。

人間全体の生きてきた時間は、とても長い。

「わちがこれまで存在し続けてきたのが、何よりの証拠だ……」
「……え？」

一瞬眉を寄せた巡に向かい、かぼはニツコリと笑顔を向けた。

「メグ、暇ならわちと旅行せんか」

「……はあ？」

突然のかぼの言葉にぽかんと口を開いた巡だったが、そんな彼を見つめるかぼは、ただニコニコと笑って返事を待っていた。

旅行なんて言うから。

かぼとふたり、向かい合って電車でガタンゴトンと揺られる旅を連想してしまった巡は、旅行番組の密かなファンだ。しかし、かぼの存在を他に知られたくないなら、傍目から見れば、巡、無言の一人旅ということになる。

しかしそれは、巡の想像に終わった。

大体、かぼと二人きりで小学生が旅行など、保護者に許しを得られるはずがない。いくら相手が天然の由美香であつてもだ。

実際は、もつとあり得ない『旅行』だった。

別にいいけどどうやって、と呟いた巡を、かぼは早速とばかりにその肩に担ぎ上げた。

「……え!？」

カラリと窓を開け、巡を担いだままのかぼは、そのまま窓の外へと飛び出した。

「あまり暴れるんじゃないぞ」

かぼの身長では、担いだ巡の手足を引きずる勢いだったが、空中だから心配無用。

そう、空中だから。

「ぎゃあああああああ!!」

電柱から電柱へと。木から木へ、屋根から屋根へと。
ストーンストーンと軽やかに飛び移るかぼの速度は、道路を走る

自動車と大差ない。

「……………ツツツツッ！」

自分の半分ほどしかない少女に担がれて空を舞う巡は、たまったものではない。むしろ、生きた心地がしなかったというか、全ての感覚を自覚している余裕すら無かったというか。

朝比奈ですら軽々と掴んで数メートル飛び上がることの出来るかばだから、本人はいたって平然としているのだが。

時間にして、三十分ほど。

それだけの時間を空中アクロバットに費やした巡は、目的地に到着する頃には、既に気を失っていた。

「人間ってのは、本当に軟弱だの……」

ビシビシと頬を叩かれて目覚めた巡にかけられた、かぼの第一声。
「軟弱ってお前なあ……あ……うええ」

眩暈と吐き気を覚える巡は、反論もろくに出来ずにその場にうつすくまる。

「こんな……人に見られたら、どう、するんだよ……」

「大丈夫だ、見られやせん。あんまりメグが騒ぐから少し心配だったが、途中からは静かだったしの」

かぼの無茶苦茶は今に始まったことではないが、ここにきて巡、己の認識の甘さを思い知った。かぼの本気は、想像以上だ。というか、多分まともな思考では及びもつかない。

「ほれほれ、元気を出せ。ここは空気もうまいからな。深呼吸するがいいぞ」

「……………」

そうは言われても、とてもではないが、その場に尻をついたままの巡は立ち上がることもすらも困難だ。しばらくの間、地面でうずくまるようにおとなしく俯いているしかできなかった。

そういえば、ここはどこだと。

ようやくとゆるゆると頭を上げた巡は、辺りを見回した。

何とか立ち上がってみて、自分が靴も履いていないことに気付く。これでは山の中を歩くのもままならないし、なんとも落ち着かない。「ここ、どこ?」

「メグのうちから、そう遠くもない。木霊山こだまさんは知っておろう?」

「こだまさん……?」

知ってはいるが、そんな方まで来ていたのか、と驚く。標高100メートルほどの、近辺では大きい方に属する山だ。巡も何度か訪れた記憶がないでもないが、しかしこんな場所は知らない。人の手がまったく入っていないのに、木々や雑草で覆いつくされているでもない。

かばによれば、巡たちが観光地として知っている頂上付近とは少々離れていて、登山コースとしても開拓されていない場所らしい。

「開発しても仕方のない場所だな。それにしてもこれまでまったく、手が付けられてこなかったというのも不思議な話だ」

もう千年以上が経過するというのに。

かばの呟きに、巡は訝しげに彼女の顔を見た。

「千年?」

かばは笑う。

「昔はここにも小さな村があったんだが。さすがにこれだけ時間がたつと地形も変わる。人が足を踏み入れるのも困難になっているかと思えば、案外そうでもないのだな」

それなりに生い茂る木々間に生える草を踏みしめて、かばは少し歩く。人の手が入っていないという割には、それほど荒れてもいないそこは、何とも不思議な空間だ。

ここは、古い古い、小さな霊域。

禁忌の交わりと殺生が行われたこの地を、人間は無意識に避けてきたのかもしれない。これまでずっと。

「ここって……」

巡が眉を寄せる。

巡の先を歩いていたかばが、ふわりと髪を揺らして振り返った。

「ここは、氷村の祖先たる子供が産まれた場所だ」

「……！」

人と物の怪の子供を少女が宿し、その少女が殺された後に廃村となった村があった場所。

かつての、悲劇の場所。

「やはりメグにも聞かせておこうと思ってなあ」

ヘラヘラと笑いながら言うかばの表情が、ほんの少しだけ曇って見えたのは、多分巡の気のせいではなかった。

かばから漏れた言葉は、巡の予想を遥かに上回るものだった。

「鬼とされた物の怪の子を産み、人間にその命を絶たれた女はな……
わちの生みの親でもあった」

「……え？」

それは一体、どういうことだろう。

かばは物の怪であるはずで、誰かが産んだ訳ではないはずで。でもその女性が産みの親だというなら、その女性も物の怪だった？ いや、それはない。彼女は人間だったが故に、悲劇の末路を辿ったはずだ。それに物の怪は、子供を産まないものだろう。

「生みの親、と言うと誤解を生むかの。かばは、その女から生まれ出た物の怪、ということだ」

突然に、唐突に。生の刻のあらゆるものから、突如として発生する、物の怪。

ミーシャが川から、シンが猫から発生したように。

かばは、人間から。
ということとは。

「かばも、人間の、物の怪なのだよ」

人間の、物の怪。

確かに、人間の物の怪が複数存在しないという決まりはないかも

しれない。それはまあ、いい。けれど巡が驚いたのは、そこではなくて。

「だから、今までメグには本当のことは言いにくかった。人間の物の怪が、人にどういう感情を与えるのかは良く知っていたつもりだし」

「い、いや」

鬼と呼ばれた物の怪が、当時の人間にどう思われ、どういう扱いを受けたかを考えれば、かぼが巡に本当のことを言えなかったというのも納得は出来る。それはわかるのだが、そうではなくて。

「そんなことより、かぼ。じゃあかぼは」

古い過去。その時、その惨劇の場で。

「かぼは自分の生みの親といえる人を、亡くしたのか？」

「そうだ」

淡々と、微笑さえ浮かべて肯定するかぼ。

生みの親と言っても、偶発的にその人間から生まれ出てしまったというだけで、本当の意味での親という訳ではない。かぼが属しているのは人間そのもので、その少女というわけでもない。それに、物の怪は人間の言うところの情というものを、あまり多くは持ち合わせてはいないらしいがそれでも。

「人なぞ、どうせ一瞬で死んでしまうものなのに、なぜ殺さねばならんのだろな」

逢魔の力を持つその少女から、今はかぼと呼ばれる物の怪は、ポロリとこぼれおちた。

まさにそんな感じで、彼女は生まれた。

物の怪と呼ばれるものが、どうしてこの世に発生するのか、それ

はわからない。けれど。少女は言う。

「あなたは多分、私の『生きたい』っていう気持ちから生まれたんだね」

多分それは彼女の自己満足ともいえる結論で、人の心ひとつで物の怪がポロポロと発生するわけではない。わかっているけど、少女は自身から生まれ出た物の怪に、常からそんな風に語っていた。

逢魔の中でも抜き出た力を持つ少女は、その力ゆえに、形ないものの言葉を伝える者として祭り上げられ、長い時を巫女として生きてきた。自由を奪われ人に利用され続けることを拒まなかったその少女は、生きていないと言っても過言ではない人生を送っていたのかもしれない。

けれど少女は、彼女を崇める人々の隙を突き、旅立った。

「あなた以外に、人間から生まれた物の怪がいるらしいの」

それは風の噂というか、物の怪たちの情報網から得た話だ。

「私、会いに行ってくるから、あなたはここで待っていてね。決して人前に出てはだめよ」

人と物の怪がわかりあいにくい存在であることを、少女はその経験でもって痛感している。それが人間から発生した者であるならなおさら。だから少女は、常から彼女には人前に出ないようにと言って聞かせていた。

物の怪にしる人間にしる、心ある者ばかりではないのだ。

けれど、何故そうまでして、人の社会でいわれなき反目を買うことを承知の上で、人から生まれたその物の怪に会いに行こうというのか。

その場から逃げ出したと知れば、ただでは済まないだろうに。

「あなたと、友達になれるんじゃないかな。それに彼——彼女かな。も、もしかして人の物の怪であるせいで困っているかもしれないし」

人から生まれたというのであれば、
会っておきたい。

逢魔の力を持つ者として、伝えておきたい。

生と魔の存在は、真にわかり合うことは難しいかもしれないけれど、折り合いを付けていくことはできるはずだと。

——人を、憎んではいけないと。

許し、妥協し、極力理解し合って行くことで、生も魔も、もっと
楽に共存して行けるものなのだと。

「当時のわちは、好きにすればいいと思っていたがの」

物の怪の生みの親であるが故に、共存しにくいことでその心を痛
めているのであれば、自分の満足のいくように行動することを、止
める理由はない。

自分の一番の理解者である少女を、かぼも、理解していたかった。
だから少女の言うとおり、大人しく待っていようと思っていたの
だが。

「旅路は遠い。それに何が起こるかもわからない。一応、様子だけ
は見ておいたほうがいいんじゃないかと、ふと思いつてな」

その遠い地にある人の物の怪は。

意識して情報を集めれば集めるほど、良い噂を聞かない。

ふと思いつて、というのは嘘かもしれない。

かぼは聞いたのだ。人間の女が、人を模した物の怪の子供を宿し
たことを。

なんてことを。

——なんてことを。

何故、そういうことになるのだ。

そうして少女を追ったかばは、手遅れを思い知ることになる。

ぼんやりと彼女を待っていた、一年を越える時間。

せめて、あと一日でも早く思い立っていたなら。むしろ、あと一時間でも早くそこにたどり着いていたなら、少女に向かって振り下ろされる凶器を止めることが出来ていた。だが、そんな『もしも』に縋ることなど許されないほどに、時の流れは正確なのだ。過ぎた時間を戻すことは、悠久の時間を過ごす物の怪にだってできはしない。

降りしきる雨と一緒に大地に流れ落ちていく命を。

当時のかばは、黙って見送ることしか出来なかったのだ。

見えないものは、見ようとしなければ、見えない。

見ようとしても見えないものならば、尚更目を凝らさねば、見えようはずもない。

誰も同じように、そこに存在しているのに――。

「見えたら見えたで、人はそれを恐れる。直視しがたい己の姿を映す鏡なら、いつそ壊してしまいたいと願うほどに」

何ゆえ、人が人を殺め、人でない自分が、いわれ無き別離の苦を味わわねばならないのか。

生まれ落ちたときから、ずっと傍にいた。

一番の理解者だったし、他に人の友人などいなかった。

「悲しむことなどない、どうせ人の寿命などたかが知れていることだ。魔物は情の薄さゆえに社会を持たないもの。それが生みの親であろつが何であろつが、関係のないこと」

かぼは、ゆっくりと巡から視線を外し、空を眺めた。

「そう、自分に言い聞かせてみたがの――」

かぼのために、人の物の怪の許を訪れた少女。

顔も知らぬ物の怪の、あるかどうかわからない心を解きほぐすために旅立った彼女を待ち受けていた悲劇。

だからかぼは、雨が嫌いだ。

あの時、少女の血と命を洗い流した雨を、かぼは今でも好きになることができない。

言葉を交わした者が、一瞬にして肉塊と化したあの瞬間は、悠久の時を過ごすかばの中では、永遠に風化してくれない。

そして、時を越えてその傷を抱え続けている者もまた、自分以外に存在したのだ。

あの時、禁忌の子供を生かしたがために。

だがそれは、もういい。

もういいというのも変な話だが、あの時に起こった一連の事件について、誰が悪いとか、自分が愚かであったとか、そんな言及や懺悔がしたいわけではない。

あれはそういう、流れだったのだ。

回避できる方法が無かったとは思わない。後悔して時が戻るのなら、誰だっていくらだって後悔するだろう。けれどそれでも、そうなってしまったのだから。過ぎ去った過去は、作り上げられてしまった運命であって、元には戻らない。

それが世界というものだ。

かばを作り上げた人間という存在を、その事件のせいで忌み嫌うつもりも、ない。

恨むのではなく、共存できる方法を。

悲劇に胸が痛むのであれば、できるだけそれを起こさない方法を考える方が、かばにとっては重要なことだ。

「メグをここに連れてきたのは、単に知っておいて欲しかったからだ」

何事もなかったかのように、かばはニヤリと笑った。

氷村に受け継がれた悲劇の記憶の中に、かばの存在があったことを。

そして、どんな運命であれ、共に存在し続けていく、自分は人間の物の怪なのだということを。

「……」

どう反応していいかわからない巡を、かばはいつもの憎たらしい

視線で見やる。

「ぬしが知リたがつていたんじゃないか。かばが何の物の怪なのか、知れて嬉しいか？」

からかうような物言いに、巡は眉を寄せる。

「そりやそうだけど……」

事情が複雑すぎて、どんな顔をしていいのかもわからない。

正体を明かそうとしないかばに腹を立てたこともあったけれど、長い時を過ごす物の怪には、それ相応の経験や事情があるという事実を、今実感したばかりだ。

途方も無く長い時間の中には、きっと他にも様々な出来事が。自分それは、巡の理解の範疇を超えるほどに、膨大なもの。

それを見通そうとするには、自分はあまりにも幼くて小さい。身体も——心も。

けれどそれすらも、当たり前で、仕方のないことで。

もちろんかばは、そんな巡を叱咤するわけでもなく、励ますでもない。

「メグは、かばが人間の物の怪だと知っても、恐ろしくはないかの？」

ニコニコと問うかばに、それだけははっきりと、巡は首を横に振った。

「そんな訳ないだろ。他の物の怪だって沢山いるし、襲いかかってきた魔物だっているわけだし。その中で、なんで人間の物の怪だからって、かばを憎んだり怖がらなきゃならないんだよ」

巡にしてみれば、人間の物の怪だというだけで彼を追い詰めた人々の方が理解できない。

「うん。メグが子供で良かったと、わちも思っているのが」

「なんだよ」

確かに子供だが、かばにサラリと言われると、何となく悔しい。

そんな様子が目に見えたのだろ。かばはさらに笑みを深くする。「拗ねるな。馬鹿にしている訳じゃないぞ」

巡が何も知らない子供だと言いたい訳ではなく。

大人は色々と複雑なのだ。純粹で無垢な心を持ったまま大人にはなれない。故に大人は、余計な情報や感情を持ってしか他と接することができない。それが悪いというわけではなくて、それが、大人になるということなのだ。

巡がそういう大人だったなら、かばは今ここでこうしてはいないだろう。

巡が子供であったから、かばは彼と一緒にいられる。

そして、共にありながら大人になっていくことも可能だろう。

かばは、巡に向かって両手をズイ、と差し出した。

「色々と話せることもあるが、とりあえず帰ろうかの？」

ニコニコと差し出されるその手は、巡を再び抱え上げようとしているのだろう。

「……！！」

あの悪夢のような時間が、再び。

「待て、ちよつと待て！」

巡は慌てふためきながら、胸にぶら下がる硬いものを握りしめた。

「……あ、携帯！」

こうなるとわかつていた訳ではないが、何気なく首からぶら下げていた、自分の携帯電話。これまで意識してもいなかったが、持っていて良かったと心から思う。というか、ここに来るまでに振り落とされなかったのは幸いだ。

巡は咄嗟に、胸の携帯をパカリと開いた。

「なんだなんだ」

「いいから黙ってて！！」

誰か……誰か。

というか、ここで頼れるのはおそらく、ひとりしかない。つい最近登録された番号を呼び出す。

頼む、暇でいてくれ。

『どうしたあ？』

割とすぐに電話に出た相手ののんびりとした声に、巡は食って掛かるように叫んだ。

「先生、今すぐ迎えに来て！！ でないと僕、多分死ぬ！！」

『……は？』

電話の相手——朝比奈に、巡はひたすらに、助けってくれと叫び続けたのだった。

通されたりビングで、コトリとテーブルの上に置かれた麦茶を、朝比奈は「いただきます」と口に運んだ。

同様に麦茶をかぼと巡の前にも置き、芽衣は自分もその場のソファに腰掛ける。

「ホント驚いたよお。部屋にいたはずのメグが、先生の車で帰ってくるんだもん」

うん、と、朝比奈は頷いた。

「オレも驚いた。まさか木霊山から救助要請が入るとは思わなかったからな」

巡の家付近から木霊山までは、車で移動しても30分ほど。もしも朝比奈に時間の余裕が無かったら、今頃巡の精神は朽ち果てていたかもしれない。そうなる前に、歩いてでも飛ぶ以外の方法で帰ってこようとするかもしれないが。

「ズルいなメグってば。私に内緒で木霊山まで遊びに行っちゃうなんて」

別に遊びに行った訳ではない。というか、一時話をしてトンボ帰り、ごく短時間の森林浴しかしていない。

「かばちゃんは、どうしてメグにその現場を見せようと思ったの？」

かばの母体ともいえる少女が命を絶たれた村。

聖域とされながらも、鬼となった物の怪に占拠されていた霊山。

かばは、静かな仕草で首をかしげた。

「氷村という存在に出会っていなかったら、話す気になったかどうかもわからん。それだけわちには、氷村は脅威だった。わちが連れ

て逃げなかったら、氷村の祖先たるあの赤子は、おそらく生きてはいなかっただろうしの」

そんな氷村と、そして自分のルーツのようなものを話すのには確かに、いい機会だったかもしれない。

けれど、一番に思うのは。

「氷村を見たとき、人間というものの受け継がれる寿命の長さを感じ知った。けどな、それでもな。同時に、逆のことも思うの」

少女の亡骸を目にし。

その少女の産み落とした赤子をさらって逃げ、知りもしない集落の、誰ともわからぬ人間の家の前にその子を捨て置いた。高い確率で、その赤子は生き残れないだろうと思っていた。

そして後に、たったひとりとなって。

少女を思い、その少女が産み落とした赤子を思い。

誰にでもなく、見上げる空に向かって、かばは呟いた。

——人の命は、なんて短い——。

少女は年端も行かぬうちに、その命を武器によって奪われたが。もしそれが無かったとしても、人ひとりの命は、とてもとても儚い。だからこそ人は、子を残すことで命を繋いで行くのだけれど。それでも。

巡だって、そうそう長くは生きられない。のんびりしていたら、気付いた時にはこの世からいなくなっているだろう。だから、巡がいなくなってしまう前に、話しておきたかった。

そして、聞いておきたかった。

かばが、人の物の怪でも、何も変わることはないよと。

出会った頃は、拒絶を恐れていた。

人々に忌み嫌われた彼と同じように、かばも巡たちから嫌われる

のではないかと。だから、本当のことを言えなかったけれど。

今は、そんな風には全然思っていない。

巡なら、たとえ状況に理解が及んでいない結果だとしても、かぼの存在を肯定してくれるだろうと、確信が持っていた。そんな風に自信が持てるようになるまで、本当のことが言えなかったなどと、臆病者だと称されても仕方がないかもしれないが。

突き放されたくはなかった。

けれど、できるだけ早く、本当のことは言っておきたかった。

だって、巡個人の寿命とは関係なく。

多分。

「わちは、そう長いこと、メグの傍にはいられないからの」

「……!？」

かぼの一言に、巡は目を見開く。

「……なんで？」

そんな風にしか、問うことが出来ない。

かぼは、そう遠くない未来に、巡の傍から消えようとしているのだろうか。だがかぼは、相変わらずヘラヘラとお気軽な笑みを巡に向ける。

「それは当然だろう。今はまだいいかもしれん。けどな、ぬしだっていずれは大人になる。ぬしがそうやって大人になって行く過程で、わちがずっとぬしに張り付いていたら、いつかきつと、わちのことを邪魔に思うようになるぞ」

「そんな」

「そうやって、いつか誰かと家庭を持つようになって、かぼがずっとメグにくっついてる訳にはいかんだろ」

コブつきならぬ、魔物つき。しかも、人間から生まれた、まるで人間のような物の怪。

まだまだ認知度の低い物の怪と一緒に、人間の社会を生きて

いくのは難しい。本人はそれで良かったとしても、周囲がそれを受け入れてはくれないだろう。得体の知らない魔物と馴れ合う人間と親しくなることにも躊躇があるだろうし、ましてや家族になろうと思う酔狂な人間は、多分数多くはない。

これからそういう時代になるのだという確信はあっても、巡が大人になるまでのわずかな時間でそう大きな変化はないだろうし、時代の変化の初めの頃というのは、逆にこれから来る時代への抵抗が強くなる時期でもある。

だから物の怪と一緒にいたら、巡にとっては辛い世の中になるだろうと。

かばは、そう考えている。

「……」

そんなことを急に言われても。

いつか大人になるなどという事実は、今の巡には、理屈でわかってはいても、心から実感することは到底出来ない。出会いがあれば、別れもあるという当然のことすらも。

突然の、いつか来る『別れ』の予告に、巡は無言で考え込むことしか出来なかった。

「ちと、早すぎたかの」

なは、と、かぼは笑う。

「別に今すぐという訳じゃあない。ただ、一生を共に歩むのは難しいなと思っただけだ」

「……」

その予定もないうちから、別れの予告などするものではない。けれど、長い時を生きるかぼにとって、巡の一生は短すぎる。かぼの感覚でのんびりしていたら、巡だけがどんどん先を行ってしまふような気がして。

「なんで……そうなるんだよ」

しかし巡にとっては、あまりに唐突過ぎる話だ。

勝手に人の前に現れておいて。振り払っても振り払っても、しつこくつきまとった上に、居候まで決め込んだくせに。最初から別れることを前提にしているなら、どうして自分についてきたりしたのか。

巡には、それがわからなかった。

「出会ったこと自体は、かぼのせいじゃなかる」
それはそうだが。

「出会ったのは偶然。別にお互いの意志じゃない。なにに出会ってしまったのだとしたら、その出会いはとても大切なものだ。違うか？」

「……」

誰も、別れるために出会わなければならない。

けれど、出会いの数だけ別れも存在する。どんなに近い人間にも、いずれは。どれだけ長い時を共に過ごした後でも、いつか必ず、

最終的には命の終焉という形で。

「出会ったのなら、仲良くしたいじゃないか。別れる悲しみに脅えていたら、誰とも巡り会えなくなってしまうぞ」

理屈はわからなくはないが。巡は、実感として、まだそれがわからない。

「それならあゝ」

間延びした声が、巡たちの会話を遮る。

芽衣だ。

「メグが結婚しなければいいんじゃない？　ずっとこのままこの家にいれば、新しい家族の心配なんてする必要ないし、私たちはみんな、かぼちゃんのことを怖がったり邪魔にしたりしないんだし」
につこりと、まるで罪を感じさせない芽衣の笑顔。

「大丈夫だよ。そしたら、メグの面倒は私が一生見てあげるしい」
芽衣、煩惱丸出した。

多分彼女は、本当に一生巡の傍にいられたらいいと考えているのだろう。巡が結婚しなければ、自分が妻のように寄り添って一生面倒見るつもりでいるのかもしれない。

ブラコンパワー炸裂で、無茶を言う。

「……芽衣……」

「おいおいおい、そりゃちょっと無理あるだろ」

「ええ」

この姉弟がヤバい道に曲がっていかないよう、一応、倫理上制止してみる律儀な朝比奈。

「でもさ……でも」

巡が大人になることも、それで新しい社会や家庭と出会うのが事実なのとしても。

「別に、四六時中一緒にいなければいけないってわけでもないだろ？　例えばちよつと離れた所にいたとしても、時々顔を見せ合うくらいのこととは出来るはずじゃないか」

「ま、それはそうなんだがの……」

同じ家の中で暮らすことが出来ないにしたらって、時々会うことくらいはできるはずだし、もしかしたら、魔物と一緒にいるのを気にしない人との運の良い出会いだってあるかもしれない。なのにかぼは、巡の傍から忽然と姿を消すようなことを言う。

けれど実際かぼは、いつかそうなるだろうという前提で巡に話をしていた。たてないう状況になろうとも。

かぼが傍にいたら巡が生きにくいとか、そんなのは多分、言い訳だ。

別れを恐れていたら、出会うことなど出来ない。そう言いながらもかぼは、いつか来る本当の別れを、恐れていた。

それは本当に、単なる気持ちの問題だけだ。

かぼがずっと巡の傍にいたとしたら。

いつかかぼは、巡の死に行く姿を、見送らなければならないことになる。

「わちも、ミズに偉そうなことは言えんの」

置いていかなければならないミズに。置いていくことを恐れるミズに、偉そうに説教していた自分も、本当はこんなに臆病者だ。

巡がこの世から消え去るのを目の前で見届けるくらいなら、そんな死に別れがまだ彼方であるうちに、離れてしまった方が楽だと。そうしてどこか、遠い空の下で。ヤツは元気かな、そろそろいい年になったかなと、思い馳せていた方が。

もういい加減生きてはいないだろうかと、想像だけで済ませられた方が、どれだけ楽かと。

これまで何度、そうやって親しい誰かを見送ってきたことか。

何度、それを逃げてきたことが――。

どれだけ繰り返しても、それに慣れることはない。

それだけ繰り返しても。

かぼの魂が、磨り減ってしまふことはない。

消耗し、自分自身が消えてしまうこともかなわないまま、これからもずっと続いて行く、ただ繰り返される、出会いと別れ。

「なんなら、メグが選んでもいいぞ。かぼが去るのを見送る悲しみを選ぶか、それとも、ぬしがこの世から去るのを見送るかぼを悲しませる方を選ぶか。好きにしていいい」

そんな。

そんな風に、言われても。

「ずるいよ……」

「そうなの、ずるいの」

そんな風に巡に選ばせようとするかぼは、たしかにズルいのかもしない。

けれど、いつか来るそれだけは、紛れもない事実だ。

かぼの次に年長である朝比奈が、ため息と共に肩をすくめた。

「まあまあお二人さん。そんなに焦って話を進めなくたっていいだろ」

ほんの少し張り詰めたような空気の中、巡とかぼは朝比奈に視線を移した。

「今すぐって話じゃないだろ？ そりゃ物の怪にとっては十年くらいあつという間かもしれないけどさ。まだまだ二人は、一緒にいいはずなんだからさ」

巡は、頷いた。

深く考えすぎていた頭を、フルリと振る。

「うん。まだ、その話は後にしようよ」

意味も無く、引き伸ばしたい訳じゃない。

「僕が大人になって、それまでずっとかぼと一緒にいて、ちゃんとものを考えられるようになってからだって遅くはないだろ。僕にはまだ、無理だ」

別れというものを考えるのも、それに対する結論を出すのも。

今しなければいけないことじゃない。

「そうか」

別にかぼも、今すぐ結論を出したがっている訳ではない。ただ事実として、いつか来るそのことを、巡に伝えておきたかっただけだ。

いつか巡にも、かぼの言っていたことが、わかる時が来る。

人と共に歩み続けるが故に孤独な、かぼの思いも。

けれど愛さずにはいられない、人と彼女とのつながりも。

人という、永い時を歩む命の、自分はその儚い断片でしかないということも、だからこそ、その儚さゆえに、命は愛おしいものなのだということも。

それを少しずつ拾い集めながら過ごすこれからを。

巡はただ、かぼと一緒に歩いていけばいいのだ。

いつかどこかで訪れる、その時まで。

これから、夜の時代が訪れます。

それは、黒くて、陰鬱で、長い時間です。

けれど彼らは、それを待っていました。

短い時間しか生きられない私たちの様にはなく
ずっとずっと永い時の中を、魂を彷徨わせながら。

そんな彼らが欲しているのは

そんな彼らのことを『知っている誰か』なのかもしれません。
そして

そんな彼らのことを『知っている誰か』と巡り会えた者は
とても、幸せなのかもしれません。

だから

『逢魔』のもとに、彼らは集まるのでしょうか――。

「あら、成瀬さんちの。どうしたの？ こんなところで」

店先に顔を出した近所のご婦人の声に、巡は幾分か下に向けていた視線を上げた。

「こんにちは。ちょっと、店番を」

おじいさんは、切らしてしまった上白糖の買出しに出かけているから、と呟く。

ここは、天笠和菓子店。

莊二郎が出かけていて留守なので、その場にいた巡が店番をつとめている。

「あらあら。天笠さんがお砂糖を切らすなんて、珍しいのね」

「いえ、実は……」

莊二郎が、店に出す菓子の材料を切らすことなど、まずない。そんな状況を作ってしまった原因は、巡——というよりは、かぼにあった。

いつものごとくに店に遊びに来ていた巡たちだが、かぼと、一緒についてきていたシンがふざけあっている内に、店の奥にある作業場の、大量の砂糖を全てひっくり返して台無しにしてしまったのだ。いかに温厚といえど、さすがに怒らない訳にはいかない莊二郎。いくらかぼが物の怪とはいえ、甘やかしては将来（？）が不安だ。ひとしきり説教をした後、取り急ぎ砂糖の買出しに出かけてしまった。

奥の部屋で正座しているかぼとシン巻き添えを食って、巡は店番をしているというわけだ。

「まあ、偉いのねと褒めるべきなのかしら。災難だったわね。気をつけないとダメよ？　じゃあ、この芋羊羹をもらえるかしら」

「あ……はい、ありがとうございます」

おたおたと、慣れない手つきで菓子を取り出し、袋に入れる巡。

「あと、包装紙を一組分いただけるかしら。包装はおばさんが自分でやるからいいわ」

「は、はい」

巡は大慌てで、ズルズルと包装用の紙を引きずり出す。

「ゆっくりでいいわよ。でもなかなか、さまになってるわね」

婦人は、そんな巡の様子を見てクスクスと笑う。

「こういうのを、お仕事っていうのよ。楽しい？」

興味津々といった体で、巡に向かって腰を折る婦人に、巡は複雑

な表情を向けた。

「楽しいっていつか……緊張します。店で物を売るのもそうだし……天笠さんは、自分で作ったものを、こんな風にお店に出してるんだなって思ったら、凄いなって思うし。でも……」

その後を、どう言葉で表現していいかわからず、巡は口ごもってしまう。

そんな巡の言わんとしていることを、婦人はわかっているとも言うように、コロコロと笑い声を立てた。

「私はここのお菓子が大好きよ。天笠さんのこれは、人が喜ぶお仕事よね。巡君にも、きっとその良さがわかるのね」
そうなのかも、しれない。

ある人は急いで、ある人は笑顔で。

この店の菓子を買って求めて行く。買うということは、お金を払うということだ。つまりが、この店の菓子には、金を払う価値がある、ということ。

それは凄いなのだと、最近になって巡は理解し始めていた。時々、天笠の家に遊びに来るようになったおかげで。

みんながこの店が好きで。

そしてかぼも、この店のお菓子が大好きだ。

そんな風に誰かが喜ぶことを。

シンや、ミーシャや、そして、かぼが喜ぶこと、を。

自分の生きる術として行けたなら、それは自分にとっても幸せなことなのだと思えるようになっていた。

「もう少し大きくなったら、店を手伝ってみるか」

よく莊二郎にそんなことを言われる。

それについては、巡も前向きな方向で考えているところだった。単なる子供相手の戯言に聞こえなくもないが、莊二郎に限っては本当にそう思つて口に出しているのだらう。こんなことで子供に社交辞令的発言をする人物ではない。

中学に入ったら。手伝つてみるのもいいかもしれない。お給料をもらう訳には行かないから本当に手伝いで。そして、もしもそうしているうちに方向を見定められたなら。

菓子作りを教えてもらうのも、いいかもしれない。

「うちには跡取りがないから、歓迎するぞ」

などと、莊二郎は言う。これも冗談ではないだらう。

それも、ひとつの道だ。

「ほら、かぼ。シュークリーム」

「うおっ！」

莊二郎が帰つてきて、かぼにと持たされたシュークリームを持つて、巡は奥の部屋に入った。人型のまま大人しく正座しているシンと、その隣でゆらゆらと揺れていたかぼは、瞬時に振り返つた。

「しゅーくりーむとなー!!」

正座をもとめせず、シュークリームに向かって飛びかかろうとした二人の手を避けるように、巡はヒョイとそれを持つ手を上に挙げた。

「反省してるのか？」

「してまーす」

巡の言葉に、綺麗にハモる、かぼとシン。

フウ、と巡はため息をついた。シュークリームをひとつずつ差し出し、自分もひとつを口に運ぶ。

甘くて、やはり、おいしい。

「そのうち、僕がシュークリームを作ってやるよ」

むぐむぐとクリームをほおばるかばは、そんな巡をキョトンと見つめる。

「なんだ。天笠のあとを継ぐ気になったのか？ 気が早いの」

そんなかばの言葉には、巡は苦笑を返すしかない。

「あとを継ぐとかそういう話じゃないけど。具体的に言うのはまだ早いっていつか、怖いけどね。だけど」

だけど。

「かばの喜ぶものを、この手で作って、それをかばに差し出せる人間になりたいよ」

かばや、ミーシャやシンや。両親に姉。朝比奈、荘二郎。他にも、沢山の人たちに。

笑顔になつてもらえる、何かを。

そうして。

そうしてかばが、別れの悲しみよりも、傍にいる喜びを感じてくれるように。

そんな、人間になれたら。

ほんの短い時でもいいから、かばが帰りたいと思える場所になれるなら。

「お子様は、本当に前向きだね」

「別に。大人になっても、前向きでいるよ」

口で言うのは簡単だが。その気でいなければ、そんな風にもなれない。

「悪くないの」

「うん。悪くない」

クスクスと笑いあう二人をよそに、シンはシュークリームの最後

のひと欠片を、その口に放り込んだ。

「人間って、面倒くさいな。オレは別にいつまでだって、あの家に居座るけどな？」

「アハハ……」

どういつ未来が待っているかなんて、本当はわからないけれど。幸せだったと言える一生は多分、幸せなひと時の積み重ねで出来るものだ。

だからできるだけ、そんな時と一緒に過ごせるように。ただ、それだけのために。

だから、例えそれが短い時間だったとしても。無くても良かったなどと、とても言えやしないのだ。

巡が遺して行く、そんな短い時の欠片を、永い時を歩むかばが、ずっとその胸に抱えて行けるように。

かばが存在し続ける限り、その短い命の煌めきが、消えて無くなることのないように。

だから、気付いて欲しいのです。

『逢魔』という、特別な力を持つ、あなたに。

悠久の時の、ほんのひと時を、共に、歩んで行けるように。

あなたと私が、共に、優しい微笑みに——包まれるように。

<逢魔が時！・了>

…… 最終話 …… (後書き)

これまで 逢魔が時！ をお読みくださりました方々、ありがとうございます。

本当はもっと書くべきエピソードなども沢山あったように思うのですが(シンやミーシャなども、もっと掘り下げられますしね)、とりあえずはこれにて完結となります。

このお話は、私が考える別のお話(もうちょっと時代が進んで魔物うようよ的な)の前夜のような要素のものであったのですが、なにぶんその後執筆活動が滞っておりまして、この後のお話を発表するというお約束は到底出来ない状態であります。

いやいやいや、いつかそのうちと思いつつ、出来もしないことを希望的観測で口にするモンじゃないよとか、いやいやいや……。

ともあれ、執筆活動自体は日々の生活の合間に行っておりますので、次回作がどうなるかはさっぱりなのですが(この作品自体も再録ですし)、また何かの作品でお目にかかれれば幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1341y/>

逢魔が時！

2011年12月25日20時40分発行